郷土の私塾に入つて國語漢文其の他の普通學を學び、夫より　京して四ケ年間遊學し、後兵役生活の後思ふ處あつて前橋在龍藏寺住職青柳興賢僧正に就き薙髪した。爾來佛教生活に入つて其の傍新聞雜誌上に寄稿して居たが、大正九年十一月以降評論の筆を捨てゝ、文筆上の兒童教化に意を注ぎ、專ら少年小説、歷史物語等の創作に沒頭し、目下引續き都下のあらゆる少年少女雜誌に寄稿し發表しつゝある。著書としては大正五年一月東京日月社より出版せる「あゝ宗教の危機！」がある。

現住所　群馬縣勢多郡東村荻原

故益頭峻南　マスズシユンナン（畫）

名は尙志、靜岡藩士益頭峻次郎の男で、嘉永四年二月江戸下谷區西町に生れ、少時より昌平黌に入つて漢學を研究し、又明治の初め横濱學校に入つて外國語を學び尋いて大學南校に入り、傍ら榊原健吉の門に入り、擊劍を習ひ成業の後陸軍兵學寮の教師となつた。明治八年椿山門下の南畫家野口幽谷に就いて、その畫風を學んで一家をなした。氏は其の後公私の展覽會に其の作を出品して常に賞與を得、遂に文部省美術展覽會の開催されるに至つてその第二回より第七回まで日本畫部の審査委員となつた。その作品は第二回に「幽香楚々」第三回に「山梁及時」第四回に「忠孝雙善」「威震秋江」第五回に「黑牡丹」第六回に「玄雲匝地」第七回に「洞庭雪後」を出して何れも好評を博した。氏は性質謹嚴で頗る恬淡世俗と離れてゐた。而もよく子弟を指導して椿山の所長を傳へ、花鳥は最もその得意とするところであつた。峻南の號は富士山の南に住するの故を以てゞある。大正五年四月二日年六十六で歿し、高輪泉岳寺に葬つた。

增田篤夫　マスダアツオ（翻）

明治二十四年四月神戸市東出町に生れ、文學に志して翻譯「ジヤンモレアスの秋」紹介「私の觸れ得たクロオデル」評傳「詩人朽葉」「有島武郎」「有島生馬」「福士幸次郎」等數種の作がある。氏は多年病苦の錯亂と薄明りをもつて今日に至つた一時早大に籍を置いて、其の餘暇に佛蘭西語を學び佛文學の研究をなした。しかるに大震災のため苦心十年の原稿全部を鎌倉に於て燒失した。

現住所　神戸市平野神田町五三五

益田玉城　マスダギヨクジヨウ（畫）

名は珠城、玉城はその稱で、堂號は長久畫房と稱す。明治十四年一月一日宮崎縣都城町に生れ、夙に川端玉章に師事して圓山派を研究し、更に東京美術學校日本畫科に入り明治三十七年卒業した。殊に山水、花鳥、人物を能くする。明治四十二年川端畫學校教授に、同四十三年女子美術學校講師に歷任し、傍ら諸種展覽會に出品して授賞數回に及び、明治三十四年、丹靑會に「粟に鶉」の圖を出品して御用品となつた。帝國繪畫協會の會員で、天眞會の幹事である。文展には「かの子やの娘」「花の後」「紅葉名所」を出した。

現住所　東京市小石川區大塚窪町二四

增田龍雨　マスダリユウウ（俳）

名は藤太郎、明治七年四月七日京都祇園町に生れ十三歳の時、繪入新聞及歌舞伎新報の記者岡田龍吟の家に寓し、その家の客分たる右筆岡田藤枝といふ老女について八年の間和漢の書を研究した。義父は雷堂龍吟と言つて雪門の宗匠であつたので氏も雪中庵雀志の門に入り今尙雪門に籍を置いてゐる。しかし二十五歳の頃正岡子規の著「俳句界四年間」を一讀して大に感激し、「ホトヽギス」「晒井」「俳聲」等へ投句し、所謂新派の諸氏と交るやうになり、一方には若菜と云ふ雜誌に依り、虎杖會といふ會によつて主として舊派の初步者を本道へ導くことを努めた。氏の句は大正句選「新派の俳句」「玉霰」「十風」「現今俳家五十家選」等に蒐錄されてゐる。

炎天や蛙啼きゐる寺の中
夏雲や森を分けたる道一つ
帚木や明け放れたる空の星

故股野琢　マタノタク（詩）

播州龍野の藩儒股野景質の長男天保九年八月二十一日に生れた。夙に漢籍を修め明治四年徵に應じて宣教掛を以て教部省に出仕し後太政官に入り累進して內閣記錄局長に昇任し同二十二年宮內省に出仕して書記官文事祕書官局長別當帝室博物館總長內大臣祕書官長等に歷任し後臨時帝室編修官長兼宮中顧問官として宮內官中の古老であつた。又號を藍田と稱して詩書に巧みであつた。大正十年九月八日以來胃癌に罹つて療養中十三日午後八時半薨去した。享年八十四。靑山に埋葬された。

輓二春畝公一排律三十韻

公也傑中傑、雄心衝二斗牛一、夙懷經二世略一、屢駕二渡歐舟一、櫛沐萬艱歷、讒譽一笑酬、對揚修二憲法一、啓沃翼二皇猷一、堪レ壓蕭曹輩、欲レ凌伊呂儔、朝班超二故侶一、輿望冠二群侯一、展墓思二衣錦一、匪躬忘二首丘一、期全二梁棟任一、敢意二子孫謀一、同敬二忠貞篤一、還欽二學德優一、英資眞濶達、和氣自溫柔、時遁二朝廊劇一、儘催二風月游一、龍蛇騰二綺席一、烏鷺落二紋枰一、贊襄情倍懇、覃竭老無休、乞レ暇辭二瑤闕一、觀光赴二滿洲一、送迎途雜遝、頌禱衆呀咻、忽覩二擬彈者一、安知二刺客流一、狙擊迫二三步一、遭難驚二五洲一、受レ傷終不レ起、招レ禍果何由、指導義扶レ弱、頑迷恩化讐、偏悚軫宸憂、豈能妨二國際一、森北餘二仙館一、湘南鎖二畫樓一、人間芳墨貴、篋底舊詩留、冥想音容在、歡踪往事悠、彼兒縱二寸斷一、斯恨有二誰收一、軍艦邀二遺體一、神官典二庶羞一、肩摩成二堵列一、淚滴灑二街頭一、宿將陪二靈柩一、嚴儀擁二素旒一、地方埋二玉樹一、魂永護二金甌一、冷雨草皆泣、陰雲天亦愁、勳名山嶽重、賜レ誄照二千秋一、生前の住所　東京市赤坂區仲ノ町五

町尻量弘　マチジリリヨウコウ（畫）

子爵量衡の二男で慶應二年正月五日京都に生れた

明治四十年四月襲爵仰付けられて正四位に叙せられ掌典に任じ御歌所參修となつた。舊堂上派歌人として知られ

田家早梅

新藁にふきあらためて冬こもるたふせの軒に梅かをるなり。

曉山の雲

眉引の横山みえてほの〳〵としらむみ空に雲ぞいざよふ。

水邊虫

草川の淺瀨の波のよるばかり聞えそめたる虫の聲かな

の如き歌を作つてゐる。

現住所　京都市上京區寺町通丸太町上ル松蔭一三七

町田曲江　マチダキヨクコウ（畫）

名は春之助。明治十一年三月、信濃國中野町に生れ、十九歲の時菊池契月と共に京都に出て、內海吉堂に就いたが間もなく東京に出て白馬會研究所に入り、後、寺崎廣業の門に入つて狩野派を研究した。文展へは第一回に「悲報に接した佛徒の歩み」を出して三等賞を得た。明治四十三年一月佛國に遊び歐洲諸國を歷遊して四十五年歸朝した。其後文展には第九回に「三大門」第十一回に「五十鈴川の川上」後又「猫」を出した。大正六年矢澤弦月、菊澤武江、小山榮達、三井萬里、古川修等と藝術社を起した。

現住所　東京市麹町區元園町一丁目五〇

松居松葉　マツイシヨウヨウ（劇）

明治三年二月仙臺に生れた。名は眞玄、松葉はその號、又駿河町人の號もある。國民英學會を出た外學歷はない。曾て萬朝報の社會部主任となつて健筆無類、好個の記者と稱せられた。氏夙に佛語に通じ藝術的の天性を有してゐると言はれた。三十二年臨時萬國大博覽會監査役となつた。先に演劇研究の爲二回歐米に學び彼地の名優と交を訂し

石に脚本作家の老手であることを思はせる。

因みに氏が萬朝報記者時代に筆の早い記者として同人仲間から推奨されたものであつた。いや萬朝報内でとは言はない、恐らく中央の新聞界で氏ほどの速筆はあるまいと言はれた。工場から一段なり二段なり不足だと言つてくると直ぐ執筆する。一段の原稿を書くに要する時間は僅かに約二十分だといふから偉いと言はねばならぬ。福知櫻痴居士の速筆も有名なものだが速筆は記者として立つに最も有要な資格の一である。最近の史劇に「吉田松陰」がある

詩聖こゝに三百年の落葉かな（沙翁誕生地）
夏山や燈影にゆらぐ椰子の花（香港）
金色の聖母の像や夏木立（巴里）
新緑やローマ時代の古城壁（ロンドン郊外）
合歡の花赤道の日の入らんとす（新嘉坡）

現住所 東京市外落合村宇落合六〇四

故松井直吉 マツイナオキチ（美）

長をしたことがある。今やまと新聞の主筆として健筆を揮つてゐる。

現住所 東京市芝區芝公園八ノ三

松井友石 マツイユウセキ（詩）

名は廉、東京の詩人、雅文會員で其作の多くは「大正詩文」に發表してゐる。

隱居

寂寞無二媒遥一、隱居而放言、身無二衣冠累一、心知二道義尊一、深巷月明夜、時有二僧敲一門

地球圖

太初一團氣、凝爲二大球一、水流而山峙、分成二五大洲一、賢愚球上生、賢愚球上死、悠々千萬年、空留興亡史、我亦球上人、眇如二一粒粟一、四千萬方里、功名無レ可レ錄、雖レ曰二一粒粟一、胸中天地寬、自有二臥游計一、披レ圖枕上看、

語を起すこと雄偉にして渾然、而も以下曲折自在であつて、よく題意を盡してゐる。凡手の到底出

岐阜縣の人。明治八年米國に留學して理科農科其他を研究し歸つて東京帝國大學教授となり二十一年理學博士の稱號を得、それより農科大學長、文部省專門學務局長等を歷任し、文展第一回より第四回迄各部の審査員となり、又主任となり、美術鑑賞家として高嶺藤岡等の諸氏と共に重きをなしてゐたが、明治四十四年二月年五十五で病歿した

松井柏軒 マツイハクケン（文）

氏は新潟縣の人、名は廣吉、士族松井正恒の長男で慶應元年十一月二十三日生れ夙に明治法律學校を卒業して操觚界に入つた。柏軒は其の號、嘗て越佐新聞の記者となり、上京して博文館に入り長い間編輯に從事した。轉じて中央新聞主筆者となり、三十二年同社より派遣されて歐米に遊んだ。歸朝後清國義和團暴徒事變起つた時氏は會社の從軍記者となり戰時通信に從事した。其著に「新撰大日本帝國史」「支那三國時代」「米國南北戰史」「伊太利獨立戰史」等數種ある。曩に太平洋通信協會

來るところでは無い。

旭光照波

坤球向レ東轉、世界欲二晨時一、爲想混沌始、
氣未レ分二兩儀一、忽見二天水際一、金輪一線奇、
散爲二千萬線一、煌耀漾二漣漪一、紅旭大二於盤一、
矐矐出二咸池一、燭龍漸離レ水、影挂二扶桑枝一、
炎光何赫々、嚴似二我皇威一、黎民忠義志、
萬古誓二傾葵一、

勻水之を評して局度宏大にして學殖の深きを見してゐる云々と。氏は律詩を得意とする。

山中觀瀑

山氣撲レ衣冷、芒鞋入二幽磎一、忽見十丈瀑、
林間挂二白霓一、飛泉勞二厓下一、濛々霏霧迷、
鏘然如レ擊磬、寒聲漲二碧溪一、餘波不レ遷レ怒、
靜流分二東西一、顧與二智者一樂、溪上來移棲、
此事恐難レ就、詩成掃二石題一、

松浦爲王　マツウライオウ（俳）

名は磐、明治十五年一月八日横濱伊勢町に生れ銀行員として業務に携つてゐる餘暇をもつて俳趣を味つてゐる。氏の俳道に入つたのは古いことであつて、既に明治二十八年頃「ホトヽギス」一號發行前後であるさうな。從つて内藤鳴雪翁、高濱虛子、河東碧梧桐、下村爲山、森々、愚哉、嘆水等の諸俳家は勿論正岡子規居士にも面接して其の教を受けた一人である。氏の句は「ホトヽギス」「瀧柿」「國民新聞」等に投稿してゐるが、「ホトヽギス雜詠集」に掲載してゐる。餘技としては下村爲山畫伯に就て畫を研究してゐる。

春の日の林明るし市原野
石蕗咲くや茶殼をあびて窓の下
畑稻荷構ふ大家の飾りかな

現住所　東京市麻布區笄町一八二

松浦一　マツウラハジメ（文）

氏は東京帝國大學文學部卒業後、天臺宗の佛教中學校に英語教師として教鞭を執つたこともある。目下東大文學部講師として得意の文學論を講じてゐる。氏さきに帝大の講演集を「文學の本質」と題して公にしたが大に斯界の注意するところとなつた。續いて「生命の文學」「文學の絶對境」を著し「死の文學」を書いた。今日文學に關する出版物は少くないが、氏の著書のやうに深刻なものは他に見られない。これ一は氏が佛教の造詣深く宗教哲學の頭腦を藝術的表現によつて書かれてゐるがためである。高崎市の解脫俳人村上鬼城氏と無二の親友である。大正十二年厨川白村氏の死後其の後任に擬せられたこともある。兎に角大なる未來を有する詩人的文學者である。最新著の「文學の白光」には創作的生活、自然を心とする心、文學の人間味、文藝の香饭其他合せて八篇の文章が收められてゐる。氏がこれらによつて、一切の物の中より靜かに涼しく光る魂の光を見る喜ばしさが表れてゐる。

現住所　東京市牛込區辨天町一三

松浦鸞洲　マツウラランシユウ（詩）

名は厚、肥前唐津の舊藩主で、鸞洲伯として漢詩壇に知られてゐる。隨鷗吟社の協贊員で大正詩文にも多くの詩文を寄稿してゐる。

勅題社頭曉

鸞鳳飛翔處、正知二皇運昌一、煌煌新旭上、
萬古仰レ光、

日下勻水之を評して、渾厚肅穆の中に、自ら高華遒麗之氣をあらはしてゐると言つてゐる。また大正詩文の創唱者月山高橋作衛博士の歿後、次のやうな詩を發表した。

大正詩文大會席上、和二勻水先生原韻一、
追二懷月山高橋博士一、

洛下名賢會二一堂一、黃花紅葉引レ情長、
月山去後春秋過、壁上空餘詩幾章、

又紀元の佳節に當つては

紀元節植二綠蓼梅四株于碧龍潭一有レ作

偶乘二佳節一種二寒梅一、花傍二碧龍潭水一開、
綠蓼清歩似二仙女一、露香拂拂襲レ人來、

と、日下勻水氏は碧龍潭は鸞州公の梅澤莊中にあると、

が、疎影清淺幽趣可想とゆかしく思うてゐる。
氏は相州梅澤に別墅があつて、梅華農屋と言つて居られるが、更に又層樓を起して「天空海濶」と言つてゐる。大正十一年十月七日盛宴を開いて都下文墨の士を會して中秋の觀月詩會を開いた。氏豫め劉賓客中秋觀月詩を頒つて其の韵に次して諸家の作詩を懇望された。老大家日下勺水は次の詩を示して伯の滿足を得てあつた。

湘南起二新閣一、縹渺瞰二東瀛一、大島髻鬟碧、
畫洲烟水清、經聲鍾二衆美一、讌飲會二群英一、
況遇二高秋節一、金風來二玉京一、
現住所

松岡映丘　マツオカエイキユウ（畫）

名は輝夫。明治十四年七月九日播磨國神崎郡田原村に生れた。母は賢婦人の評高き小鶴女史であり漢學者松岡操。號約齋の五男で九歳の時兩親と共に上京して、十五歳の時橋本雅邦の門に入り、十七歳の時山名貫義の門に移り、大和繪派を修め、明治三十二年十九歳のとき東京美術學校日本畫科に入學し、主として寺崎廣業の指導を受け、三十七年優等の成績をもつて卒業し殊に歴史人物をよくした。それより横濱の縣立高等女學校の教諭となつたが三十九年辭して東京に歸り、浮世繪、挿繪畫家として有名なる梶田半古の紹介で四條狩野折衷派の川合玉堂の門に出入し、四十年土佐派の歴史畫家小堀鞆音に薦められて東京美術學校助教授となり今日に及んだ。又四十二年の頃小林古徑、前田青邨、今村紫江、伊藤紅雲、田代古崖等と歴史風俗の寫生會を起し、大正五年には吉川靈華、鏑木清方、結城素明、平福百穗、田口掬汀等と金錦社を起した。展覽會へは美術學校一年生の時丹青會へ「北の屋かげを」出したのが處女作で文展へは第六回に「宇治の宮の姫君達」第七回に「住吉詣」第八回に「夏たつ浦」を出して入選し、更に第九回に「御堂關白」を出品して三等賞に入り、第十回に「室君」第十一回に「道成寺」を出すに及んで遂に特選に入り、大正八年帝展審査員に擧げられた。氏は極めて藝術的精神といふ事を第一義として他の多作家のやうに濫作をしないで、研究に研究を重ね、内に大いに熱するものがあつて始めて筆をとるのである。大正十三年帝展に不滿の點があつて委員辭任の噂あつたが、規定が希望通り改正されたので受諾した。
現住所 東京市小石川區雜司ヶ谷町一一五

松岡　壽　マツオカヒサシ（畫）

文久二年二月岡山市に生れた。明治六年、川上冬崖に就いて洋畫を研究し、後フオンタネージ・マカリに學んだ。十三年伊太利に留學し、羅馬美術學校繪畫科を卒業した。後佛國に渡り九年の後歸朝し、二十二年、小山正太郎、淺井忠、五姓田芳柳、山本芳翠等と明治美術會を組織し、後東京高等工業學校長となり、文展では第一回より第七回まで洋畫部審査委員となつた。油繪靜物を得意とする。
現住所 東京市本郷區曙町七

松岡正雄　マツオカマサオ（畫）

明治二十七年三月奈良縣宇陀郡伊那佐村に生れ、大正六年、東京美術學校師範科を卒業し、長野縣飯田中學に教鞭をとつた。作には第三回二科會に「山上より」「村の子供」等第四回に「國旗のある風景」「黒猫のゐる風景」「故郷の春」を出して好評を受け、又大正六年、光風會に出した「風景」は宮内省の御用となつた。
現住所 東京市本郷區駒込千駄木町三十小笠原方

松岡　讓　マツオカユヅル（小）

明治二十四年九月二十八日新潟縣古志郡上組村大字村松に生れた。大正五年東大文科哲學科を卒業して芥川龍之介、久米正雄氏等と共に漱石門下の有名なる作家であるが、これまでは他の文士のやうに數多く發表はしなかつたが近來書き出した。深刻で力のある書き振りであると言つて或一部の評家は久米氏等よりも未來ある作家と賞讃してゐ

る。作には「法城を護る人々」外數篇の小說がある。大正七年夏目漱石遺愛の令嬢と結婚して一層世人の注意を集めた。

玄文社より發行した氏の著書「地獄の門」は新思潮同人からの創作全部を集めたもので、卷頭の「法城を護る人々」は文壇のみならず宗教界にも問題を惹起した名作である。大正十三年六月京都鹿ケ谷法然院町に轉住して「法城を護る人々」の續編を執筆した。（九官鳥）

現住所 東京市牛込區早稻田南町七

松尾竹後 マツヲチクゴ（俳）

名は熊次郎、明治十五年十一月五日福岡縣山門郡東山村大字大草に生れ、父は舊柳川藩家老、母は鄕士の豪族の家に生れた人であつた。氏は中學校入學後事情あつて四年で退學し、最初の目的たる美術學校入學の希望を達しないで、四十年春上京して東京護謨株式會社に入つて今日に至つた。三十四年頃より「ホトヽギス」に親しみ、北原白秋氏等と高踏的な生活をやつてゐたが、其後北原氏が「文庫」や「明星」等に名を出すやうになつた頃から、氏も同志と共に句會を起すやうになつた尙母方の叔父なる人の感化にもよつて句の味を解するやうになり「ホトヽギス」「寶船」等に投句するやうになつた。其の後久留米の竹南、竹三郎等と交り、大連の十歩老や又玄等と相識り、四十年より鼓竹、春沙と共に「寶船」の選者に推された。氏は主として「寶船」「俊鳥」等に投稿し、其の句は「藻花集」に揭載されてゐる。

年棚や夜の香のこる人貌

震災前の住所 東京市本所區向島新小梅町三

松崎天民 マツザキテンミン（文）

岡山縣備中阿哲郡落合の人で、小學校を優等で卒業の後諸所に放浪して遂に記者生活に這入つた。別段學歷は無いが天才的頭腦を以て觀察し明敏に考察したものを頗る流暢な文章にて表現してゐるしかし其の題材は多く頽廢的なものであつて、氏の妻女に對する懺悔文や過去經驗の告白文などは涙なしには讀めぬ。「女人崇拜」は著者一流の女性觀察記であり、「新聞記者懺悔錄」は氏が嘗て都新聞より二六新聞へ、二六新聞より大阪新報と轉々して、終に新聞界を去つて、所謂無任所記者となれる經路を最も流麗暢達の文で叙述したものである。最近の作に「田舍新聞、田舍政治家、田舍藝者」等がある。夫人は整容の業に從つてゐる。

現住所 東京市

松平破天荒齊 マツダイラハテンコウサイ（詩）

名は康國、東京の詩人、其作は「大正詩文」「太陽」其他に寄稿し、誦すべきものが少く無い。現に「雅文會」の編纂係に當つてゐる。

東照宮

晃嶽巍然聳、雲巖我一攀、英雄餘三寢廟一、
金碧耀二溪山一、功出二織豐右一、道存二王覇間一、
如何背二遺志一、彫繪極二斕斑一、
華嚴瀑大湖千頃水、一瀉劈二峻嶂一、厓腹呀然陷、
瀑身無レ所レ憑、力雄能合レ派、勢急不レ成レ層、
誰道二杞憂妄一、蒼天危欲レ崩、

從來日光山を詠んだものは少くないが概ねその一端を得て其他に及ばない。氏は東照宮已下七境を擧げて、鏤心刻骨の作を示した。

醉後題二禪院一

十二萬年何倏忽、冥靈根枯彭祖歿、
北邙悲風吹二白楊一、天顏壽跖具朽骨、
世人可レ憫祈二浮屠一、偏求レ解二脫生死迷一、
一切經文書妄語、釋迦冷笑衆生愚、
神仙不レ可レ求、富貴亦難恃、
達哉王無功、常游醉鄕裏、
我輩行樂本無レ方、手提二酒壺一入二道場一、
大酌連飮澆二胸冨一、淋漓興到漫猖狂、
聞說佛本不レ解レ飮、一杯試酌般若湯、
寺僧來語汝何物、童酒入レ門已不レ可、
醉謔吾祖豈無レ報、來世難レ免魔界墮、
聞之且唱南無妙、壇前木魚開レ口笑、

春石之を評して「用筆舌の如く揶揄極めて妙、黄面亦まさに色を失ふべし」と蓋し適評であらう。

現住所

松田學鷗　マツダカクオウ（詩）

名は甲、字は士幹、元治元年七月岩代國若松に生れ、東京攻玉社の前身攻玉塾に入つて普通學を修めたる後土木科を專修し、十五年參謀本部測量課に入り地形測量學を修め陸地測量手に任ぜられ、四十五年朝鮮總督府臨時土地調査局監査官を拜命し、大正七年の春これを辭した。其の後同總督府遞信局囑托を拜命して、現に同局吏員養成所教務並に朝鮮交通歷史資料蒐集に從事してゐる。氏は餘暇をもつて作詩に從ひ令名がある。氏は最初明治十九年馬杉雲外、市川湫村に就學し、其の後野口寧齋、岩溪裳川、本田種竹、森槐南の諸大家に學んで隨鷗吟社員となり、京城に「忘機吟社」を設け、外に朝鮮新聞、朝鮮及滿洲（雜誌）朝鮮司法協會及朝鮮警察協會の諸雜誌新聞の詩欄を擔任し「長白遊草」の著書を出してゐる。

大正丙辰四月將レ赴二白頭山一有レ作

笑埋征裝快欲レ呼、白頭好去度二崎嶇一、
敢言秘境尋二詩句一、須看二名山一入二畫圖一、
虎吼樹陰雲作レ幕、龍潛潭底月浮レ珠、
煙餐露宿深叢裏、何厭艱辛役二老軀一

は實に其の卷頭の詩である。

氏はまた橘道守、佐々木信綱、井上通泰の諸家に就いて作歌を學ぶこと二十餘年の長きに亘つてゐる

江を渡る鐘のひゝきに夢さめて寺の名を問ふ苫舟のうち

渡し呼ぶ聲に芦間の雁立ちておく霜白く舟横はる。

等詩趣豐かな詠が少くない。

現住所　京城初音町一〇二

松田霞城　マツダカジヨウ（畫）

名は政良。安政四年十二月羽後國秋田に生れた。日本畫を獨習して明治二十七年日本畫速成講習會を開き、次で各府縣に招聘せられ、講師となる事百數十回に及んだ。「日本畫速成法」の著がある。日本美術協會日本畫部の幹部格で所謂協會派十人組の一人である。大震災後伯爵芳川寛治氏後援のもとに島崎柳塢、佐藤紫烟、高取稚成等の諸氏と共に多くの作を試みる事になつた。

現住所　京都市洛東淨土寺町元眞如堂

故松田秋水　マツダシユウスイ（書）

出雲松江の人、名は德卿、秋水はその號である。少より學を好んで經史を和田義八郎に受け、又畫を嗜んで松原文忠に學んだ。年五十の時官を辭して詩書畫を樂しみ風流を事として月日を送つた。各地の名山大川を跋涉して屢々東京に遊び、詩を大沼枕山に、書を長三洲に問ひ、到る處筆を揮つて虛日が無かつた。今上陛下東宮の御時御成婚を祝して絖本に天保九如の圖を作り七律を題して奉獻した。性頁恭謙で親に孝行であり、又人と爭ふことがなかつた。しかし子女の教養は頗る嚴格であつた。明治三十五年九月二十八日八十四歲で病死した。

故松田雪柯　マツダセツカ（書）

文政二年伊勢の山田に生れ、京師に出でゝ經書を猪飼敬所に學び又兼ねて書を研究した。明治十一年東京に行き段玉裁の述筆法を說き、楊惺吾に遭つて後大に覺るところがあり六朝の書を唱道した。十四年病んで歸鄉し終に歿した。年六十三。同年十二月同人湖心亭に會して翁を祭つた。氏の書は貫名海屋を學んで造詣する處があつた。湖心亭に會せる同人の翁のことを知るに足るべき作がある。卽ち三島中洲の「聊得軒記」矢土錦山の「亦樂社記」川田甕江の「書法歌」等である。雪柯と楊惺吾との筆話を見るに、

雪柯「敝寓厨房なし、酒飯を設くる能はず、只苦茗を供するのみ、厭ふなくんば請ふ寛話せよ」

楊惺吾「茗香藝を談ずるは正に我が輩の樂事なり肉食するものは鄙し、古より然りとなす、云々」

もつてその生活の貧と斯道へ精進の眞劍さがわかるであらう。

懷古

風連ニ遙空ニ雁亂行、　水程山驛究ム途長、
龍城憶起當ル年事、　矢矧橋頭立ニ夕陽一、

故松波資之　マツナミスケユキ（書）

廣島在の鄉士の家に生れ、京都に上つて德大寺家に仕へ、歌を香川景樹に學び、遊山と號して頗る歌名あつた。景樹の子景恒歿してより其の東塢塾を主宰した。後香川長門介の猶子となり、後北面の武士松波家を繼いで大學大允と稱した。維新の後皇太后宮の內舍人に任じ、雜掌に轉じたが、太后崩御の後橫濱に閑居し、明治三十九年九月十三日年七十七で歿した。

うづら鳴く野を尋ぬればいにしへの
　都のあとときくぞかなしき
夕されば雲吹きはらふ聲すなり
　月まつ山のみねの松かぜ

松根東洋城　マツネトウヨウジヨウ（俳）

名は豐次郎、伊豫松山の人、東京帝國大學卒業の後、宮內省に入つて書記官となつた。傍ら正岡子規の影響をうけに句作に耽り遂に一方の宗匠となつて今日に至つた。

春雨や皆出拂ひし茶屋の傘
のどかさに寢てしまひけり草の上
しづしさや瀧三段の峰の秋
ころ〳〵と鶉なきけり粟の月
機の音も眞晝しづかや三十三歲

現住所　震災前住所　東京市京橋區明石町六一

松林桂月　マツバヤシケイゲツ（畫）

本姓は伊藤、名は篤幼時松林家に養はれて其姓を冒す。字は子敬、別に玉江漁人、香外居主人の號がある。明治九年八月十八日山口縣萩町に生れ、夙に野口幽谷に師事して南宗派を修め殊に花鳥、山水を能くする。明治四十一年以降文部省美術展覽會に出品して褒狀及三等賞を受けること數回、其他諸の展覽會に出品して銀賞數回、銅賞及褒狀等數十回を受け、且つ皇后陛下、皇太子殿下の御前揮毫を勤むること前後數回に及んだ。帝國繪畫協會の會員、日本美術協會、日本畫會、南宗畫會の幹事である。文展出品中「秋山晩晴」「松林仙閣」「秋の聲」等は最も好評のあつたものである。夫人雪貞女史も亦大層畫名がある。大正八年帝展審査員となつたが大正十三年思ふところあつて辭任した。氏は餘技として漢詩を善くし、畫論も亦堂々を以て聞えてゐる。

題ニ自畫竹一

不レ作鷗波無ニ節枝一、　直將ニ勁氣ニ寫ニ清姿一、
華山墨竹成ニ千古一、　今我嗟難レ出ニ一奇一、

悼ニ乃木將軍一

高潔常持レ己、　豈求ニ身後名一、　憤レ時兼嫉レ俗、
一殉七生誠、　白髮老臣淚、　黃泉先帝情、
神州鐘ニ正氣一　頸節仰ニ崢嶸一、

尚氏の率ゐる天香社畫塾は成績頗よく常に好評を博してゐる。

現住所　東京市麻布區笄町四三

松原三五郎　マツバラサンゴロウ（畫）

靈堂と號す。元治元年六月岡山に生れ、一世五姓田芳柳に就て洋畫を學んで教職に就いた。明治二十三四年頃大阪に移り、同門、山內愚仙と共に大阪洋畫の建設に盡し、二十七年、關西美術會を起し、後又天彩畫塾を開いて後進を指導した。門生頗る多く、鹿子木孟郎、中川八郎、大橋康邦、滿谷國四郎、德永仁臣、瀨尾覺藏、橋本木蓼、高橋文三、小西種道、住田良三、及び閨秀日本畫家松

本華羊等も共門に學んだ。
現住所　大阪市天王寺常盤通操ケ辻

松原至大　マツバラミチトモ（詩）

明治二十六年三月千葉市寒川長町に生れ、千葉中學校　經て早稲田大學英文科を卒業し、東京日々新聞學藝部に勤務してゐる。主として「早稲田文學」「詩聖」「女性改造」「音樂グラフ」「近代音樂」「純正詩社雜誌」「令女界」「少女畫報」「コドモノクニ」等に執筆してゐるが、詩集「ひとつの路」少女詩集「母の御手」少女物語集「春の日」童謠「あさね」（弘田龍太郎氏作曲）少女小曲集「春のお船」（室崎琴月氏作曲）等は特に努力の作である。氏の父は村山自疆と言ひ熊本出身の漢學者であつて冥々と號した。明治三十年前後國漢の著書があり、叔父の中島幹事は筑山と號して文章學に關する多くの著書がある。この二人は落合直文、阪正臣、依田學海の諸氏と共に東京神田に文章專修會と云ふものを開いて可なりの權威があつた。

現住所　千葉縣市原郡八幡町

松原岫雲　マツバラユウウン（小）

名は岩五郎、嘗つて二十三階堂と號した。慶應二年八月、伯耆國淀江町に生れ、「女學世界」の主筆をしたことがある。「最闇黑の東京」の著書の外、「長者鏡」「かくし妻」等の作を出してゐる。
現住所　東京市本鄉區駒込林町八一

松村英一　マツムラエイイチ（歌）

明治二十二年十二月三十日東京芝區愛宕下に生れ熱田壽常高等小學校を卒業したる外取立てゝ書くべき學歷は無いが窪田空穗氏について短歌を學んだ。一時讀賣新聞記者となつたことがある。歌集「春かへる日に」「山すげ」及び「現代一萬歌集」「現代短歌用語辭典」等の著がある。短歌雜誌「國民文學」の編輯に從つてゐる。

たまり水夜空うつしてひかる時老いたる父を思ひつゝ歩む
はるぐ〳〵とわが來しゆゑに旅づかれねぎらひたまふ父にありけり
何ごとか父はいひたまふ門口に車とどめてきけばうれしも
ひたすらに悲しきものはわが前に老いて語れる父の聲かも
ふるさとの奥のさしきはくらければ父の聲音も親しくきゝぬ
秋の照り水減りしたる蓮池に小鰕はひをり底濁しつゝ

現住所　東京市小石川區大塚坂下町八二

松村みね子　マツムラミネコ（歌）

埼玉縣平民吉田二郎の長女で明治十二年二月生れた。本名は旨子と言ひ、日本銀行理事法學士片山貞二郎氏の夫人で、有名な閨秀作家である。女史は佐々木信綱博士の嚴父故佐々木弘綱時代からの心の花同人として、短歌に英語に翻譯に行くとして可ならざるなき天才を發揮してゐる。曾てダンセニイ卿の脚本を譯した時、その原著の理解と譯文の正確とに對し斯壇のオーソリテイなる坪內逍遙博士も嘆賞の聲を惜しまなかつた程である。尙心の花揭載の小說「最初の一頁」を處女創作として長篇の起稿に從つてゐるさうである。女史は先にダンセニイ卿の脚本全部譯了の後更にシングのアドラの翻譯に着手し愛蘭戲曲集の完成に力めて既に數卷を出した。愛蘭文學は佐藤清氏の如き造詣深い人は別として、同じ英文學者でも皆一樣に至難とするところである。それを巧みに譯了して原著の氣分を出す女史の文才を世の驚異するは無理もない。分らない處はあらゆる人に訊きその上原稿を日本有數の英語學者本田增次郎氏に見て貰つたと言ふことであるが、それで見ても女史の藝術的良心がいかに熾烈であるかゞ知られる。又短歌はもとよりお手のもので

末知らぬ野道山道いづれにか神のめすらん方に行かばや
はても無きみ空行く雲をり〳〵は長き旅路にた

ゆみはてずや
うち眠るわが子の寢顏ながめつゝ命を惜しと思ひそめぬる

の如き歌を見ても、女史一流の題材を捉へて調子よく、リズミカルなものにまとめてゐる。尤もこれは舊作であるが、新作の歌では「靜かなる月日」といふ題の中に次のやうなよい歌が多くあるのを見た。

いねてきく窓のそとなる鳥の聲ものやはらかう春こそ來たれ
みはかべに石は立ちけりわすればや我がいたましさわが戀しさも
生きてあればのぞみもありとおほせつるそのことばさへむなしと思ふ
我さきに死なばさびしくおはさむとわかき日の我はいひけるものを

等を見れば、鴛鴦の契り淺からぬ濃やかな情が見えて、軟文學者達の苦々しい戀愛至上觀と對比して奥ゆかしさを思はせられる。

現住所　東京府下荏原郡入新井村新井宿一三五二

故松本巖　マツモトイワオ（漢）

諱は元裕、字は士龍、古堂と號し、尺木氏錦江鷗史、古風俗人、八雲外史等の別號がある。文政二年二月島根縣森山に生れた。家世々醫を業とし、幼少より讀書を好み手から卷を放たなかつた。伯耆國木島山立碩に從ひ漢學を修め、九州に行き龜井昭陽の門に入り、後京都に上り摩島松南に從學した賴三樹三郎、後藤松蔭等と交り、梁川星巖、安積艮齋に師事し、のち出雲の千家北島兩國造に聘せられて五年の間經史を講じた。其の後幕府措置を誤り國家の大典を破つた時星巖の家に密議した。星巖の死後氏は其の喪主となつた廉で嫌疑をうけ入獄半歲に及んだ。明治二年白川西園寺兩家の學館を起した時、氏は擢んでられてその督學となり育英に從事した。後越後村松の藩學を督し、六年東京に出でゝ小野湖山、谷鐵臣、坂谷朗廬等と交を結んだ。のち脚氣に罹つて歸鄉し私塾を開いて教授をしてゐたが病の爲に明治十一年一月歿した享年六十。著書に「日本魂君子傳」「小人傳」「九經一斑」「九經要語」「詔勅要略」「兩音便覽」「士官要義」「名教和歌」「偃蹇隨筆」「孝傳」「古鑑抄」「嗚呼樓詩抄」「詩道平易」等三十五種二百數十卷ある。

松本恭三　マツモトキヨウゾウ（小）

明治十八年六月十七日廣島縣豐田郡忠海町に生れ明治四十三年早稻田大學商科を卒業後鐵道院に奉職したが、それは約半ケ年の間であつた。其後創作に志して長短兩篇の創作數篇を出した。

現住所　東京市外代々木富ケ谷一四二九

松本苦味　マツモトクミ（劇）

名は圭亮、明治二十三年七月東京市京橋に生れ、國民英學會、東京外國語學校露語專修科に學び、戲曲「惡の華」「幸福の路」の外翻譯「どん底」「農夫」「春の水」「珠玉抄」並に丁抹、支那、西班牙等諸國の童話集を著した。東京日本橋區中洲町三九を本宅とし、本所區松井町一丁目二四を別宅として居たが震災後の現住所は不明である。

震災前住所　東京市本所區松井町一ノ二四

松本俊一　マツモトシユンイチ（詩）

明治二十六年二月二十五日丹後國峯山町に生れた十四歲の時京都第一商業學校に入學したが二十一歲にして故鄉に歸り但馬の山寺に生活して修禪の三昧に入つたこともある。二十三歲決然意を立てゝ上京し川端畫學校に這入つたが矢張り落ついて研究に從ふことが出來ないで僅かに一ケ月ばかりの後退學して放浪生活を續けて今日に至つた。詩集に「永劫の笛」「悠久は歩む」等の著がある。

現住所　東京市外板橋中丸四一〇

松本淳三　マツモトジユンゾウ（小）

明治二十八年一月一日島根縣美濃郡高城村神田に生れ、濱田中學を卒業して慶應大學に入つたが半途で退學した。其後西海南海畿內東京等を流浪し

坑夫、番頭、職工、雜誌記者等を經驗し、演說會場で暴徒に刺され、一時危險を傳へられた。小說「闇に生きる」「血痕」評論「擡頭期にある農民藝術に就いて」の外多くの詩作がある。現に「種蒔社」の同人として活動してゐる。

現住所 東京市外代々木富ケ谷一三七七

松本泰 マツモトタイ（小）

明治二十年二月二十二日東京市に生れ、慶應義塾大學文科を卒業し、前後二回六年間英國に留學し短篇小說「天鷲絨」「倫敦紀念帳」等の著を出し、また三田文學に折々發表してゐる。

現住所 東京市外中野町一〇六二

松本白華 マツモトハクカ（詩）

氏は眞宗本願寺の住僧、學は和漢を兼ねまた詩文をもよくし書道にも達してゐる。明治七年東本願寺新法主大谷光瑩上人に隨ひ、學僧石川舜台と共に歐米を巡遊し、歸朝の途次支那に入り、漢學並に支那佛教の研究をなして歸り、寺內に塾を開いて教授したが、入門するもの數百人の多きに達した。氏は又常に茶事を好み「茶茗考」を著してゐる。東本願寺宿老の一人として名聲ある高僧である。

現住所 加賀國松任町

松本初子 マツモトハツコ（歌）

有名なる東京の實業家松本幹一氏の娘であつて、奈良に生れ、大阪に住み、後一家の轉住によつて上京した。幼時より甚だ歌詠を嗜み、折に觸れ事に臨み一々珠玉の歌を作つてゐる。竹柏園門下となり佐々木信綱博士の指導をうけ「心の花」同人中の才媛として廣く知られてゐる。今日でも舊姓で歌を發表してゐることもあるが、今は嫁して河杉姓を冒してゐる筈である。氏の歌集「藤むすめ」は竹柏園の「心の華叢書第一編」として刊行されたもので、大正三年著者が齡僅かに二十歲までの詠を集めたものであるし、大正八年更に同叢書として「柳の葉」を出してゐる。何れも江戸趣味の艶麗にして而も輕快なるものもあり、また俚語を巧に詩化して新境を開いて而も渾然の域に入つてゐるものもあり、實に歌壇の一異彩とされてゐる歌集である。

藻の中をくぐりて小魚遊ぶやうおぼろ月夜を花の下ゆく

石だたみうす齒りきうでからころと行けば櫻の花みだれ散る

誰やらに京人形のまなざしが似たと思うて考へて見ぬ

現住所

故松本楓湖 マツモトフウコ（畫）

名は敬忠。天保十一年九月常陸國太田村小野に生れ、初め沖一峨に就き、後佐竹永海、次に菊池容齋に學んで容齋派の大家となつた。明治二十八年京都の第四回勸業博覽會に「蒙古襲來及碧蹄館」を出し、三十一年日本美術院の幹部に列し、又三十二年第七回繪畫共進會には岡倉覺三、橋本雅邦と共に特別審査員となつた。文展には第一回から第四回まで日本畫部審査員となり、家塾を開いて多く門生を養つた。文展へは第一回に「靜女舞」第三回に「小楠公於四條畷奮戰」第四回に「役の小角渡唐圖」第十回に「趙雲」「怒濤の月」第十一回に「觀音」「關羽」を出した。門下の主なる者には故今村紫紅、故高橋廣湖、島崎柳塢、今村興宗、村岡應東、速水御舟、牛田雞村、富取風堂小茂田青樹、岡田壺中、小山大月、黒田古鄕、鴨下晁湖、前田錦楓、須佐天齋等多くある。大正八年帝國美術院會員となり、大正十三年病歿した。

松本芳山 マツモトホウザン（文）

明治十七年九月十五日下野國上都賀郡鹿沼町に生れた。氏の生地鹿沼町には山陵志の編者としてまた忠君愛國の士として有名な蒲生君平が常に崇敬措かなかつた學德一世に高い鈴木石橋先生といふ儒者があつた。芳山氏も幼よりこの誠意誠心の石橋先生を隱れたる偉人と崇拜して來た。氏の作は

飛行少年、少年倶樂部、雄辯、武俠世界、中學生令女界、講談落語界、娯樂世界、講談倶樂部等可なり多くの雜誌に寄稿してゐる。氏は餘技嗜好として漢詩漢文をも作るが之もやはり鈴木石橋先生や蒲生君平等の影響であると言つてよからう。

現住所 東京府下中目黒一四七九

松本亦太郎 マツモトマタタロウ（美）

氏は舊高崎藩士飯野翼の次男で慶應元年九月十五日生れ、後先代勘十郎の養嗣子となり、帝國大學に入學して二十六年文科大學を卒業した。尚美學の研究をするため大學院に入り、二十九年九月米國に航してエール大學に學び、同三十一年六月獨逸に留學を命ぜられ、三十三年歸朝後直に高等師範學校教授兼女子高等師範學校教授に任ぜられ、三十九年七月京都帝國大學文科大學教授に轉じ、京都市立繪畫專門學校長兼京都市立美術工藝學校長を兼ね、大正二年七月東京帝國大學文科大學教授になつた。これより先帝國大學に在つて大學院在學中研究の結果を卒業論文として提出したが、教授會は氏の實力を認めて文學博士の學位を授けた。氏はまたエール大學よりドグトルの學位を受けた。氏は心理學者として美の本質を研究し、更に美術の實際に就いて鑑賞を試み、當代第一流の美術鑑賞家を以て目せられてゐる。著者の隨筆及び歐洲旅行中の隨感記「渡り鳥日記」は廣く讀まれてゐる。

現住所 東京市小石川區小日向臺二、一五

故間中雲颿 マナカウンパン（詩）

有名なる詩人、名は宜之、字は楨郷、北總の人である藤田東湖の薫陶を舉し、高山彦九郎の遺風を慕ひ、尊王の念頗る強く、國體を重んじ其の語其意氣頗る高山彦九郎再生の思がある人であつた。戊辰以後東都に隱れ詩を以て自ら隱し、大阪の名儒藤澤南岳と交り厚く、詩文の往復をなし氏老ひて益々繁かつたさうである。明治二十六年一月十二日年七十六で歿し、本郷丸山長泉寺に葬られた。氏初

甞て高山彦九郎の頭髪を藏してこれを蒲生君平の墓側に瘞めようとしたが故ありて果さなかつた。

眞山青果 マヤマセイカ（劇）

名は彬、明治十一年九月仙臺に生れた。第二高等學校醫學部に學んだが半途退學して數年放浪生活をした。三十六年小栗風葉の門に入り風葉の代作數篇を書いて隱然文壇に重きをなし、明治四十一年處女作「南小泉村」を發表するに及んで文名頓に上つた。正宗白鳥と相並んで少壯文壇の中堅と目せられ「青果集」「奔流」「南小泉村」「五人女」等の短篇を公にした。荒けづりの文章の強さ、神經の鋭さ、觀察の細かさ、世は天稟の才を以つて遇したが四十四年或る種の非難を受け遂に文壇を退いて松竹合名會社の脚本部に入つて伊井河合一座の爲に脚本を書いてゐる。

現住所 東京市牛込區矢來町六二

丸山晩霞 マルヤマバンカ（畫）

名は健策。慶應三年五月信濃國小縣郡彌津村に生れ、小山正太郎と同門の望月俊稜に學び、十八歳の時上京して國澤新九郎の彰技堂に入學し、四年間在學した。此間、明治美術館、東京府共進會等に油繪を出陳したが一旦歸郷し、太平洋畫會の吉田博、中川八郎等と太平洋畫會に水彩畫を出品し、明治三十二年十月又米國に渡り、六ケ月後歐洲に行き、三十四年十一月歸朝し郷里に畫室を建て五年間研究に從事した。後、大下藤次郎、三宅克己等の勸告に從つて上京し、彼等と共に日本水彩畫會研究所を起し、四十四年再び歐洲に渡つて翌年歸朝した。

又登山家として知られてゐる氏は大正六年朝鮮に遊んで金剛山を踏破した。得意とする處は實に水彩の山嶽畫である。文展へは第一回に「白馬の神苑」第二回に「眞夏の夕」を出品したが、其後出品しないで個人展覽會及び太平洋畫會展覽會等で屢々作品を公けにした、近時は日本畫も描くし「水彩新天地」の著書を出した。太平洋畫會會員。

大正七年二月下村爲山、茨木猪之吉等と新日本畫協會を起した。餘技として氏は俳句をも善くする。

優松の山浮びけり雲の海

現住所 東京市本鄉區神明町一四

故丸山龍川 マルヤマリユウセン（漢）

名は鑽、字は士堅、龍川と號し、信州飯田藩の儒者である。天保十三年七月生れ、幼い時より藩の儒者渡邊八郎に就いて漢學を學び、更に尾張國淺井儀一郎の門に入つて醫學を修め、明治三年藩より選まれて大學には入つた。大學の廢されたのち漢學の大家川田剛の門に學び、四年飯田縣學校教授となり、山梨徽典館訓導に轉じ、七年山梨縣權少屬に任ぜられ、九年鹿兒島縣六等屬內務屬福島縣屬に歷任し、岐阜縣尋常師範學校、新潟縣第一師範學校、飯田中學校、神奈川縣師範學校等の諸校に奉職し、三十六年より三十九年までは島津家歷史編輯所に勤務し、大正五年十一月二十九日病歿した。年七十五歲。氏は漢文詩學に造詣深く著書若干卷ある。氏は性質頗恬淡であつて利欲の念なく、功名富貴の何たるを知らない有り樣であつた。唯嗜むところのものは酒であつて、醉へば必ず嘯詠舞踊して心境全く脫塵の天地にあつた。

萬造寺 齊 マンゾウジサイ（小）

明治十九年七月鹿兒島縣日置郡串木野村に生れ、東京帝國大學英文科を卒業し、數多の短篇小說を出したが、今は生地に歸臥して其作を見せない。

現住所 鹿兒島縣日置郡串木野村

ミの部

故三浦修吾 ミウラシユウゴ（文）

明治九年筑後國浮羽郡千年村に生れ明治三十二年福岡縣師範學校及同三十六年東京高等師範學校を卒業して鹿兒島師範に二ケ年姬路師範に數年奉職した。三十九年以來呼吸器を害したがその精神修養の力がよくその病氣を抑へてゐると言はれたほど修養に努めた人である。後職を辭して上京し大正五年東京池袋、成蹊學校の機關誌を主宰したが大正九年十二月四十五歲で歿した。氏の著作としては「修吾全集」三卷（隆文館發行）ある。青年には「二人の苦行者」と共に是非一讀させたい本である。西田天香、內村鑑三、栗原基、野口援太郎、園田德太郎、岡田播陽等の諸家は何れも氏が生前の交友であつた。

三浦關造 ミウラセキゾウ（翻）

明治十六年七月十五日筑後國浮羽郡千年村大字若宮に生れ福岡師範を經て明治四十四年秋東京青山學院神學部に入り大正二年春卒業して一ケ年弘前市に於て牧師となり大正三年以來文筆の生活を續けてゐる。江部鴨村、石村梧平、仲野岩三郎、秋田雨雀、西宮藤朝、井箕節三、豐田實の諸氏と交り常に教育學術界に寄稿してゐる。著書には翻譯「エミール」ロンゾロゾーの「個性の教育」の外「教育文學十講」「教育進化の六十年」「二人の苦行者」「祈れる魂」（以上隆文館）「新生の曙」「人間改造の藝術」「默示の四騎士」「宗教哲學の革命」「新心理學」「凡てを拋つもの」等がある。氏の令兄修吾氏は有名な教育家であつて文章もよく書いた。「二人苦行者」は兩君の苦行の有樣をよく現はしてゐるので中學校等の圖書室には是非備へらるべき良書である。

現住所 東神奈川柳町九八八

故三浦安 ミウラヤスシ（詩）

舊伊豫國西條藩士、文政十二年八月十八日生れた小川武貴の庶長子で母は三浦氏である。幼名は光太郎、年二十一の時江戶に出でゝ山井璞輔、安井息軒等の門に遊び、又昌平黌に學び詩文をよくし香澗學人、雨窓學人、雷堂等の數號がある。嘉永六年藩士三浦氏の嗣となり三浦五助と稱し、後之を改めた。尋いで郡奉行となり藩廳の民政に與る

こと十年、後尊攘の說を唱へて藩より譴罰を受けた。此間休太郎と改稱し、藩に歸り謹愼した。既にして用人となり家老代を兼ね、明治元年德川慶喜征夷將軍辭表の際攝政二條公に呈說したるの罪を以て此年十二月禁錮五年に處せられたが一年三月の後特赦にあつてまた藩政に參した。四年藩の少參事に任じ、爾後大藏省に出仕し尋いで內務權大丞となり、十年西南の役に上京して周旋するところがあつた。後修史館監、幹元老院議官、錦鷄間祇候、貴族院議員、東京府知事、宮中顧問官となり鏘々の聞があつた。明治四十三年十二月十一日八十三歲で薨去した。

嘉樂第三會席上次韻

嘉樂會筵 嘉樂同、 俱呼二萬歲一醉二春風一
小康豈是偷安日、 慷慨猶存和氣中、
有レ感
傚レ米擬レ歐漫競レ新、 不レ知倫理日沈淪、
利奔名走滔々世、 回二正狂瀾一有二幾人一

生前の住所 東京市京橋區木挽町九ノ二五〇

三ケ島葭子 ミカシマヨシコ（歌）

もと「明星」派に入つて與謝野晶子女史等の影響を受けてゐた閨秀歌人であるが、のちアラヽギ派に移つた作者であるから、純アラヽギ派にない處の一種の風格を備へてゐる。東雲堂より歌集「吾木香」（われもかう）を發行したがこれは大正元年から大正十年までの作歌中より撰んで倒置してある。何れも女性としては見難いほどの卒直さと素朴さと眞摯さとに滿ちた生活の歌であつて、艷かしい技巧や嫋々たる餘韻は乏しいが力強い何ものかゞ、吾々の胸に迫つて來るものがある。

かすかなる仕事なりけり針しごとわれにせわしき冬としなりぬ

ああ君は男なりけり誰もみなたのもしといふ男なりけり

夫とたのむ心ゆるびにはしたなきこと言ひいでゝ怒られにけり

思ひあまり人には告げし一言の今はくやしも取消すすべなき

現住所 東京市麻布區霞町

三上於菟吉 ミカミオトキチ（小）

明治二十四年三月四日埼玉縣北葛飾郡櫻井村に生れ、櫻井小學校粕壁中學校卒業後早大英文科に入り中途にて退學した。曾つて東京每夕新聞社員となつたことがある。「無名」外數種の短篇「暗い情熱」「空しき青春」等の長篇及翻譯ゾラの「歡樂」は子供にもわかるやうに平易に面白く說明してゐる。「子供の聞きたがる新智識の庫」等がある尙小說「嘆ける曙」二卷「愛慾の霧」翻譯「貴女の樂園」「獸人」等を著し最近また小說「青春の罪」「女の呪」「嘆ける曙」「炎の路」「美女地獄」戲曲「正雪の謀反」を作り多作家の名を恥かしめない。

現住所 東京市小石川區上富阪三九

故美甘政知 ミカモマサトモ（書）

氏は美甘政德の男で天保六年四月二十四日其家に生れ、通稱を與一郎と言ふ。幼い時播磨國河野鐵兜の門に遊び且當時の志士と交つたが偶々家君の易簀にあつて家に歸つた。維新の始めに當つて津山藩主松平慶倫子天下の大勢に鑑み、尊王の大義を唱へ舊慣を破つて民間より有爲の士を擧げたが氏も亦明治元年藩士に列せられ、同二年十二月津山藩權少屬に任じた。氏は幼より神國に生れたものは先皇國固有の學を修めなければならぬといふ考をもつてゐたので本居平田兩大人の說に私淑した。明治四年社寺改革の時美作國國幣中社中山神社の禰宜に任ぜられ、同七年九月同社權宮司となつた。十八年政教分離の際氏は大社教管長千家尊福男に屬し當時困難とせられた神道宣教に身を投じて全く家事を顧みない。寢食を忘れて地方に神代遺傳を講ずること十數年、之を泰西科學の說に照らして先哲未發の說多く、數十年の刻苦遂に天地組織の原理五卷を著した。其の後今の國學院の前身たる皇典講究所より四等學正の稱を授けられ

三十年九月再び中山神社の宮司に補せられたが四十二年齢七十七の時老齢の故をもつて辭職した。壯年より理財の念少く、貧生に遇へば囊を傾けて之を救ひ、貴賤を顧みないで交を結び、能く談じ能く飲み、書畫を好み歌を詠じ閑に乘じて石材を弄し印刀を揮ふ、特に假名と草書は氏の最も得意とするところであつた。自然は氏の最も愛するところで氏の學風も亦之に淵源し、余は天地學校中の一老書生であると言うて遂に自ら自然翁と言うた。土地の人はその斷簡零墨を得れば何れも什襲してこれを放さないのである。

右田年英 ミギタトシヒデ（畫）

名は豐彥。梧齋の別號がある。文久三年六月大分縣臼杵町に生れ、歌川派浮世繪の大家月岡芳年に就て浮世繪を學び、國澤新九郎に洋畫を學んだ。門下に河合英忠。鰭崎英朋笹井英昭等の名家がある。

三木露風 ミキロフウ（詩）

名は操、露風は其號であるが羅馬の羅の字を取つて羅風と改號した。明治二十二年六月二十三日、兵庫縣揖保郡龍野町に生れ、閑谷黌、早稻田大學慶應義塾等に學び、詩集「廢園」「寂しき曙」「白き手の獵人」「幻の田園」「蘆間の幻影」「信仰の曙」「青き樹かげ」「象徵詩集」繪入童謠「眞珠島」抒情小詩「生と戀」「美學草案」等の著を出してゐる。氏は年少の頃から詩人として名をあらはしたが、後に象徵派の詩人として詩壇に重きをなしてゐる。かの官能派の北原白秋の向ふを張るのは、氏を措いて他に無いとまで言はれてゐた。「青き樹かげ」は一般向の詩集を編む心もちから特に歌唱朗讀に適するもの約七十篇を集めてゐる中には既に山田耕作、小松耕輔、本居長世、タルシス氏等によつて作曲され、民間に流布してゐるものもある。「象徵詩集」は「寂しき曙」「白き手の獵人」「幻の田園」の三部百五十章を收め、殆んど氏の代表的全作を窺ふことが出來る。そして言葉は詩の方便でなく、詩そのものであるといふ氏の主張が、これによつてよく窺ふことが出來る。嘗て雜誌「未來」の主幹、「中央文學」の長詩選者をしたことがある。又牧神會を起して機關雜誌「牧神」を發行した。トラピスト修道院講師であつたが大正十三年これを辭して上京した。

故右田寅彥 ミギタトラヒコ（劇）

豐後國臼杵の人であつて、年少より小說稗史の類を渉讀することを好み、文學者となつて身を立てようと欲し、十一歲の時上京して高畠藍川の門に入つて創作を習ひ、のち柳塢亭と號して遂に小說を公表するに至つた。後「めざまし新聞」に入り轉じて「都新聞」に筆を執り、後更に東京朝日新聞に入り社會部長の重職に就いて數年の間勤め帝國劇場の成つた時その座付の脚本作者となつたが、大正九年一月十一日年五十五歲を以て病歿した。

現住所 東京市芝區田町四丁目七 鏑木清方、池田輝方等の師水野年方は實に氏の兄弟子である。

現身

春はいま空のながめにあらはるゝ
ありともしれぬうすぐもに
なにみて死ぬる蜆のけはひ。

ねがひはありや日は遠し、花は幽かにうち薰ず。
ゆるき光に靈の煙のごとく泣くごとく。

わが身のうつゝながむれば、
紅玉の靄たなびけり。
隱ろひわたり、染みわたり、入日の中にしづく聲。

心もかすむ日ぐれどき、鳥は嫋びつゝ花は黃に
快惚の中吹き過ぎて色と色とは彈きあそぶ。

身には揺れどもいそがしく
入日の花のとゞまらず。

春はわが身にとゞまらず。ありともしれぬうすぐもに
なやみこがるゝ蛾のけはひ。

現住所 東京市外戸塚町諏訪二〇六

故三國幽眠 ミクニユウミン（漢）

越前の儒者であつて、諱は直準、字は子繩、通稱大學、文化七年三國に生れた。家はもと商店であつたが天保三年京師に出でて詩文を摩島松南に學び、梅辻春樵貫名海屋等と交り、七年姉小路に於て帷を下して生徒に授けた。時幕府の經學は朱說であつたが幽眠は朱註では滿足しないで古註に據つて自註を加へ之を古註孝經と題して上梓した。杉山篤信深く此著を稱し、仙洞御所に上つたら上皇大に嘉賞し之を仁孝天皇に贈り及各親王に頒ち又一部を鷹司政通に賜はつた。九年幽眠鷹司家の儒官となり嘉永六年米艦來航のとき力を王事に盡して志士と交通し、安政五年捕へられ、追放の刑に處せられた。萬延元年櫻田の變後京師に還るを得て再び鷹司家に仕へた。明治六年權大講議に補せられ、京都北野神社梅風教會長と爲り、二十六年特旨を以て從六位に叙せられ、又勤王の功を賞し金を賜はつた。晩年は優悠吟詠に耽り、二十九年五月三十日歿した。年八十七。著書に「孝經傍訓」「大學傍訓」「古事記略解」「聖廟鑽仰集」「古史大疑」「詩礎階梯」「大慶喜心院略傳」「一洗堂百首」等がある、一洗堂百首は小倉百人一首の淫靡の作の多いのを疾み、之を改選したものである。三條實美之を皇后に獻じ鷹司輔煕は之を皇太后に獻じたといふことである。

三島章道 ミシマシヨウドウ（劇）

本名は通陽、明治三十年一月元旦東京市麻布區新龍土町五に生れ、學習院に入つたが半途で退學し哲學漢學を小林一郎に、油繪の描き方及び美術の鑑賞を有島生馬に、音樂をサルコリーに學んだ。世界大戰爭講和會議の時、牧野特使の隨員として巴里に行つた。「地中海前後」「寺田屋騷動」「武士の子の死」「よかちごの死」「〇さんと私」「種が島の名人」「若き旅」「劇藝術小說集」「若き泉」「和譯孟子」の著の外、評論、紀行、隨筆、紹介、童話、童話劇等の作を多く發表してゐる。近時ボーイスカウトの研究をなし、日本少年團の聯盟副理事長となり、殆んど全力をこれに注いでゐる。氏の祖父通庸は道路縣令として名を知られ、父彌太郎も政治家として有名であつた。

現住所 東京府下千駄谷町七六二

三島霜川 ミシマソウセン（劇）

名は才二、明治九年四月富山縣西礪波郡福生村に生れ、「山靈」「スケツチ」「孤巖」「村の病院」「平民の娘」「虛無」等を著した。「演藝畫報」記者。

現住所 東京市外池袋字本村

故三島中洲 ミシマチユウシユウ（漢）

松山藩士三島正昱の二男で、名は毅、字は遠叔、通稱は貞一郎と言つて、中洲の外、桐南、綉莊等の別號がある。天保元年十二月九日備中窪屋郡中島村に生れた。中洲は村名によつた。幼時山田方谷の門に學び尋いで伊勢津藩に遊び齋藤拙堂を師とし後昌平黌に入つて業を佐藤一齋安積艮齋に受けた。明治五年仕官して判事に任じ、新治裁判所長となり八年大審院判事となつたが十年官を退いた。十四年大學教授となり、二十九年東宮侍講に任ぜられ三十三年文學博士の學位を受けた。後宮中顧問官宮內省御用掛となつた。氏は又夙に二松學會を創設して漢學を授けたが業を受けたもの數千名の多きに達した。氏は大正八年五月十二日九十歳の高齡で薨去したが三男文學士三島復氏二松學舍を主宰して多くの門人を養つてゐる。尙ほ博士の主義として每年一月齋戒沐浴して自ら遺言書を作り、遺言は健康の時に作り置くべきものだと

言つて居た。また碑文も自撰のものである。「七經私記」「中洲詩文稿」等の著書がある。長男桂氏が家を繼いでゐる。

三島文子　ミシマフミコ（小）

明治三十六年二月十二日鹿兒島市外吉野村に生れ朝鮮大邱公立高等女學校及鹿兒島縣立第一高等女學校を卒業して更に鹿兒島縣女子師範學校第二部を修了した。暫く教職に就いたが後退職して文學研究のために上京した。未だ著書は無いが週刊朝日や令女界等に其の作を發表してゐる。

現住所　東京市外下目黒三八九

故水落露石　ミズヲチロセキ（俳）

名は庄兵衞大阪東區安土町二丁目の自宅に生れ、俳壇一方の重鎭であつた。氏は日本派俳壇當初より俳勢鼓吹に盡力せし人であり、俳書の藏書家として故大野洒竹や伊藤松宇等に次いで有名なものであつた。從つて蕪村遺稿其他の翻刻出版をなして俳壇に少からぬ功績があつた。令息京二氏の試驗休みを利用して山陽地方に旅行中流行感冒に罹り四月六日急遽歸阪し高安市川兩博士の診療を受け靜養したが十日午前九時逝去した。享年四十八。葬儀は十四日同家の菩提寺である心齋橋三津寺筋三津寺で營んだ。相島虛吼は氏の死を悼んで次の句を詠んだ。

涅槃會に二日後れて君逝きし

氏の句に

はなれ鴛鴦汀の人を親しげに
神送る式見に來たり吉田山
藪巻いて北窓見ゆれ妙喜庵
室咲や霜の水仙きり添ゆる
雨に流るゝ籾殻が水仙の根へ
背山の孟宗竹見廻りて父の布子よ
溫泉の二階から直ぐやまの徑つく蜩

水上泰生　ミズカミタイセイ（畫）

明治十五年福岡縣に生れ、荒木雪仙、寺崎廣業等の諸大家に師事し、後東京美術學校に入學して三十九年日本畫科を卒業した。一時九州福岡の女學校で教鞭を執つたが今は全く畫壇の人となつた。三十年以來各地の共進會展覽會等に出品して受賞し、文展には第七回に「桐」第八回に「琉球の花」第九回に「樺太の夏」第十回に「ロッペン鳥」第十一回に「山々の裝ひ」後又「風薫る深山」を出し「琉球の花」と「樺太の夏」は共に三等賞を得、「ロッペン鳥」は世の注意を惹いた。

震災前住所　東京市麻布區本村町一二

水上瀧太郎　ミズカミタキタロウ（小）

明治二十年十二月東京に生れた。本姓名は阿部章藏、實業家の富豪の令息であつて家庭では創作などをさせることは好まぬが、止みがたい氏の趣味によつて書いてゐるといふことだ。行文はなかなか潤がある。慶應義塾大學理財科の出身で卒業後數年間歐洲に留學した。「その春の頃」「旅情」「心づくし」「大空の下」「貝殻追放」「海上日記」の作がある、明治生命保險株式會社員。近作は三田文學に大抵載つてゐる。

「日曜」は創作「日曜」並に「友情」の二篇を收めてゐる。若かりし日の追憶に材を取れる自叙傳的力作として讀者を熱烈な感興裡に誘引する快著であるし「明窓集」は氏が三田派文藝の第一人者として文壇を聳動した數ある短篇の傑作集であるこれには氏一流の多元描寫によつて人間生活の諸相を極めて辛辣に皮肉に描き出し獨得の藝術境を展開してゐる。前の「海上日記」にしても外國へ留學すると定つてからの作者の絶ちがたい別離の情を述べたあたりなどは父母を思ひ住みなれた家を思ふ純眞な感情が漲つて居り、文章も品のあるものである。「楡の樹蔭」等になるとアメリカの冬から春に變つてゆく急劇な推移の樣が如何にも鮮かに描かれてゐてその實感の豊かな書きぶりは一個無韻の詩とも思はれる。

現住所　東京市芝區三田四ノ三一

水島爾保布　ミズシマニホウ（畫）

號は紫竹、明治十七年東京市下谷根岸に生れ、初め日本畫を久保田金僊に學び、後東京美術學校に入つて、四十一年日本畫選科を卒業した。四十四年小泉勝爾、小林源太郎等と行樹社を起し、作品は主として行樹社、東臺畫會等に出品した。現に東京日日新聞美術記者をしてゐる。氏は畫家としても文章家としても相當の地位を占めてゐる外蛇食についても有名である。

現住所　下谷區中根岸

水田竹圃　ミズタチクホ（畫）

名は敬。明治十六月二月大阪市に生れ、姫島竹外に師事して南宗畫を究め、大正美術協會、大阪美術會等の會員となり、大正七年一月北野恒富、山口草平、久保井翠桐、矢野橋村等と茶話會を起した。文展へは第六回に「溪山滴翠」第七回に「滿溪煙雨」第八回に「雪村清溪」等を出して褒狀を得」第九回に「太華山實景」を出して三等賞となり、第十回の「早春」は名譽の特選となつた。第十一回には「秋山岑寂」を出して好評があつた。

現住所　大阪市博勞町三ノ七

水木京太　ミズキキヨウタ（劇）

本名は七屋喜太郎、明治二十七年七月十六日秋田縣横手町に生れ、横手中學を經て大正八年慶應義塾文學部を卒業し、同塾の豫科教授として勤務する外「三田文學」の編輯に從事してゐる。戲曲「明日」「春の花」「姉妹」「和蘭の娘」「淺瀬」等の外演劇評論等を數多く發表してゐる。

現住所　東京市赤坂區氷川町二七

水谷竹紫　ミズタニチクシ（劇）

名は武、明治十五年十月八日長崎市に生れ、同地の中學を經て早稲田大學に入り、三十九年その文學科哲學部を卒業した。藝術座の創設せられた時氏は入つて理事となり、後同劇團の支配人に擧げられた。大正八年より十年迄東京毎日新聞に勤めたことがあるが現今は創作に從事してゐる外、文部省社會教育調査委員を托せられてゐる。長篇小說「熱灰」戲曲「戰國の女」の著の外、戲曲「父親の死」「昔噺花咲爺」「妖力村正」「月宮殿」（舞踊劇）「吹雪の曲」小說「死の前の正成」等の作を公にしてゐる。

現住所　東京牛込區通寺町六一

水谷鐵也　ミズタニテツヤ（彫）

號は佳園。明治九年長崎縣南高來郡島原村に生れ奈良一刀彫近世の大家森川杜園、及び和田貫水に師事し、更に東京美術學校に入學して三十五年塑造科を卒業し、後、佛國に留學し、東京美術學校助教授となつた。文展へは第二回に「ねむり」第三回に「蘭陵王童翁」第八回に「髪洗つた女」第九回に「夢幻」を出した。彫刻の外美術評論數篇を公にしてゐる。

現住所　東京市本鄉區駒込神明町五四。

故水谷不倒　ミズタニフトウ（文）

氏は尾張名古屋の人、通稱弓彦、不倒は其號である。安政五年十一月十五日生れ國學者水谷民彦の男である。民彦稗史野乘を好み、又能くこれを筆にした。嘗て三傑年譜を著し之を朝廷に獻上して厚く恩賞を受けた。氏はその薫化を受け、十三歲の頃既に略和漢の雜史及戲曲小說に通じ、少壯の頃兵役に服し陸軍步兵曹長となり、明治二十一年滿期の後東京早稲田專門學校に學び文學部を卒業した。爾來專ら傳記小說の著述に從つた。曾て雜誌「精神」の記者となり、又早稲田文學の客員となり、次いで後藤宙外、島村抱月等と丁酉文社を興し、新著月刊を發行した。氏は德川文學を專攻したのであるが元祿享保の京阪文學に於て特に精通してゐる。三十二年十一月大阪毎日新聞社の聘に應じてその文藝部の記事を擔當した。「枯野の眞葛」「風流紙屑買」「二つ蝶」「列傳體小說史」等の著書あるが「列傳體小說史」は德川文學研究

者にとつて無類の良參考書である。

水谷まさる　ミズタニマサル（詩）

本名は勝、明治二十七年十二月東京に生れ、早稲田大學に入つて大正七年七月英文科を卒業した。大正十年末迄少女畫報を主宰して多くの讀者を得た。大正七年二月早稲田文學に處女作「金髪の子」を發表し、九年二月新潮に「ある手紙」を出し、また數篇の小說を書いた。岡田三郎、戸川貞雄、濱田廣介諸氏と同人雜誌「地平線」を刊行したことがある。小曲集「寶石の夢」詩集「靑みゆく月」童謠集「神さまのお手」其他二三の著作があり、翻譯に「チエホフ作集がある。大正十三年五月渡歐した。

現住所　東京市外世田ケ谷宿五〇

水谷弓夫　ミズタニユミオ（書）

名古屋藩士水谷政恒氏の男、嘉永元年七月二十六日生れた。舊名文彥、忠之進、維新の際今の名に改めた。字は金箭、奥嶺と號し別に菊里、讀仙書樓、七星研齋、友梅軒、九九鱗村舍、是我園、礪杵半隱等の數號ある。氏は幼い時祖母の鞠育するところとなり、夙に藩の文學に就いて經史詩文を修め、業成るの後私塾を開き、公餘教授に從事した。戊辰の役後越後口に出戰して功績があり詣官に歷任し官暇長三州父子、堤靜齋、南摩羽峯、那珂梧樓等と相往來し並に「玉川吟社」を盛ならしめ、之が編輯を擔當した。又黃本黃石、森田節齋等の諸名家と詩酒徵逐し、後感ずるところがあつて官を辭し、鄉里に奥嶺學塾を創立した。西濃飛彈其他より來り學ぶ者が多い。二十六年岐阜縣土岐郡長に就任して地方行政のために功績を擧げた。其著「北越吟草」「倦鳥集」「是我園記勝」「奥嶺二千文俗解」「南游紀行」等ある。

現住所　美濃國土岐郡土岐津町

故水野仙子　ミズノセンコ（小）

本名は川浪てい子、道三氏夫人、明治二十一年十二月福島縣須賀川町に生れ、小學校卒業の外學歷は無いが、田山花袋氏に就いて文章を學んだ。「娘」「脫殼」其の他數篇の小說を著して、閨秀作家の位置を獲得した。大正八年五月三十一日三十二歲で死亡した。

故水野疎梅　ミズノソバイ（書）

名は元直、福岡の人、屢支那に遊んで書道を六朝流の大家楊守敬に聞き、楊歿後は吳俊卿に就いて研究した。頗る詩を善くし福岡日々新聞の選者として名聲高かつたが大正十年十月六日病歿した。晩年畫を學び蒼碩を慕つて其風を學んだ。

故水野年方　ミズノトシカタ（畫）

江戸神田山本町の左官職野中吉五郎の息で、初め水野芳年の弟子となつて歌川派の錦繪を學び、傍ら山田抑塘に陶器畫を受け、又南畫家柴田芳州にも就き、三島燕窓、渡邊省亭等の影響も受けた。明治二十一年頃より師芳年の後を承けて「大和新聞」の揷畫を擔當し、斯界に一生面を開いた。日本美術協會、日本美術院、日本畫會等の評議員となり又審査員にも擧げられた。纖細緻密の畫を數多く描いてゐるが、中でも「三十六佳選」は最も有名である。門下に鏑木清方、池田輝方、池田蕉園、荒井寬方、中山秋湖等があり、清方、輝方最も傑作して好評がある。明治四十一年四月年四十三歲で病歿した。

水野葉舟　ミズノヨウシウ（小）

名は盈太郎、明治十六年四月九日東京下谷區稲荷町に生れた。九州の中學を卒業して早稲田の文科へ入學するつもりで上京したが野心があつて早稲田大學政治經濟科に這入り明治三十八年に卒業した。氏は始め會社員になることに決定したが高村光太郎氏のミレイ傳を聞いて大に感激し二兎を追ふの愚をさとり遂に本來嗜好の文學に立戻つて世に立つやうになつた。初めは歌人として知られたがその感覺描寫に勝れた獨得の才筆を以て「あら

ゝぎ」「響」「森」「郊外」「草と人」「自然の心」「凝視」「微光」「壁畫」「おみよ」翻譯「幽靈の存在」小品集「追懷」等の著作をなして世に認められてゐるが今は「詩聖」によつて發表するもの丶外文藝的作物の筆を轉じて作文日記、書翰、小兒の讀物等を多く書いてゐる。小說は主として若い少女の心理を描いたもので自然主義全盛期前後に於て文壇の花形として活動した。ローマ字ひろめ會役員。

かの人かゆけはしなぬ山國の水もこひしといはゞ安からん

亂れたる心をたれかいたくべしやは山は山にてくちをつくまん

現住所 千葉縣印旛郡龜三里塚局管內大清水

水守龜之助 ミズモリカメノスケ（小）

明治十九年六月二十二日兵庫縣赤穗郡若狹野村に生れた。もと醫學書生であつたが氏のもつてゐる文學の趣味と才能とは醫師たらしめないで雜誌記者たらしめた。短篇集「歸れる父」「愛着」「戀愛の後」長篇「新らしき岸へ」中篇「闇と歩く」等の作がある。「闇を歩く」は氏がその雌伏期に於ける遭遇に材をとり一個不思議の女性をモデルとせるもので、婦人記者であつて才筆妖艷の一女性を活寫して慘憺たる敗殘の人生を展開せる佳篇である。

近く書いたものに小說「子を拾ふ」「溪谷の町で」「蜜柑」「新來の客」「闇を歩く」の外劇曲「田川家の人々」等があつて其努力を示してゐる。「子を拾ふ」は初の方はそれほどとも思はないが迷子の出て來る邊からは其の描寫が實によく出來てゐる。

現住所 牛込區矢來町三、中の丸二號

故溝口桂巖 ミゾグチケイガン（詩）

有名なる詩人、名は恒、字は景弦、相州築非の人で家世々素封家である。夙に吟咏を嗜んで大沼枕山を師とし、共居に山巖の勝がある。葛蘿之に讓つてゐるので扁して一叢生堂」と曰つた。大沼枕山は長篇を賦して其壁に題し、後居に東都にトし二十餘年文人墨客と來往唱酬した。晩歲落魄特に甚しかつたが少しも意と爲ない嘗て墨田川の勝景を愛し、三十韻を以て二十景を寫した。之は遠山雲如の三十律に擬したものである。之を著すに數歲の間或は三叉の渚に散步し、或は八州の園に逍遙し、一詠一吟逸思飄々ロを衝て發したものである。枕山の訃に接し四十八年師弟親索居聞訃淚霑巾の句がある。詩集を「山居集」「幻華集」「京華集」「罷和集」と云ひ、明治三十年一月二十六日年八十二で病歿し津久井郡千木良村見富山善勝寺に葬つた。

溝口白羊 ミゾグチハクヨウ（詩）

名は駒造、明治十四年六月大阪島ノ內に生れ、早稻田大學法律科を卒業し、雜誌「新日本」の文藝主任をしたことがある。詩集「さゝ笛」文集「紅い火の船」譯註「徒然草」「枕の草紙」並に「萬葉私議」「明治神宮」等の著がある。

現住所 東京市外代々木上原一二三八

三井甲之 ミツイコウシ（評）

名は甲之助、明治十六年十月山梨縣中巨摩郡松島村に生れ東京帝國大學文科大學の國文科を卒業し「消なば消ぬがに」の外短歌及文藝思想に關する評論を澤山に書いてゐる。氏はあらゆる方面の人と熱烈の論爭をするがいつも歷史的又は哲學的根據から正々堂々の論陣を張り、決して感情的なもの言をして爭ふやうなことはない。氏の文には六ケ敷い新熟語が續出するので拮掘な感がある。けれどもそれも大體はよく消化的に用ひられてゐる。氏の「楛牛全集より」なども小冊子ではあるが、一讀すべき價値がある。今鄕里で浩瀚な國文學史の文化史的研究を書いてゐる傍ら、日本及日本人に歌や評論を發表してゐる。「レニンの主義思想及び實行政策の批判」等も近く大正公論に發表した深刻の研究である。

あたりの山廣く空しく人も居らず松かげに立ちて海をながめつ
ともし火の明石のせどと名にだにもいにしへのうた思ほゆるかも
入江のみづたひらかに夕日さしなぐさ山のへ寺の壁白し
そゝり立つ銀杏のこずゑ鳥なきてもやかゝる見ゆみ山のごとし
いなむしろ河内の歌人朴人がやまたやしなひし寺と見てすぎつ
人の音のすくなき里にみ寺とひうつり行く世のゆかりしぬびつ
天地の大きちからのまにまゆき罪さながらに生きむと思ほゆ

現住所 山梨縣中巨摩郡松島村

三津木貞子 ミツキテイコ（小）

明治十六年八月栃木縣那須郡佐々山町に生れ、宇都宮高等女學校を卒業して日本女子大學校に學んだことがある。「泥土に播ける」「鍵」「泥醉」の外多くの短篇を著したが更に長篇執筆中である。

現住所 東京市小石川區雜司ヶ谷町一一二

滿谷國四郎 ミツヤクニシロウ（畫）

明治七年十一月岡山縣總社町に生れ、岡山中學校に入つて畫の天才として知られ、十八歲の時畫家を志望して上京し、西洋畫の大家小山正太郎の不同舍に學び、三十三年歐米に留學し、三十五年歸朝、四十四年再び渡歐して大正三年に歸つた。四十年東京博覽會に出品して名譽の一等賞を得、文展へは第一回より第五回まで、又第八回より以後洋畫部審査員である。作品は第一回に「購夢」第二回に「車夫の家族」第三回に「かぐや姫」「綠陰」「伊豆の山」第四回に「二階」「いはや」「雨前の山中湖」第五回に「港の雨」「飯島博士の肖像」「白い色」第八回に「岩山」「砂丘の裏」「浴後」を出して畫風を變へ、第九回に「魚市場」「島」「行水」第十回に「初夏の山」「素燒」「浴の後」第十一回に「四月」「長崎の人」を出して何れも好評あつた。太平洋畫會には創立以來之れに關係して、現にその會員である。大正十二年大震災後大阪毎日新聞社主催の日本美術展覽會審査員を托せられた。帝國美術院西洋畫部審査員である。

現住所 東京府下豊多摩郡下落合村七五三

南木摩天樓 ミナミキマテンロウ（評）

名は性、明治十年十月新潟縣に生れ、哲學館大學哲學部を經て東京帝大文科大學社會科を卒業し「太陽」編輯の主任となつた。「社會主義及社會政策」「現代の風雲兒」等の著書をなしてゐるが、又よく人物評論を書いてゐる。

現住所 東京市外戸塚町字諏訪二三二

南 薫造 ミナミクンゾウ（畫）

明治十六年七月安藝國茂賀郡內海町の醫師南啓造の子として生れ、廣島中學卒業後東京美術學校に入つて四十年卒業し、直ちに英國に渡つて留る事二年、次いで佛國に轉じ、巴里に滯在する事一年其間伊太利へ旅行して古美術を探究し、四十三年米國を經て歸朝した。文展には第四回に「坐せる女」を出して三等賞を得、第五回に「瓦燒」第六回に「六月の日」第九回に「葡萄棚」を出して皆貳等賞を得た。大正五年遂に選ばれて第十回以後洋畫部審査員となり、第十回に「五境」第十一回に「城」等を出した。又大正三年二科會の鑑査員に選ばれたが之を辭した。大正十三年大震災後大阪毎日新聞主催の日本美術展覽會審査員を托せられた。帝展審査委員。又光風會會員である。

現住所 東京府下大久保百八町二六三

南 靜山 ミナミセイサン（畫）

氏は大阪の篆刻家、名は保、字は子壽、靜山は其號である。別に山壽堂、靜壽庵等の號がある。備後國福山の人、幼い時より書畫彫刻を好み夙に楳本翁に就いてその指導を受け遂にこれをもつて一家の業となすに至つた。明治十一年淵野桂仙に畫

を學び、後各地を漫遊して大に得るところがあつた。明治二十三年以降内國勸業博覽會、日本美術協會展覽會、日本美術協會大阪支會等に出品して優賞を受けた。二十七年北白川宮殿下の命を奉じて御印を刻し、翌年再び同殿下の御命を奉じ、彫刻彩漆の印色器を製作した。此年三月又同殿下の御命を奉じ天皇陛下へ御獻納の御硯函を製作し、世人その光榮を羨望した。三十年一月日本美術協會大阪支會技藝員を囑せられ益々聲名を擧げた。

現住所　大阪市東區伏見町五丁目淀屋橋筋西入

故嶺田楓江　ミネタフウコウ（詩）

丹後舞鶴の人、嘉永年中江戸に在つて盛に時事を論じて幕府の忌諱に觸れ、上總に隱れて帷を垂れ子弟を教授した。星巖門下の詩人で、玉池社中の一奇人と稱せられた。

送二賴三樹之一奥州一

蕭々匹馬弔二山川一　要下爲二家翁一補中史編上、
驛酒醒來感應レ大、　鬼門關外落花天。

蝦夷竹枝

短衣窄袖敵二寒風一、　凍指一呵抨二硬弓一、
怖獸無レ聲窺二陰壑一、　滿天飛雪晝濛々。

丙寅秋營中作

刁斗聲中眠不レ成、　秋風吹レ月入二連營一、
裘二屍馬革一知レ非レ遠、　早已先鋒薄二敵城一。

題二落梅集後一

一夜笛聲吹委レ塵、　餘香入レ夢更愁レ人、
世間凡卉無心見、　落二盡梅花一不レ道レ春。

故箕田凌頂　ミノダリヨウチヨウ（俳）

名は壽、字は壽平、伊豆國君津郡八反畑村の名主渡邊萬介の末子であるが、別に家をなして箕田姓を冒した。漢文を幼時鄉里の福井雪水に學び、十八歳の時江戸に出でゝ同じく鄉里出身の先輩で當時多藝をもつて聞えてゐた孤山堂卓朗に就き、文學を學び武術を練りまた兼ねて俳諧の指導をもうけた。氏が將來俳句をもつて名を成すに至つたのはこの時に其の萌芽を出したのである。氏はこれより山水軒跨鶴と號したが、後に至つて凌頂と改めた。父の歿後歸鄉して父の職を襲ぎ、明治維新の後戸長となり、大區長に進み、後上京して東京府廳の屬吏となつた。卓朗の歿後北海道の門人無外氏その後を繼いで孤山堂を稱しただ遠くあるがためにその消息がわからない。よつて同じく門人杉浦山月氏孤山堂を稱したがこれも亦暫くの後風光堂を稱したので、明治二十二年凌頂は先輩友人の推挽によつて孤山堂第二世を繼ぎ雜誌鳴鶴集を出した。しかし又別に三福老人、九皐、一番風士等の俳名がある。四十二年十一月十四日年七十をもつて九州に客死した。「鶴の夢」「文臺秘方」「繁陰集」「俳諧落穗集」「鳴鶴俳話」「七郎集管見錄」等の外著がある。餘技として繪畫をよくした。

三宅幾三郎　ミヤケイクサブロウ（小）

明治三十年十月兵庫縣加古郡加古川に生れ、第三高等學校を經て東京帝國大學に入り、大正十年その英文科を卒業し、浦和中學校に教鞭を執る傍創作に從つてゐる。著書に「死へ」「陰影」「五十年」「猫を捨てる話」等の短篇小說がある。

現住所　埼玉縣浦和町師範學校前

三宅克巳　ミヤケカツミ（畫）

明治七年一月德島縣撫養町に生れ、初め洋畫家松平民治、上杉熊松等に就いて學び、二十二年頃大野幸彥に移り、二十五年頃より更に原田直次郎に就いて研究した。三十年より三十二年まで歐米に留學し、三十四年再び渡歐して巴里大博覽會を觀四十二年三度歐洲に渡つて四十四年歸朝し、大正六年又支那に遊んで得るところあつた。文展へは第一回以來每回出品して、第二回に「初冬」第三回に「湯ヶ島」を出して直ちに三等賞を得、第九回に「冬の小川」「第十回に「夏景色」「夏の山」を出して「冬の小川」は貳等賞となり、第十一回に「夏」を出して遂に名譽の推薦となつた。又大正元年、中澤弘光、山本森之助等と光風會を起して

毎回其作品を發表してゐる。「歐洲繪行脚」等の著があり、門下に岡落葉等がある。大正九年四度歐洲に遊び。大正十二年帝展審査員候補の一人に數へられた。氏は又畫の外寫眞術に長じて其の道の著書がある。

現住所 東京府下淀橋町柏木四〇七

三宅孤軒 ミヤケコケン（俳）

名は長太郎、明治十九年四月二十五日愛媛縣新居郡大町村西條に生れ、幼時上京して時事新報社に入り、後野依秀一氏の實業の世界社に移り、明治四十三年に全國料理業者の機關として「料理新聞」を起し今日に至つた。氏は上野帝國圖書館出身といふ外格段の學歷は無いが、俳句には少時より三昧に入つたものである。三十二年頃春秋庵幹雄門下雅正庵衣水の店員であつた時より舊派月並調をやつてゐたが、のち秋聲會系の新派にうつり、更に金森巍瓜氏等の勸誘によつて日本派系に這入つた。明治三十七八年頃俳誌「藻の花」を經營したが、後休俳した。氏の句は「藻の花」「ホトヽギス」等に投稿されたが「藻花集」「明治選者句集」等に蒐錄されてゐる。著書は未だ出して居らぬ。

籠捲けば夏の海見ゆ二階かな
灰汁桶の涌いて泡立つ土用かな
澪標しまきに見えぬ船路かな

震災前住所 東京市神田仲町一ノ一一

三宅周太郎 ミヤケシユウタロウ（劇）

明治二十五年四月兵庫縣加古川町に生れ、京都同志社に入つてその普通部を卒業し、更に慶應義塾に學んで文科を出た。爾來演劇に關する研究に沒頭して筆を執つてゐたが大正十三年四月大阪毎日新聞の社會部に入つた。演劇論集「演劇往來」を著した。

現住所 大阪市西區堂島中町橋本マサ方

三宅雪嶺 ミヤケセツレイ（評）

萬延元年加賀國に生れた。明治十六年東大文科哲學科を卒業して東京專門學校に教鞭を執つた。二十一年同志と共に政教社を起し雜誌「日本人」を發行して當時の歐米崇拜に反對して盛に國粹主義を鼓吹した。又江湖新聞主筆となり後新聞「日本」に社說を草して國民の德富蘇峯、萬朝の黑岩涙香報知の朝比奈知泉等と名を爭うた。のち「日本及日本人」を主宰してその雄渾の文と高邁の見とを以て時論政論を公にし現に評論壇の權威である。思想家として哲人としてまた高士として稀に見る人である。惜しい事には口訥にして演說講演等は文の樣に流暢にゆかぬ。博士に桂月と天隨とを加へて文壇の三訥と言はれてゐる。しかしこれが時には一種ソレムンの感を與へて滿堂を壓する力がある。著書には「宇宙」「小泡十種」「大塊一塵」「世の中」「修養語錄」「想痕」等の外多くある。文學博士。夫人花圃氏亦才筆で和歌や小說をよくするが博士の「日本及日本人」を主宰してゐる頃「女性日本人」といふのを發行してゐた。女史は彼の有名な閨秀文章家樋口一葉と共に中島信行男の夫人中島湘煙女史の門下である。雪嶺博士は長く雜誌「日本及日本人」の主筆をして堂々の文を載せて居たものだが、大正十二年政教社と分離して自然この機關誌とも緣を絕つことになつた。

現住所 東京市外代々木初臺五五四八

三宅やす子 ミヤケヤスコ（文）

萬延元年加賀國に生れた。明治二十三年三月京都市富小路竹屋町に生れた。明治四十年お茶の水高等女學校を卒業した後一つ橋女子職業學校で裁縫を專修し四十三年故理學博士三宅恒方氏の夫人となつた。女史は故夏目漱石氏に創作を學び後小宮豐隆氏に就いて研究した。博士の歿後小說や感想等を盛に書いてゐる。

氏の作には「露草」「戀を知るまで」「見知らぬ世界へ」「想ひ得ぬ人」「奮ひゆくもの」「初めての緣談」「勝利者」「一つの僞り」「顏」等の外評論隨筆等多くある。實業の日本社發行の「心のあと」は女性らしい細やかなデリケートな感情と健かな直觀を以て書かれた感想小品二十餘篇と「白い部

屋」「若い妻の惱み」「過ぎ行く時」の短篇小說三篇を輯めたるもので人生の悲傷に惱める著者の姿が浮き出でゝ自ら胸迫るものがある。尙女史はウーマン・カーレントといふ月刊の個人雜誌を發行して、文藝界や家庭等の各方面に亘て其の折々の事を書く筈で大正十二年六月を創刊することになつた。

現住所　東京四谷區愛住町五一

宮崎一雨　ミヤザキイチウ（小）

明治二十二年七月東京府北豐島郡日暮里村に生れ夙に文學に志し、四十二年東京日々新聞記者を振出しに、雜誌「新婦人」記者、「飛行少年」主筆を經て中央新聞記者となり、社會部主任、家庭部長、地方部長等を歷任したことがある。初めは純文藝に志したが、後に時代の風潮に感ずるところがあつて、大正三年青島戰役以來忠君愛國を標榜して專ら熱血小說に筆を染めてゐる。蓋し熱血小說の名は今日各種の通俗雜誌に見るところである

が氏の命名である。氏は主として「少年俱樂部」「少年」「飛行少年」「少女の花」「話の國」「雄辯」「面白俱樂部」「文藝俱樂部」等に投稿し時に「淑女畫報」「譚海」「講談俱樂部」等に執筆する。氏は長短合せて一千篇の作を有してゐるが家庭小說「妻の悔悟」「通俗史談」「英雄の快擧」探偵小說「秘密の地下室」熱血小說「熱血國」「間諜團の全滅」「怪力義人」「絕壁魔城」「お伽玉手箱」「少年武勇講談」「日米未來戰」等は其中特に有名なものである。

現住所　東京府豐多摩郡千駄ヶ谷町五九一

故宮崎湖處子　ミヤザキコショシ（詩）

名は八百吉元治元年筑前に生れ、東京專門學校の出身。氏は小說英文の外新體詩をも作つた人で何れも純情高感を寓した作が多い。有名な「歸省」の如きも美しい叙情詩的思想を日誌に表現したものである。著には「歸省」「人寰」「自白」「半生の懺悔」「細君の自白」等がある。大正十年歿。

忘れ水

いづこの野べに里川と
別れて來たる忘れ水
たつきも知らぬ原なかに
おぼつかなくも流れ來ぬ。

おぼつかなくも流れ來て
おぼつかなくぞながれ行く。
ちがやが下に埋れては
うしなはるらんこゝちして。

はてはふたゝび里川に
あふべきものとおもへども。
茅はら萱はらはるゞゝと
そのゆくすゑをおもひやる。

故宮崎三昧　ミヤザキザンマイ（劇）

通稱は瑋藏、安政六年八月一日江戸下谷徒士町に生れ、芳野金陵の門に入つて漢學を修め、後東京高等師範學校に學び、明治十二年東京日々新聞に入り、更にやまと新聞、大阪每日新聞、大阪朝日新聞、東京朝日新聞社等に轉じて、主として文學欄に執筆して同三十五年に至つた。小說の上梓されたもの「松花錄」を初として「塙團右衞門」「目黑物語」等最も名高く其他「鬼一と口」「鴎の浮巢」「椿姬」「花寄團吾」等がある。同二十三年の頃演劇改良論起り、文學者及俳優等相集つて演藝矯風會を起し「三味泉三郎」を執筆し、二十四年十月一代の名優九世市川團十郎之を淺草鳥越の中村座に上演した。文學者の脚本を演劇に上せたのは之を嚆矢とする。「鴎の浮巢」亦關西の劇場に上場せられた。書籍を蒐集するを好み且つ珍書の類を世に紹介したものが甚だ多い。上田秋成の雨月物語の如き其一である。三十九年十一月腦窒扶斯を患ひてより兩脚の自由を失ひ健康亦大に衰へて文筆に遠ざかり、大正七年腎臟病に罹り八年三月二十二日遂に逝いた。年六十一。

年寄りはミイラになれと土用かな
酒一樽人六七人隅田の花

故宮崎知全　ミヤザキチゼン（歌）

名古屋の歌人石橋蠡窓の門人であつて、三浦義住尾崎忠功、小菅草月等と共に同門中の巨擘であつたが、その中でも氏は最も多く師の俤を傳へたと言はれてゐる。師の跡を襲いで末森人舟山に在つて多くの逸話を殘してゐる。門榜に「五人以上の來客、御土産一切御斷申上候」と書いてあつたさうであるが、居室方丈狹隘なのと、贈賚の情實が釀す弊を認めたのであらう。明治四十五年の頃八十二歳で歿した。生前已に自ら謚して「阿陰化者知全居士」と言つたが後に改めて青々庵知全居士とした。詠中に

軒の松疾く枯れにしは箱にして我身容れむの心なるらん。

八十ぢまで山に住にし化者のきえんとするはめでたかりけり

世の中の爲にもならぬ化者の極樂々に暮しぬるかな

吾妹子は世に勝れたり清らにて寢屋に片しく月の影かな

といふやうなのがあるのを見ても、其の性洒々落々たるもの、極めて樂天的であつたらしい。又

すゝかずに其のまゝ土に埋むべし太りやせまし奥津城の松

など隨分思ひきつたことを詠んでゐる。無慾恬淡世事を放擲して歌詠にのみ終つた人の生活ほど眞劍の尊さを思はせるものは無い。歌道でも俳道でもこゝまで至れは一種の悟道體達であつて、宗教三昧に入つたものと異らないのである。

宮崎安右衞門　ミヤザキヤスエモン（文）

氏は福井縣に生れ、年少家を出て東京の白木屋呉服店々員となり、數奇極まる生活相次いで展開し遂に乞食の安右衞門として普く世の知るところとなつた。其の間或は愛妻の逃亡に悲涙を絞り、或は不治の宿痾に運命の儚きを嘆じ、或は農國に人夫となつて人の情の厚きに醉つたこともある。救會の留守番、一所不住の托鉢、禪道の修業、癩病院への奉仕、青年會館相談部の主任等流轉極りない生活を續けるうち宿痾愈々重り遂に大學病院に入つて胃腑切開の大手術を受け、始めて生死を超脫して大慈悲光に浴する人となり、代々木の一草廬に奉謝生活を送つてゐる。倉田百三氏と同樣もと一燈園生活をやつた人であり、今尙其の精神を生かさうと努めてゐる。著書に「乞食桃水」「出家と聖貧」「聖心」「聖暗」等がある。言々血を以て書いたやうな文であつて多くの讀者をもつてゐる。「聖暗」は氏が三十幾年の數奇なる生活を自叙傳的に書いたものである。

現住所　東京府下代々木

宮崎來城　ミヤザキライジヨウ（詩）

名は繁吉、久留米市の詩人、隨鷗吟社客員として「隨鷗集」に作詩を寄せる外「斯文」又は水野粗

梅の據つてゐる福岡日々新聞等に發表してゐる。氏は今の世に珍らしいほどの脫俗詩人で、李太白を今日見る如き人である。號來城は久留（クル）來（クル）の音通より用ゐたものである。

辛酉元旦

三元 嘉瑞見二麟鳳一、可レ無二萬國歸一禹貢一、
春到人間皆快活一、我亦醉歌抵二椒頌一、
聖朝天子雨露恩、人情知レ足無二饑寒一、
一家四口逢二豐歲一、健飯猶未レ分二鶴餐一、

久保天隨これを評して「一肚皮、不レ合二時宜一、較然在レ目、起筆遒健、有下一口吸二盡西江一之勢上」を以て斯壇に於ける位置を想像されるであらう。

八月八日天隨兄見レ過賦呈

雲樹三千里、別離十六霜、重逢驚二髮短一、
一醉覺二談長一、秋近酒波綠、夜陰燈火黃、
旋思少年日、携レ手綺羅鄉、

九日當二陰曆七夕一、同二天隨一、遊二武藏溫泉一、藤瀨冠村一邀飮、席上賦レ此、

天上情歡鳥鵲知　人間雅會恰同期、

疎簾既夕月斜皎、涼燭欲秋風細吹、
諸妓歌喉應乞巧、吾徒詩句不求奇、
吟談乘興夜過午、露滴牽牛花一籬、

現住所 久留米市裏町四〇

宮島新三郎 ミヤジマシンサブロウ（評）

明治二十五年一月八日東京神田和泉町に生れ、早稲田大學に入つて英文科を卒業した。評論集「近代文明の先驅者」「最近歐洲文藝思潮」翻譯「英米十六文豪集」「三人」（ゴルキイ）の外、多くの著譯がある。現に東京中學校に教鞭を執る傍ら、大日本文明協會編輯員となり、また「早稲田文學」同人として力を盡し、評論家として名をなしてゐる。早稲田大學留學生として、大正十四年の春より約二年間渡英することになつた。

現住所 東京市外大久保字西大久保二〇三

宮島資夫 ミヤジマスケオ（小）

名は信泰、明治十九年八月一日東京四谷區傳馬町に生れ、九歳より家を出でゝ天涯に放浪し、小僧となり、學僕となり、魚屋となり、商店の手代となり、雜誌記者となり、相場師となり、僧房の隱者となり、結婚するまで三十餘回職業を換へたと言ふ人である。「坑夫」「恨みなき殺人」「犬の死まで」「失職」「國定忠次」「第四階級の文學」「裸像」等の著があるが、「裸像」はその自叙傳小說だと言はれてゐる。

現住所 東京市牛込區戸山町二四

宮地嘉六 ミヤヂカロク（小）

明治十七年六月十一日佐賀市唐人市町に生れた。祖父傳統の饂飩屋は有名なものであつたが、父が早く家出したので筑後に行つたり、叔母の仕立屋に寄食したりした。十六歳の時佐世保や長崎で勞働をし、十七歳の時吳で勞働の餘暇小說を讀出した。上京して製本屋に這入つたがいやになつて歸鄉し、佐世保、吳に勞働中徵兵に當つて下關の砲臺に砲手をしてゐた。二十五歳再び上京して早稲田に入つたが、又吳に行き五年を過した。この間同盟罷工事件で主謀者として入牢した。後三度上京することになり、堺枯川氏の盡力によつて「二十世紀」に「鐵工場」「中外」に「煤煙の臭」といふ作を出して好評を得た。「或る職工の手記」「放浪者富藏」「群像」「破婚まで」等の著、小說「工場主の娘」「殘照」感想「涼船小記」「高原の驛路から」「橋本氏の半生」等の作がある。

現住所 東京市外瀧之川西ケ原七三二

宮林菫哉 ミヤバヤシキンサイ（俳）

名は彌作、明治二十年五月十四日長野縣植科郡寺尾村に生れ、社會主義の研究に從事し、新聞記者となり、村吏員となり、諸事業諸會社に關係した。氏は少時から父兄の奉納發句を見てゐる頃、子規隨筆其他を讀み、「ホトヽギス」の讀者となり、次いで投句するやうになつた。のち「かぶら會」を起して釜村其の他二三の友と運座し、高濱虛子村上霽月、內藤鳴雪等の諸大家に句稿を送つて添削を乞うた。一時河東碧梧桐の新傾向に共鳴したこともあつたが、鹽谷鵜平氏經營の梨畑に入つて小俳誌「土」を起して何人にも制肘されぬ作を發表した。氏の句は「ホト、ギス」「俳星」「日本及日本人」「土」に出したが「明治一萬句」「日本俳句抄」「海紅句集」等に採錄されてゐる。

渡り鳥御告早霜菜に芋に
散る柳前へも草履下ろす日や
寒がりの觸穢思ふや葬戻り
邊隅に芭蕉も植ゑて恒資あり

現住所 東京麹町區飯田町二ノ五五

宮原晃一郎 ミヤバラコウイチロウ（譯）

名は知久、明治十五年九月六日鹿兒島に生れた。幼時父母に從つて札幌市に移り、小學校も完全に修學しないで半途退學した。給仕、電信技手、新聞記者、外國貿易商店員を經て今は主として翻譯に從事してゐる。創作「薤露に代へて」外數篇翻譯「生ける屍」「織匠」其の他の著がある。尙近

くは童話にも筆を染めて「龍宮の犬」を書いてゐる。これは著者の新作童話十二篇を收めてゐるが兒童の喜びさうなものばかりである。

現住所　東京府下下澁谷六一八

宮森麻太郎　ミヤモリアサタロウ（文）

和歌山出身の英文學者、もと慶應大學教授であつたが現今は東洋大學教授である。氏は日本文學を外國語に翻譯してこれを紹介し、又外國文學を講義し解說して其移入に盡してゐる。又自ら筆をとつて脚本を書き、大に自己の信ずる處を弘布せんと努めてゐる。其の壇上に立つて論ずるや、時に奇矯に走ることあるが熱烈火を吐くの思がある。思想は可なり過激な方である。「サムライ物語」其他の英文著述の外創作もあり、大和會の委囑を受けて近松二百年記念の爲英文「近松傑作集」を同會より出版することになつた。時代物からは「關八州繫馬」世話物からは「天の網島」「梅川忠兵衞冥途の飛脚」「博多小女郎浪枕」「心中萬年草」「繼八卦桂曆」「大經師昔曆」の六編を選んで其の著譯の標題は「日本の沙翁近松傑作集」卽ち「ザ・マスターピーセス・オブ・チカマツ、ザ・シエークスピヤ・オブ・ジヤパン」と命題する。氏は震災前月に一回位づゝ近代歐洲文學の講演會を續行してあつた。

現住所　東京府下上大崎町三八〇

ムの部

故向山黃村　ムコウヤマコウソン（詩）

通稱榮五郎、一色眞淨の第三子であるが、向山源太夫の養子となつた。古賀精里の門人千坂莞爾に就いて漢學を研究し、後昌平黌に入つて甲科を及第し、成績頗る優等であつた。函館奉行支配組頭外國奉行支配組頭を經て目附役となり、大に開國主義を唱へ、後に若年寄格に準じて外國に渡り、ナポレオン三世に謁した。後東京に在つて吟詠自適、明治三十年八月十二日年七十二をもつて病歿した。著書に「遊晃小艸」「景蘇軒詩鈔」があり、德川家茂攘夷の勅命に對する辭表の作等がある。

再疊前韻

坡老九泉如レ有レ知、　此遊那　得レ不二相思一、
山川雖レ異一風月、　今　古無レ違同　日時、
恍對二畫圖一疑二夢寐一、　强將二文字一欲二追隨一、
興來　只合レ誦二雄賦一、　多事　何須　吟二小詩一、

十疊前韻

此樂　外人　何得レ知、　五張二文陣一鬪二才思一、
且欣　尙及二病愈日一、　休レ道不レ如二年少時一、
徹レ骨貧　長兼レ嬾在、　舍君我　復與レ誰隨、
世間　富貴　雲過レ眼、　身後　流傳　幾版　詩、

勵レ兒

無二消息一是好　消息、　不レ用倚レ門勞二所思一、
淮上　功名　付二兒輩一、　乃翁　長日　但圍レ棋、

武者小路實篤　ムシヤコウジサネアツ（文）

明治十八年五月東京麴町に生れた。實世の子、白耳義一等書記官子爵武者小路公共氏の弟で、一時は無車の號を用ひ、今は實名で創作を發表してゐる有名な文章家である。學歷は學習院を經て、東京帝國大學文科大學の哲學科に這入つたが、半途で退學した。學生の間より創作に志しトルストイの著作を耽讀し、同輩と雜誌「白樺」を出し、その中心となつて今日まで努力を續けてゐる。一時自然主義文學の全盛時代に、あまりに偏物質的になつたり、人間の美點を見ないで醜汚の方面、劣惡の裏面のみをその本ものと思つてゐる時に、氏は人道主義の立場に立つて創作を始めた。そして所謂新興文壇の中心勢力となつた。殊にその無技巧な筆が魂の力で書きあらはす文の痛快味は、その立脚が人道的であり卒直な物の考へ方言ひ方等と渾然たる一大文章となつて、他の企て及ばぬものを持つてゐるのに一般は驚き且つ喜んで迎へた。殊に戲曲家として重んぜられ「わしも知らない」「二つの心」「その妹」等の作に續いて「花咲爺」「桶

正成」「土地」等數多くの創作がある。古い材料を新らしく生かす、或は他のものを氏の魂で蘇らすことを努力してゐる。小說にも「彼が三十の時」「幸福者」「友情」「第三の隱者の運命」其他無數にある。「幸福者」は長篇小說といふよりも現代の聖書だと言はれてゐるほどの崇拜されたもの、「友情」は戀愛及結婚に對する氏獨自の見解を見るべきものであるし、「第三の隱者の運命」は長篇小說「出雲目」の改題であつて「耶蘇」「幸福者」とを合せて三部作をなす著者の代表作である。感想錄には「小さき泉」「感想集」「人間的生活」「女の人のために」「新らしき村の生長」等がある。「人間的生活」の中では人間の義務と其他現代の勞働と新らしき村の外戲曲未能者の仲間、新浦島の夢、等を收めてゐるし、「女の人のために」は婦人に對する雜感集で卷末にトルストイの「女と女の價値について」を附錄としてゐる。氏は小說や戲曲の中でも自己の主張を常にやつてゐるのであるが一番よく氏の主張を見ることの出來るのは

感想文や他人との論爭の文である。勝氣でまけぬ氣の氏はあくまで反對者と意見を戰はすことを避けない。そして痛快に物を言ふ。どうしても公卿出の人とは思はれぬほど男性的本質的で、少しも虛飾がない又勿體がない。文章の最もヘタだと言はれる氏の文章が文章の最もうまいと言はれる人よりも流行兒となつてゐるのはその單刀直入的にある。一字一句も徒が無い處にある。線の太い力否魂の全部的に投げ出された處にある。實にしつかりした文である。大正七年十月日向の國小林町に出張して實地踏査の上、宮崎縣兒湯郡木城局區內に「新らしき村」を創設して着々今日までやつて來たことは周知のことである。支那の新人達もこれを眞似てやつてゐるところもある。「或男」の一篇が若し自叙傳とすれば、聖人君子とならうとして寒夜に衣をぬいで民を憐み、自分の精進に妨げとなる母親の盲目的愛を押しのけようとしてゐるのに大正十二年勃發した四角戀愛關係は一般の讀者を驚かしたことであらう。何れ氏の事業な

り思想に對して疑をもつて來た者もあるから、此の後氏の開展する道は果してこの新らしき村にあるか否かはわからない。大正八年大阪大正日々新聞の客員となり又美術館建設の目論見で種々の運動をやつたが未だその完成は聞かぬ。氏は故有島氏と同樣に文壇的に思想的に大立物であり筆にロに大々的の活動をやつて來ただけに、今度のごときことがあつて以來隨分世間を騷した。氏の著作は廣津和郎氏等の手によつて「全集」となつて出ることになつてゐるが氏は別に「武者小路小集」數篇を出してゐる。

現住所 宮崎縣兒湯郡木城局內新しき村

武藤竹隱 ムトウチクイン（書）

天保十三年二月近江國彥根藩の城下に生れた。名は本全、竹陰は其の號である。又夢塘、天石齋等の別號がある。夙に晉唐六朝の書體に通じ兼ねて南派の山水四君子を巧に描く。內閣賞勳局に長く奉職した。近來其の消息を聞かない。

武藤直治 ムトウナホジ（劇）

明治二十九年一月橫濱市初音町に生れ、早稻田大學英文科に學び、現に早稻田文學の同人として文筆に從つてゐる。戲曲「夢を抱ける人々」感想集「文學の革命期」其他評論を公にしてゐる。

現住所 東京市小石川區丸山一一ノ五號

以前の住所 東京市麴町區下二番町六一

村井弦齋 ムライゲンサイ（文）

名は寬、文久三年、愛知縣豐橋に生れた。東京外國語學校露語科をやつて通俗小說家として立つた。夙に「小ねこ」「日の出島」等の小說を出して少しく世に知られたが、後「食道樂」を出すに及んで弦齋の名を知らぬ者はなくなつた。近頃は夫婦で料理割烹やうの講演をしたり、さういふ方面のものを新聞雜誌に書いてゐる。また大正六七年の頃自ら斷食を實驗しその結果を公表して健康術を傳へた。氏の少年文學方面の代表的作物を見ようと

思はゞ少年文學中の「近江聖人」や「日出島」を一讀するがよい。著書には右の外「血の淚」「櫻の御所」「朝日櫻」「衣笠城」「小弓御所」「沖の小島」等外數多い。

現住所 神奈川縣平塚町

村岡融軒 ムラオカユウケン（漢）

名は素一郎、筑前の人、夙に東京高等師範學校に學んで地方に教職にあつた。其間北海道根室及紀伊の十津川には印象深きものが多かつた。漢詩文に長ぜる氏は常に感懷を吟詠にうつして自ら樂しみ、時に「斯文」や「大正詩文」等に發表して斯壇に重きを置かれてゐる。蓋し雅文會員中に於ても錚々の聞えある作家である。

瀞峽八丁間、風景太奇絶、鬼斧驚二天工一、屏障左右列、潭水深不レ測、一碧玲瓏澈、洞穴雲氣霏、琪樹何皎潔、一巖名二蓬萊一、松蘿相點綴、仙子所二翩翔一、天地自然別、巨匠雖二黃倪一、對レ此筆應レ折、題詩自甘レ凡、神祕安可レ泄、

古曆七月既望看月

奈二此江山良夜一何、清風無レ盡月明多、吾生三壬戌一難二重値一、喚起坡翁一浩歌、

また「遊熊野本宮記」「孝女下村初枝傳」其の他の漢文で大に誦すべきものが少く無い。

現住所 東京市外代々幡町代々木富谷一五〇二

村上委山 ムラカミイザン（畫）

慶應三年五月江戸に生れた。名は義和、委山は其の號である。夙に瀧和亭に就いて南派の畫法を學んだ。明治二十二年來青年繪畫共進會、日本美術協會、內國博覽會等に出品して褒狀、賞狀、銅牌其他品物を受けしこと數次、日本美術協會及日本畫會員である。

現住所 東京市赤阪區靈南坂町二五

村上華岳 ムラカミカガク（畫）

名は震一、明治二十二年七月大阪に生れ、幼時神戸の村上家を襲いだ。初め京都美術工藝學校に學び、後京都繪畫專門學校に入り、四十四年優等の成績をもつて卒業した。文展へは第二回に「驢馬に夏草」を出して忽ち三等賞の榮譽を得、第五回に「二月の頃」第九回に「春耕圖」を出し、第十回に「阿彌陀」を出して特選となつた。大正七年一月、土田麥僊、小野竹橋、榊原紫峰、野長瀨晩花等と國畫創作協會を起し、その同人として活動してゐる。

現住所 京都市上京區平野八丁柳町六一ノ二

村上鬼城 ムラカミキジヨウ（俳）

高崎の人、中學校卒業の後、貫名正祁氏の漢字書院に入つて漢詩文を學び、更に法學を學んだ。ホトヽギス派の俳人であつて友人松浦一氏とは特別の親交がある。各種の俳誌に選者として名を知られてゐる。鬼城句集を見ればその傾向を知ることが出來るが、松浦一氏の諸論文によつて氏がいかに立派な生活より傑作を生みつゝあるかを窺ふことが出來る。

水鳥や水せきとめて住める家
年玉や長きをめでゝ山の芋
大蜘蛛の虛空をわたる木の間かな
大雷やそれきり見えず盲犬
冬川に青々と見ゆ水藻かな
凩や水こし桶に吹きあたる
古鍬をとぎすましたる飾かな

現住所 高崎市鞘町二十一

村上霽月 ムラカミセイゲツ（俳）

名は半太郎、明治二年八月愛媛縣溫泉郡垣生村今出に生れ、東京第一高等學校に入學したが、家事の都合で退學し種々の實業團體に關係した。業暇をもつて俳句を研究しつゝあつたが同鄕の先輩內藤鳴雪正岡子規の諸家と往復して其の批評を受け日本俳句の勃興後は日本新聞によつて其の傾向を追ふやうになつた。氏の句は「日本新聞」「國民

新聞」「濫柿」「ホトヽギス」「寶船」「懸葵」等に投稿されたものだが、「新俳句」「春夏秋冬」「新春夏秋冬」「俳諧日曜集」「明治大正二萬三千句」等に蒐錄されてゐる。

三つばんや炎の上の冬の月
俳行脚佐渡に渡るや神無月
京一日奈良半日の小春かな
卯の花に明易き宿とこそ申せ
花桐に普請奉行の假屋かな
名月や灯をともしたる膳所の城
うそ寒き報捨の米や一にぎり

現住所 愛媛縣溫泉郡垣生村

村上浪六 ムラカミナミロク（小）

明治元年泉州境に生れ、幼少の頃上京して某氏に養はれ、爾來放浪生活をして學校生活をしたことは一度もない。獨學ではあるが天才肌で、小說は通俗のものを主として書いてゐるが、歷史小說を書いても相當の史眼と筆とを有してゐる。「日蓮上人」の如き、材も文も實によろしい。「三日月」「鬼薊」「當世五人男」「八軒長屋」等を始め頗る多くの作がある。名は信、又の號はちぬの浦浪六とも云ふのである。氏の小說は常に死、自殺、血美女、意氣地、姦落等の材を選んで俠客、浪人、及意氣の勝つた美女の葛藤をうぬ美人め、うぬ文學めといふ調子に奴調べの江戸ツ子向の筆鋒でどん〳〵書いたもので所謂撥鬢小說である。此の小說の主眼が弱きを助けて强きを押へると云ふ日本武士的性質に合致するものがあるので隨分歡迎せられた。また歡迎せられつゝある。

現住所 下谷下根岸町八二

故村上佛山 ムラカミブツザン（詩）

豐前稗田村の人、名は剛字は大有、彦左衞門と稱し、佛山は其號である。一稿成るごとにこれを机上に置きて每日暮之に向つて再拜した。幼時筑前の龜井昭陽に學び、帷を稗田村に下して門弟を導いた。平生白蘇二集を愛讀して措かなかつた。明治十二年九月二十七日歿す。年七十。佛山稗田に住して數十年間徵辟に應じないで村にのみ居たので、一邱一壑皆其の詩に入つた。故に世人はこの土を稱して詩人村と言ふに至つた。「佛山堂詩鈔」より數篇を左に拔いて見よう。

富士山

玉帛 輸來從二百蠻一、　天邊 先認 好容顏、
溫然自與二其人一似、　君子 國中 君子山、

秋曉待二蝶字一

綿衾夢冷不レ成レ蝶、　半睡 半醒 幽意愜、
浙瀝 何聲到二耳邊一　隣僧和レ月掃二秋葉一、

題二江馬天江看山不下樓詩鈔後一

老矣 鎖西 村佛山、　猶攘二瘦臂一向二詩壇一、
驅除欲二與レ君同レ力、　滿地 妖魔 吹レ霧寒、

從二沓尾浦一舟赴二長門一

青年 書劍出二鄉關一、　幾買二扁舟一過二此間一、
一事不レ成堪二愧死一、　白頭 重對二穴門山一、

九日登二馬嶽一

淸世 恩波及二逸民一、　優游 半讀 半耕間、
秋風又醉黃花酒、　多少英雄戰歿山、

夜踰二七曲嶺一

水激レ石如レ言、　雲忙月似レ奔、　夜叉來攫レ我、
熟視 是松根、

宿添田驛作

夕投二山驛一卸二靑蓑一、　奈二此秋 寒酒薄一何、
一掬 淸愁 消不レ得、　芭 蕉墓 畔雨 聲多、

村上蛎魚 ムラカミヘイギヨ（俳）

名は成之、慶應三年九月愛知縣尾張國東春日井郡印場村に生れ、近衞兵となつて日淸日露の兩役に從軍した。後國語漢文の獨修をなし、文部省の檢定に應じて中等教員の資格を得公立中學校の教諭となつた。氏は初め俳句を名古屋の竹意庵醉雨に學び、歌を石橋蘿窓に習つた。後正岡子規の歌論に感じて舊派を改めて日本派の歌を詠み、兼ねて新俳句を作るに至つた。そして內藤鳴雪翁に師事し終始一貫今日に及んだ。家の名は蟫室（シミムロ）又は蛎魚書屋と云つて未だ號は無い。しかし

一般には其の書の屋の名が俳號として知られるやうになつてしまつた。氏は伊藤左千夫、長塚節等と親交がありアラ、ギ派歌人と親しんであつたが、今は俳人では村上鬼城氏を莫逆の友としてゐる。尙氏の句は「ホト、ギス」「山鳩」「日本及日本人」「太陽」等に投稿されてゐるが、その句の一部は「ホト、ギス雜詠集」「明治一萬句」「大正一萬句」「一萬句選」等に蒐錄されてゐる。

傘張りの傘ほす下やつくづくし
朝晴れや汐風光る濱庇
破魔弓や太しく立てし眞木柱
女どち繪島が磯や汐干狩
明くる戸に人元朝の言葉かな
吾貧は骨正月の骨もなし
鶯の巢あるべう鳴く茂りかな

現住所　高崎市赤坂町一ノ七

故村瀨玉田　ムラセギヨクデン（書）

本名は榎淸次郎、嘉永五年四月京都新街に生れ、十一歲の時、四條派の大家村瀨雙石氏の門に入り、畫才を認められて、十五歲の時養子となつた。師翁歿後は赤貧洗ふがやうで、明治十四年官設博覽會の開催に當つて出品製作の資が無かつたゝめに生母榎氏は釵を鬻いで之を助けた程であつた。氏はかゝる間に苦心奮鬪して畫名を擧げ明治十七年東宮御所の新築に際して御襖揮毫の光榮を得、翌年皇城御造營に當つて又「藤花圖」を御天井に「四季景物之圖」を御腰板其他御杉戸に幾圖を揮毫し奉り。同二十一年立太子式祝畫の御用命を受け、葉山御用邸に召されては湘南沿海の勝景を實寫し奉り、爾來皇室及宮內省の御用を奉じたことは一再でない。英米佛等の大博覽會に出品して金銀牌を授けられ、昭憲皇太后御大葬御繪卷揮毫の大命を拜して大正二年四月以來齋戒沐浴して專念執筆中であつたが同六年の春肺炎に罹り遂に心臟病を併發して九月大學入澤內科に入院治療中十二日逝去した。享年六十六。令息工學士村瀨花之亮氏等子女五人ある。

故村田海石　ムラタカイセキ（書）

名は壽、字は樂山、通稱は浩藏、海石は其の號である。大阪の商家に生れたが、幼時より書を好み且つ其の道の天才があつて將來に望をかけられた。後萩原秋巖の門人となつて其技大に進み。關西の書家として名を馳せ、教科書を書くに及んで全國に知られるに至つた。玉木愛石は其門人中傑出してゐる一人である。明治四十四年病死した。

（系統）

龜田鵬齋―卷菱湖―萩原秋巖―手島霞涯
　　―卷　鷗州　　―村田海石
　　―卷　菱潭

村田鯛坊　ムラタタイボウ（川）

名は泰助、明治二十二年十一月東京市下谷區車坂町に生れ、四十二年東京藥學校を修了後警視廳衞生部檢査所に勤務し、大正四年より藥業界の月刊紙「藥業の友」主筆となつた。氏は十三歲の四月より十八歲まで父なる俳諧連歌の宗匠海月菴昇輝に就いて學び、十九歲の一月俳風柳樽初篇より三篇までを熟讀してより川柳は總ての詩を超越せるものと觀じ、俳句を捨てゝ川柳に移つた。同月より直ちに川柳の諸書を涉獵し圖書館に就いて「柳樽」を始め「武玉川」「俳諧鴈」等の他に江戸時代の硬軟諸文學書を讀破し、同年の初秋より約二ケ年間一ケ月平均八百餘章の作句をなした。氏の川柳には次のやうなのがある。

いつそもう尼になりたい緣遠さ
朝飯の味を覺える深呼吸
大入の表ちら〳〵雪になり
琴の會哀れは母に手を引かれ
明方の雲まで身延ありがたし（大正十二年勅題）

尙氏は「古川柳難語辭典」の編纂に手を着けてゐる。

現住所　東京市下谷區上車坂町四四

村田丹陵　ムラタタンリヨウ（畫）

舊田安藩士村田直景氏の男、明治五年七月東京市に生れた。後出でゝ宗家を嗣ぎ舊和歌山藩籍となつた。名は竦、丹陵は其號である。幼より史學を好み繪畫を嗜み夙に吉澤利喜、川邊御楯翁に就いて土佐派を學ぶこと十有餘年、大に歷史畫の素養を成した。二十七年征淸の役平壤の勝報に接するや欣喜自ら禁ぜず小早川隆景碧蹄館の一戰に明軍を破るの一大幅を畫き遂に毛利公の重寶となつた。第四回內國勸業博覽會に富士卷狩圖を出陳し妙技賞を得て宮內省御物となつた。次いで宮內省の命を奉じて黃海の戰圖御屛風三隻を畫いた。命を拜してより日夜勵精一年有餘にして遂に之を落成して大に當路の賞贊を辱うし爲に世上に喧傳せられ、爾來海戰圖の屛風を畫くもの三四にして止まらない。氏曾て斯界の舊慣を打破し新面目を發揮しようと欲して、有爲の少年を糺集して日本靑年繪畫協會を設立し、屢々共進會研究會を開き進

んで其の業務を擔任し方今斯界に盡力してゐる。文展へは第一回に「大宮人」を出して三等賞に入選した。閨秀畫家村田紫園は實妹であり、伊東紅雲は門下生である。

現住所　東京市下谷區西町三

室生犀星　ムロフサイセイ（詩）

名は照道、明治二十二年八月金澤市千日町二に生れ。父に就いて經典を學んだ外學歷は無いが、詩人として夙に頭角をあらはし、官能描寫の巧妙纖細を以て新興文壇に大に認められた。雜誌「感情」編輯をする傍著作を公にしてゐる。詩集「抒情小曲集」「愛の詩集」「田舍の花」「星より來れる者」「亡春詩集」小說集「性に眼覺める頃」「結婚者の手記」「蒼白き巢窟」「美しき氷河」「走馬燈」「古き毒草園」「蝙蝠」「香爐を盜む」「自叙傳奧書」「肉の記錄」等の作がある。

春の午後

朝の湯からあがつて　小鳥の籠の手入をすまして　靜かにたばこをふかしてゐるとその靑さが深くなつてみえる

小鳥は濡れた羽がきをやつてゐる　日のなかで嬉しさうに水浴びをしてゐる　霧が立つごとに虹が立つ　わたしはうつとりしてそれを眺める

遠くからしてくるものは豆腐屋のラツパきての聲どこかで井戶をあげる音くらゐである
心はのんびりと小鳥をながめてゐる
誰も訪ねて來ない田端の奧のさくらに間のある春の午後である

現住所　金澤市川岸町一二

村松梢風　ムラマツシヨウフウ（文）

名は義一、明治二十二年九月靜岡縣周智郡飯田村に生れ、學校を出でゝ教員生活をなし。百姓となつて鍬鍾を執り、更に店員番頭となり、相場師、記者、千三つ屋、興業師等文士としては珍らしいほど數奇な境遇を經て今日に至つた。「梢風物語」「談話賣買業者」等の著作を公にした。氏はよく「面白倶樂部」「講談倶樂部」のやうな通俗刊行雜誌に、哀艶情話風の通俗小說通俗物語等を書いてゐるが、支那に遊んで歸來かの地を題材にしたものも書くやうになつた。中央公論に發表した「南の風物と趣味」のごときは、其產物であつて觀察文章愈々益々練達の域に入り、支那建築、庭園、風景風俗、飮食等に對する記述は極めて興趣多く讀ませた。明治年代の美術界各方面に活躍した十名家の詳傳「近世名匠列傳」は柴田是眞、島村俊明、狩野芳崖、橋本雅邦、木內喜八、竹內久一、森寬齋、旭玉山、田崎草雲、海野勝珉等を詳細に傳へてゐる。

現住所　靜岡縣淸水港下淸水八幡裏

村松正俊　ムラマツマサトシ（詩）

明治二十八年四月東京赤坂區に生れ、東京府立第

一中學校及び高等學校を經て東京帝國大學文科大學に入つて卒業し大學院に這入つた。慶應義塾大學の講師を勤める傍ら多くの詩と評論とを書いてゐる。近く改造に發表した「自由●力及び無價値の哲學」の如きは眞の自由幸福が何處にあるかを說いた堂々の長論文であつて、斯壇の注意を惹いた。

現住所　東京市麻布區富士見町四三

故村山遯軒　ムラヤマトンケン（詩）

字は子性、幼名は陣平と云ひ、後善治と稱し、遯軒の外隨波と號し、越後南蒲原郡三條町の人詩人半牧の弟である。幼より學を好み、三條の浪士に就いて經史を學び、長じて製革を業とし、鳳池齋と稱し、其妙を得て名聲大に顯れた。遯軒江戸に遊び、業暇詩書に親み、大に得る所があつた。出でて加城氏を冒す然も故ありて家を長子丈松に讓り、交友廣く富岡鐵齋、岡鹿門等と交り、又松田脞仙、山田霜筠、佐藤松坡、宮島松濤等と謀り淡水詩會を起し、兄半牧の沒年より二十四年間毎歳大面村に抵つて展墓するを例とした。途上茶亭の壁上に題する詩に「戰跡茫々春草青、低回吊古酒空醒、年々經過展墳路、二十四回愁此亭」といふ詩がある。後年老いて展墓の禮を缺くを慮つて官の許可を得て半牧の遺骨を三條町に改葬した。二十八年半牧招魂の碑を八幡神社内に建てた。三十五年十月六日年七十二で家に病歿した。

故村山勇三　ムラヤマユウゾウ（小）

明治二十年佐賀縣佐賀郡嘉瀬村に生れた。大正二年早稻田大學英文科を卒業して海軍々令部囑托となつた。「特待生」「蠢動」その他十餘篇の創作がある。

現住所　東京府下戸塚町字下戸塚

メの部

目黑野鳥　メグロヤチヨウ（俳）

名は眞澄、明治十四年八月十五日新潟縣北魚沼郡左瀨村字田中に生れ、三十七年三月東京高等師範學校を卒業し、爾來千葉縣佐原中學、東京私立聖學院等の教師を經て大正八年十月より東京府立第一中學校に奉職し同十四年辭した。氏は初め吉野左衞門氏の指導を受け、四十四年より渡邊水巴氏に隨つて研究を續け、大正元年十月同人と共に曲水吟社を起した。氏の俳論は「ホト、ギス」の俳談會に於ける記事によつても多少は知ることが出來るし、句は「智仁勇」「曲水」「ホト、ギス」等に投稿してゐる。尙「曲水句抄」に揭載されてゐる。

現住所　東京市赤坂區青山南町一ノ五〇

免取慶一郎　メンドリケイイチロウ（劇）

明治三十一年四月八日福井縣三國町に生れ、九歳の時上京し早稻田大學英文科に學び、「舞臺藝術」の同人となり、「わがもの座」脚本部員となつてゐる。「妬心」「冬夜行」の外まだ纏まつたものは無いが未來ある作家である。

現住所　東京市小石川區表町一〇八

故望月玉泉　モチヅキギヨクセン（畫）

名は重岑、字は主一、初め駿三と稱し、玉溪又は玉泉と號した。天保五年六月京都室町丸太町に生れ、畫を父玉川畫伯に就いて學び、頗る能畫の評があつた。圓由派四條派をも研究折衷して寫生を重んじ、山水花鳥に於て一家をなした。年僅かに二十二歳の時宮中の御用畫を命ぜられ、安政二年京都御所の御襖に「有虞兩妃圖」を畫き、次いで明治天皇御卽位の時、御屛風に萩に臥猪と藤に熊との圖を描き特賜金を拜領した。其他屢々命を拜して恩寵に浴し、明治十一年畫學校を創設することを京都府廳に建議し、容れられて學校の開設されるに當つて、氏も同校の教授となり、平安百景圖を殘して實景の沿革を知らしめ、爾來展覽會等

に出品して受賞すること無數である。明治天皇京都大博覽會へ行幸の時席上揮毫の榮を荷ひ、復帝室技藝員を拜した。三十三年巴里大博覽會へ出した「雛雞を養ふ圖」は頗る優秀であつたので大に喝采を博した。嗣子玉溪に其の業を授けつゝ門人を指導誘掖してゐたが大正二年九月遂に病歿した。年八十。

故望月金鳳　モチヅキキンポウ（畫）

名は學、弘化三年三月大阪市平野町に生れ、幼時より繪畫を好み、初め森一鳳に師事して圓山派の畫を學び、後に西山完瑛について四條派を研究した。年甫めて十七歳の時諸國行脚の途に上り、山水自然の景趣を描寫して大に得るところがあつた。少壯劍道を好んで達する所があつたが畫家に復した。明治九年上京して仕官したが二十三年以來辭職して專心丹精に力を注ぎ創作に從つた。作品は博覽會、共進會、文部省美術展覽會等に出陳していつも優賞を得、又度々宮內省御用の命を拜した。性質甚だ剛直であつて畫は動物を善くし殊に狸を畫くことを得意とした。文展第二回より第八回まで日本畫部審査委員となり、第二回に「烏骨鷄」第六回に「松上烏鷺圖」を出品して何れも名聲を博した。大正四年六月年七十歳を以て病歿した。養子青鳳氏も亦家名を恥かしめぬ名手である。

望月青鳳　モチヅキセイホウ（畫）

明治十九年四月東京市神田區新石町に生れ、父望月金鳳に學んで四條派の畫風を研究し、諸所の展覽會に出品して屢々賞を得た。文展へは第二回に「雪中群猿」第三回に「獅子」第六回に「群鹿」第七回に「猿」等を出し、褒狀又は三等賞を得た。「猿」は最も好評であつた。

現住所　東京市淺草區松清町四十二

故本居豐穎　モトオリトヨカイ（國）

本居宣長の曾孫で本居內遠の子である。天保五年紀州和歌山に生れ、初め稻楯と稱し、後中衞又平造と改めた。母の名は藤子といつて頗る賢名あつて能く豐穎を督勵した安政二年豐穎年二十二の時江戸藩邸に祇役した。父內遠病甚だ篤いといふ急報があつた。豐穎兼程江戸に抵つて父の病を視たが父は遂に起たなかつた。藩侯はそこで豐穎をして父の職を命じ、家學を襲がしめた。豐穎は弱齡といふことで固辭して國に歸つたら母は之を聞いて其の薄志弱行なのを叱責した。そこで大に感憤し再び江戸に赴き、家學を繼ぎ、遂に家を成すことが出來た。明治二年權中宣教師に任じ、尋いで宣教權中博士と爲り大祀御用掛を命ぜられ、爾來神祇大錄、宮內省六等出仕、平野神社大宮司、神田神社社司等に歷任し、遂に大教正に累進した後又東京女子高等師範學校教授に任じ、二十九年東宮侍講に轉じ、三十年御歌所寄人を命ぜられ、三十三年東京帝國大學講師を囑託せられ、三十九年帝國學士院會員を命ぜられ、四十年東宮侍講職の高等官一等に叙し、四十一年富美宮泰宮御用掛を命ぜられ、四十二年文學博士と爲り、正三位勳二等に至つた。豐穎風度端麗資性溫厚國學に精しく國文に長ず、其の大學に於て源氏物語を講ずるに言語精練當時の風尙を視る如く、聽者をして風神恍惚たらしめた。著す所「秋屋集」「本居雜考」「古今集講義」「諄辭集」及「進講錄」若干ある。其門には荻野由之、松本愛重、關根正直、丸山正彥平田盛胤、坂正臣、其他知名の學者を出して居る。大正二年二月十五日病で薨じた。享年八十青山に葬つた。

芦鶴の霞を誘ふ羽風より山も千里になびく春かな

故元田東野　モトダトウヤ（漢）

名は永孚、字は子中、舊名は遜、東野と號し、茶陽、東皐、猿岳、樵翁は皆其の別號である。文政元年熊本に生れ、幼より家學を受け、十一二歳の頃詩書論孟に通じ、十三歳詩作に耽り、十五歳經史の大義を講じ、二十歳藩學時習館居寮を命ぜられた。

橫井小楠、荻麗門、道家之山等と交り、後天下騷然たる時藩命によつて建白書を草した。中小姓番頭留守大組附、高瀬町奉行、用人等を勤め明治二年城東大江村に五樂園を開いて門人を指導した。後藩侯の侍讀となり教授に進み、東京に出でゝ宣教使、參事、等を經て明治四年五月三十日初めて朝命を拜して宮內省出仕となり專ら侍讀を務め、六年岩倉具視大久保利通諸公に君德輔導の大綱を說き、四等侍講、三等侍講、二等侍講となり、十一年論語を進講し、皇后宮太夫に任じ、十二年幼學綱要を編纂し、十四年五月遂に一等侍講となり、皇后宮御用係を命ぜられた。更に宮中顧問官、樞密顧問官の榮職に就き、二十三年一月從二位に叙し華族に列して男爵を授けられたが同月二十二日遂に病の爲に薨じた。年七十四、氏は人となり嚴正の中に溫厚の處があり、人に接すること宛も春風のやうであつた。その學は程朱を學び至誠一貫經筵に侍講し、機密に參與し盡すところ尠くなかつた。氏が嘗つて小照に自ら題して篤誠奉レ君、有レ盡無レ怨、忠純慮レ國、闇然不レ見、寬和宜レ大、慈愛及レ物、不レ倚不レ流、毋レ固毋レ必、守レ常應レ變、順レ理中レ時、世有二斯人一、與レ爾同歸、とこれによつて氏の平生を察することが出來る。尙委しくは德富蘇峯の著した元田永孚先生傳を見るべきである。著書に「經筵進講錄」「書經講義」「五樂園詩鈔」等がある。

菅公

遜之 時義 大矣 哉、　蹇々之節不レ可レ回、
相公 取捨 已分 明、　不レ惜躬爲二權姦一摧、
西鄕吉之助

萬死 在レ前輕似レ毛、　挽二回天日一大賢勞、
功成 梅一 無二餘念一、　脫却 當年 戰血 刀、
皇上幸二山梨行宮一愛二籠螢齋一貽皇后二臣拜觀賦レ之

報道 君王 恩意催、　滿籠 螢火 遠齋回、
熒々總是可レ憐レ物、　會帶二天顏餘映一來、
愛來 螢火入レ簾寒、　分與 行宮 一夜看、
夕殿 何須着二愁思一、　慇勤 保護待二歸鑾一、

籾山柑子　モミヤマカンシ（俳）

名は半三郎、明治二十年八月東京市京橋區築地二丁目に生れ、兄江戶庵籾山庭後氏の指導を受けて俳句を作り、後高濱虛子、松根東洋城の諸家と交つて其の影響を受けた。また嘗て雜誌「俳諧世界」を發行したことがある。氏は「國民新聞」「ホトトギス」等に投稿し、其の句は「新春夏秋冬」「柑子句集」等に揭載されてゐる。著書に「柑子句集」があり、株式會社籾山商店取締役社長である。

松笠を引き行く波や夏の月
葭切も鳴かずいつもの水に月
塊の蟬に孵るや杖の先
門入りて敷瓦飽く霞かな
冬草や撞木の動く影法師

震災前住所 東京市京橋區築地二丁目

籾山庭後　モミヤマテイゴ（俳）

名は仁三郎、明治十一年一月十日東京日本橋區浪華町に生れ、相模藤澤の耕餘塾に學び、早稻田專門學校の豫科。日本中學校、第二高等學校等に學んで慶應義塾に入り三十四年これを卒業した。三十六年籾山氏の女婿となりたるも養家の魚問屋を好まないで三十八年より出版業を營み著作に從つてゐる。氏もと舊派の俳句を作つてゐたが三十一年頃大谷繞石、高濱虛子等と相識り其の緣によつて正岡子規居士の新派に走つた。始め一絕家の屋號に因んで江戶庵と號し、築地に移轉後柑子邸後園の小屋に住んで庭後庵といひ、後雅號に庭後を用ゐた。其他梓月、宗仁居士、菊柏亭、不易子、庭後子等の號がある。氏の經營せる俳諧書林俳書堂は有名なものである。氏は主として「文明」「俳諧雜誌」等に投稿してゐるが、其の句は「江戶庵句集」「藻花集」等に揭載されてゐる。著書としては「遲日集」「江戶庵句集」「連句入門」「連句作例」「俳句のすゝめ」「俳諧名著文庫」「玉珂句集」「株式賣買」其の他がある。

葉柳や枝切りおろす舟の中。
すが糸をかけて結ぶや合歡の花。
ちらほらのぼたんの客にむす日かな。
震災前住所　東京京橋區新富町七ノ七

百田宗治　モヽダソウヂ（詩）

明治二十六年一月大阪市に生れ、大阪市立育英高等小學校を卒業したる外に、取立てゝ書くほどの學歴は無い。大阪で雜誌「表現」を發行し、又大鐙閣編輯部に居つた事がある。大正八年上京し、現に雜誌『日本詩人』を編輯してゐる。著書には詩集「ぬかるみの街道」「百田宗治詩集」「新月」「青い翼」「風車」「吠える犬」等あるが詩に小說に評論に童話に童謠に行くとして可ならざる無き才をもつてゐる。

青い翼
空一ぱいの
青い翼
そこから打振られる風が
吾々の野に落ちてくる、
白雲が飛ぶ、
無數の翼と、　そこに洩れる日光——
光がある一局所に漲がれる、
流れは
貝殼のやうに照り返し、
蝶は背向ひの羽を打たれて
姿を空中に消す、

一塊りの灌木、
丘陵、森のかげの
赤煉瓦の製造工場。

遠い地平に
いま
日が翳る。
現住所　大阪府下住吉公園西鳥居南

故森鷗外　モリオウガイ（文）

名は林太郎、島根縣士族森靜雄の長男、萬延元年一月十九日島根縣津和野に生れ、夙に藩黌養老館に學び、明治五年上京してドイツ語を進文學舍に修め、漢文を依田學海に和文和歌を福羽美靜に學び、明治十四年年齡僅かに二十歳にて東大醫科を卒業した。同年十二月陸軍々醫副に任じ十六年獨逸に留學して彼の地の大學に學んだ。二十五年醫學博士となり、漸次累進して四十年十一月陸軍軍醫總監に進み陸軍醫務局長となつた。獨逸より歸朝して舞姫一篇を出し文才を表はしてより常に日本文學の指導の地位に在つた。曾て雜誌「めざまし草」「しがらみ草紙」等を發行して時の文壇に裨益した事が少くない。論文、小說、翻譯詩歌脚本等ゆくとして可ならざるなしである。後寫實的の小說や材を歷史にとれる幾多の物語を書いて文壇を驚かし、劇曲の翻譯や創作を公にして劇壇に更新の氣分を與へた。「つき草」「かげ草」「水沫集」「即興詩人」「青年」「涓滴」「雁」「天保物語」「山椒太夫」「わが一幕もの」「審美綱領」「審美新說」「うた日記」「煙塵一幕もの」「續一幕物」「黃金」「杯」「還魂錄」「寂しき人々」「ジョンガブリエルボルフマン」「幽靈フワウスト」「走馬燈」等の著作並翻譯がある。醫學博士文學博士陸軍軍醫總監帝國美術院長、臨時國語調査會長、東京帝室博物館總長兼圖書頭で正三位勳一等功三級といふ長い肩書附である。妹小金井きみ子女史は東京帝大醫學部教授醫學博士小金井良精夫人令弟某氏も文才がある。劇界に名ある三木竹次氏は鷗外博士の弟である。大正十一年七月九日午前七時五分萎縮腎臟炎のため東京本鄉千駄木の自邸に薨去した。享年六十三。博士は兼ねてより死を豫期して一切の虛禮を去り墓標の如きは位階をつげずたゞ森林太郎墓とすること、林太郎之墓といふやうに之の字は入れぬことなども遺言されて居たこれによつても博士の人となりが窺はれる。遺骨は檀那寺の向島興福寺と鄉里石州津和野とへ分けて埋葬さ

れ、墓銘は畫伯中村不折氏揮毫のことになつた。博士最近の著としては「帝諡考」で、著述半のものは「文選元稿」である。投稿としては「アラヽギ」の北條霞亭は既に終りを告げ、「明星」に「古い手帳から」といふのを書いてゐたが其れで絶筆になつたわけである。博士は短冊書きは嫌ひなので一生に五六枚しか書かなかつた。歌友として佐々木信綱、伊藤左千夫、石川啄木、吉井勇、與謝野寛氏等がある。時々千駄木の家に合會した。

火

左丹塗のまろばしら　並ぶ間に火ちらちら。
大德の手に燃えし、　消えずして千とせ經し
常燈明。
誦する經　かしましき若僧と
老け癡れし老僧と　影のごとはれてゐる
中につと我ぞ入る。

右手にとる松明は　かざされぬ。空燒くは
盜みたる千とせの火。　わがおもひ

そびやきて神か人
わが立てる巖と　わかざるも一刹那。ねたけしと神忌むな。
拋ちし我手疾し。數添はる空の星。

故森鷗村　モリオウソン（詩）

諱は保定、字は士興、通稱定助後に定吉と改めた。下野國下都賀郡藤岡町の人であつて、幼より學を好み神童の稱があつた。後横塚眞齋に就いて讀書習字を學び、年僅かに十四の時名主見習となり、廉直謹嚴で村民の輿望を受けた。十九歲の時地頭の暴虐を訴へて獄に投ぜられた。囚禁九年頗る辛酸を嘗め出獄の後は藤森天山の門に入つて精勵刻苦一意專心學に努めた。その後轉じて安積艮齋の門に入つて寸陰を惜しんで勉學した。安政五年幕吏に從つて長崎に至り、翌年の春奈良奉行根岸肥前守に拔擢されてその儒官となつた。けれども意見の合はぬために憤然こゝを辭して再び官途に就かないで、爾來全國に周遊し、慶應二年下野安蘇郡葛生に在つて子弟を教育した。後鄉に歸つて塾を開き鷗村學社と稱した。氏は頗る實踐躬行を重んじて門弟を教へたので、自ら耒耜を秉つて耕耘に從つたほどである。又「文明雜誌」を發行して道義の振興に盡し、鄉俗の最惡弊たる惰胎の惡風を矯正した。重野安繹、川田剛、依田百川、蒲生重章、南摩綱紀、小山春山、岡千仞、龜谷行等鷗村の才學を惜しみ、帝都に出でゝ一旗幟を樹てることを勸めたが、確く辭して動かなかつた。晩年陋巷に住み、脚疾を患へ、學舍を閉ぢて詩文に耽り、四十年一月二十日病のために逝いた。年七十七。「鷗村文抄」「變人傳」「西遊草」「日本外史論文解」の外隨筆等その著甚だ多い。

故森　槐南　モリカイナン（詩）

文久三年尾張國名古屋に生れた。名は公泰、字は大來、通稱は泰二郎、別に秋波禪侶、菊如澹人、說詩軒主人等の號がある。父春濤、鷲津毅堂、三島中洲、清人金嘉穗等に就き漢學を修め、明治十四年初めて太政官に出仕し、尋いで樞密院屬、帝室制度取調局秘書、圖書寮編修官、皇室令整理委員、宮內大臣秘書官、式部官等に歷任し又帝國大學文科大學講師を囑托せられ勳五等に叙した。槐南は人と爲り博識慧敏、尤も深く詩學に造詣し、兼ねて字韵及明清傳奇に精通した。明治漢詩壇の第一流をもつて稱せられた。其詩を講義する時は旁證該博音吐朗々人皆傾聽せぬものが無い。夙に伊藤博文の知るところとなつて諸處に隨行して公の詩を添刪した。博文のハルピンで難に遭つて薨じた時、氏も銳創を蒙り歸舟一百韻を賦した。四十四年文學博士となり同三月七日病歿した。年四十九。この日正六位に叙せられ靑山に葬つた。著書に「唐詩選評釋」「補春天傳奇」「古詩平仄論」「浩蕩詩程」及「杜詩李詩韓詩玉溪生詩講義」がある。嘗て新詩綜を發刊し、又隨鷗吟社の盟首となつた。歿後作詩法講話及槐南集遺稿梓行された。

梅塚暮雪

王孫墓畔柳無絲、　贏得行人凍淚垂、

雪似ニ梅花一々不レ見、　氷魂墮レ水白鷗疑、

甲午元旦漫上偶占（時將レ赴ニ大磯一）

破曉 春風 甲午年、　一尊吹レ笛絲揚レ船、

詩情 合自聞レ鸚始、　水意 誰知讓レ鴨先、

暖想 驛亭花滿レ樹、　莽看 塵海浪滔レ天、

江湖 那似漁家樂、　明日 湘南 騘劃煙、

周武王

八百 諸侯練ニ甲雪一、　照見白 魚紂可レ伐、

姐已 玉骨凍 已僵、　獨哀西山冷ニ薇蕨一、

以レ暴易レ暴同雲濛、　會朝 天色清 瞳朧、

河伯 笑拱師ニ尙父一、　得非 孤舟簑 笠翁、

土居香國この詩を評して氣飄逸を挾み、味冷雋を帶び、眞にこれ絕世の奇文云々と、以て氏の才筆想ひ知られる。

有ニ以琵琶彈詞哈爾賓索レ題者一感賦

檀槽淚 溢四絃哀、　氣薄滄 雲林木摧、

君識魯 公門下吏、　百年風雪哭ニ西臺一、

晩年には支那人すら皆其の選評を請ふに至つたほどの大家であるから、氏の訃報一度傳はるや詩壇文壇は愕然として驚き且つ惜しんだ。

哭ニ槐南先生一　　高野竹隱

中興 鴻業軼ニ周宣一、　續雅猶 歌史 籀篇、

阿嶽 英靈鍾ニ盛代一、　驥騮文 采掩ニ前賢一、

早教 宿草隨ニ三月一、　都似歸 舟了 百年、

得失 自知千 古事、　詩人異 日世 家傳、

此の外岩溪裳川、塚原夢舟、福井學圃、松田學鷗關澤霞庵、三谷雲耕、其他諸家の挽詩が當時の詩雜誌に發表されてあつた。槐南の詩七古七律に大家の氣魄あるも五言は其の所長でないと言はれてゐる。

故森川竹磎　モリカワチクケイ（詩）

名は鍵藏、竹磎は其の號であつて、有名なる東京の詩人である。幼より學を好み漢籍を修めたが、長じて森槐南の門に入つて作詩を研究し同人の推すところとなつた。大久保湘南及び森槐南諸大家の創始したる隨鷗吟社の客員となり、更に鷗夢吟社を起して子弟誘掖指導の任に當り、後に詩の雜誌「詩苑」を刊行して大に斯道のために盡すところあつたが、大正八年九月七日病氣のために歿した。年四十九。

無題

蕉亭 幽閑少ニ人過一、　一鳥不レ鳴簾不レ波、

乍被蟬 聲亂如レ雨、　絲天 搖曳晩涼多。」

前宵聽レ雨一 燈愁、　容易 人凭 今夜樓、

笛裏簾 櫳如ニ水漾一、　竹風梧 月爽於レ秋。

卽事

寂々春 山裏、　東風和レ淚吹、　啼鳥 果何意、

向レ人催ニ畫眉一、

同

閒來 立盡曲闌前、　細雨纔 收絕ニ溜泉一、

滿砌 幽苔餘 潤地、　一簾殘 照乍 晴天、

太憐 葉底不 藏蝶、　待看樹 陰新ニ蛻蟬一、

贏得 海榴花 數點、　動レ人紅影 倘嬋娟、

其の詩清便宛轉別に風調を成し、かの晩唐詩人の佳句に似てゐる。

故森川杜園　モリカワトエン（畫、彫）

文政三年奈良井上町に生れ、幼名は友吉と言ひ、十三歲の時から畫を學び、十七歲の時より杜園と號した。十八歲の頃より奈良一刀彫刻を以て身を立てようと志し、專心奈良人形を彫つた。嘉永三年、三十一歲の時家を弟に讓り、安政三年春日若宮の大宿所前繪師職となつた。明治八年。如意輪堂の扉を模造し、九年、正倉院御物の寫圖を命ぜられた。それより宮內省御用を蒙むること數回、第一回より第三回まで內國勸業博覽會に彫刻を出して每回受賞し、二十五年米國シカゴ萬國博覽會に「牝牡大鹿」を出して銅賞を得た。最後の製作は「聖武天皇の御像」である。其他作品極めて多く、近世の名彫工と稱せられた。繪には「奈良戒壇院の圖」「百鹿の圖」等があり、一刀彫の鹿が少くない。氏は又狂言を能くし、「釣狐」は其の得意とするところであつた。門人に中條良園がある。二十七年七月年七十五で病歿した。

故森　寛齋　モリカンサイ（畫）

長州の藩士、本姓は石田、名は公肅、字は子容、少時大阪に出で、圓山派の畫家なる養父森徹山に入門し、又南畫を修めて其風をとり入れた。維新の際には勤王の士として國事に奔走し、明治初年再び畫道に携はつた。人と爲り慷慨熱烈、古武士の風があり、二十三年帝室技藝員を命ぜられたが拙技其任に堪へずと言つて固辭すること再三の後漸く之を受けた。後京都府畫學校の教授となつた。二十七年年八十二で病歿した。門下に野村文擧、山元春擧等の妙手がある。

森　琴石　モリキンセキ（畫）

天保十四年三月攝津國有馬郡湯山町に生れた。初め南宗畫鼎金城に學び、後、忍頂寺壽平に就いて斯道を究め、終に大阪に住し南宗畫家として大に名を擧げた。各種の展覽會に出品して受賞すること數十回に及んでゐるのみでなく又審査員となつたり、文展には第七回に日本畫部審査員に擧げられた。關西南宗畫界の重鎭である。

現住所　大阪市北野高垣町二四三四

森口多里　モリグチタリ（美）

名は多利、明治二十五年七月八日岩手縣膽澤郡水澤町に生れ、大正三年早稻田大學英文科を卒業し爾來美術上の研究及著述に從事して今日に至つた。「ミレイ評傳」「最近美術思潮講話」「オスカア、ワイルドの美學」「異端の畫家」「近代美術論」「近代美術十二講」等の著がある。現に著作の外早稻田大學に於て得意の美術論を講じてゐる。

現住所　東京牛込區矢來町六二

森　廣陵　モリコウリヨウ（畫）

名は廉、明治七年十二月前橋市に生れ、初め父森霞巖に學び、後、寺崎廣業に就いて狩野派の畫風を研究し、諸所の展覽會に出品して受賞すること十數回、美術研精會會員、獨立繪畫會會員、大東繪畫協會幹事となり、文展へは嘗て「逍遙」を出して好評を博した。作は頗る廣業の面影があると言はれてゐる。

現住所　東京市本鄉區森川町一

故森　春濤　モリシユントウ（詩）

文政二年四月二日尾張國一之宮村に生れた。家は代々醫を業としてゐる。親戚中川氏といふもの當時美濃國岐阜にあつて眼科醫として有名であるから父の一鳥は命じて修業せしめた。然るに春濤は眼科醫の修業には少しも身が這入らず唯一意專心淨瑠璃戲曲にのみ心醉して、每日秘かに其の稽古に耽つてゐる。このこと中川氏の耳に入るや否大に叱責して淨瑠璃を嚴禁した。好きな淨瑠璃戲曲と接近するのを禁ぜられた春濤は大に憂悶し果ては顏色が憔悴するやうになつた。中川氏この情況を見て痛く憫み、かの淨瑠璃の稽古に勝るものは無いかと考へてゐるうち、幼學詩韻一部を古本屋から見つけて來て與へて詩作を敎へた。然るに天稟の才ある彼は能く之を覺え、一を聞いて十を知るの明敏をもつて斯道に精進した。春濤詩集の開卷は實に十五歲の春よりの詩が載つてゐるのを見ても、天賦の才の異つてゐたことがわかる。尾張の名儒鷲津松隱は一鳥も師として事へたところであつたが、この頃は既に退隱して其の息益齋が家を嗣いで、專ら漢學を唱へて子弟を薰育した。春濤その門に入つて見ると大沼枕山は丁度その門に這入つてゐた。枕山は十八、氏は十七歲、俱に妙齡の美少年諸法に妙を得て、甲唱乙和人目を驚かした。この二家東京に出でゝ明治の大詩人と仰がれて江都の詩壇に雄視したが、氏はその後名古屋に移つて帷を張つたのに門に及んで敎を請ふものが甚多かつた。名古屋より詩人文人のこの後簇出したのはこゝに原因するのであつて、これは丁度伊豫の松山に子規出でゝ松山に俳人續出したやうな關係である。其のうち次の略統に示した人々は特に錚々たるものであつて、花南、香句、石

塾、卽山の門子は殊に衆中の翹楚を以て推され、森門の四天王と稱された。慶應二年秋九月美濃の諸姻戚を問ひ、終に越前に遊んだら勝山侯小笠原化堂氏松平春岳公等競つて招致された。此の時長谷部恕連、鈴木蓼處、大島怡齋、青木碧處の諸子と師友の交を訂した。又三國港に留ること數月の長きに渉つたが、其間得るところの雜詩大約五十首高山竹枝と共に今に至て人の稱するところである。明治六年岐阜に至り木葉庵に僑寓した。香魚水裔廬といふのは則ちこれである。是年朝廷改曆の擧があつたので新曆譜一卷を作つた。岐阜に一年滯留して居る間に作つたものが岐阜雜詩一卷である。七年の末意を決して東京に移住し茉莉巷凹に卜居した。この時天下の風氣皆泰西の學に心醉し、雅道地に墜ち終に一人の詩を提誦するものがない。そこで春濤は慨然蹶起し、先づ東京才人絕句を選して斯道を誘掖し、やゝ人の知るところとなつた。時に桑三詩社の諸子過半は皆東京に居るので爰に再び舊盟を溫め、小西湖詩酒社を創めて專ら詩文を研究した。花南、石埭、卽山等の舊人を除く外、新に社に參加したものには德山栲堂、橋本蓉塘、岩溪裳川等がある。明治二十二年十一月二十一日病のために歿した。年七十一。

江上春興

曉衫猶漬酒痕紅、　餘醉未レ醒殘夢中、
吹入桃花還入レ柳、　最無聊賴是春風、

蹉二函關一

長槍大馬亂雲間、　知是何侯述レ職還、
淪落書生無二氣焰一、　雨衫風笠度二函關一、

岐阜竹枝

環レ郭皆山紫翠堆、　夕陽人倚好樓臺、
香魚欲レ上桃花落、　三十六灣春水來、

澱上偶詠

別却桃花滅却春、　仙郎憔悴水之濱、
扇舟欲レ繫相思夢、　恰好山名是美人、

楠公墓

笠置山寒絡一邱、　延元陵古水東流、
南朝無限傷心淚、　灑向楠公墓畔秋、

（略統）

鷲津松隱
- 森一鳥
- 息益齋
  - 息毅堂　文政八、十一、八生　十五、十、五歿
  - 森春濤　文政二、四、一生　明治二十二年十一月二十日歿、年四十九
    - 森槐南
    - 丹波花南
    - 奥田香雨
    - 永坂石埭
    - 神波卽山
    - 田中不二麿
    - 林樑窓
    - 江崎蕙園
    - 青木樹堂
    - 永井禾原
    - 西原三橋兄弟
    - 石井梧岡
    - 野崎省所
    - 神波善庵
    - 藤井澹水

故守住貫魚　モリズミカンギョ（畫）

阿波德島の人。文化七年十一月壯年の頃一橋家の寢殿の屛障を畫き、又紫宸殿賢聖障子に朝賀の畫を描いて名をなした。以來明治十五年の繪畫共進會、二十三年の同會等に「舟上山圖」「宇治川の先陣圖」等を出品して銅牌金牌を得、二十三年十月特に帝室技藝員となり。二十五年二月二十六日逝いた。年八十五。二十三年十一月上野に展覽會を開いた時「紫式部石山觀月圖」の密畫を出したが、其の巧妙韵致觀る人をして絕品と稱贊せしめた。

故森田月瀨　モリタゲツライ（漢）

名は寬字は季裕葆庵と號し、大和五條の人で父は文庵母は武田氏、兄は有名な節齋である。氏幼い時紀伊に行き、林某の門に學びのち、備中淺口郡上成に卜居した。庭瀨藩主は、月瀨の醫術に堪能なることを聞いて、侍醫に聘した。この時月瀨は年既に

四十三であつたが斷然酒杯を擲ち子孫の爲に謀ると言うて、これより鷄鳴に起きて讀書し、孜々として怠らず、二十年殆んど一日のやうであつた。これよりさき月瀬は江戸に遊んで昌谷精谿に學び、又、梁川星巖に師事した。星巖は其才を奇としてその號を授けた。老年になつて、醫を廢して儒官となり、藩の子弟を教授した。後又仕を辭して、岡山に於て諸生を教へた。蓋し關西で儒者として有名なものに、森田節齋、藤井竹外及び山田某があつたけれども皆相次いで逝いたので、月瀬は嶄然頭角をあらはし明治の初年にはその弟子三千人の多きに達した。當時弟子の多きものに、東には福澤諭吉があり西には月瀬を以て第一と言はれた。明治二十年廣島に移り其の弟寛の家にあつて後學の者を教授したが、翌年六月八日病の爲に六十三歲を以て歿し國太寺に葬つた。月瀬は亦禪學を善くし、老莊の道に長じ且つ詩に巧であつた。平生書には右手を用ひ、畫には左手を使つた。晩年になつて陽明學を唱へた。操觚家は節齋を以て吉野の

故森田思軒　モリタシケン（譯）

岡山縣小田郡笠岡の人、名は文藏、思軒又は白蓮庵主と號した。父は郡長、縣會議長等になり漢籍をよくし其の能辯は實に稀に見るところであつた。それは氏の家は笠岡町の書籍店であつたので書物には幼時より親むことが出來た。氏は幼にして興讓館に入り、坂田警軒について學んだ。其の實力大に勝れ威張りたがる性質の方であつたがために暗うちや滿園ぐるみの浮目にあつた。興讓館

には上等科下等科の別があつて上等科は更に甲乙の二科に分けられた。甲科に這入つてゐるものは人に教へることの出來る力を具へて居る人のみをもつて組織してゐるのであるが氏はこの甲科にあつた。氏は當時既に詩文を能くし講義また頗る明快なものであつた。後東京に遊び慶應義塾に入り、力を最も英書に用ひた。著作家、翻譯家、批評家として明治の詞壇にその名を知られ、新聞に雜誌に著書に平生の蘊蓄を傾倒したが、會々天津條約の締結せられんとするにあたり、報知新聞社の用務を帶びて清國に航し探報の事に從つた。尋いで歐洲各國に遊んで歸り文名益々振つた。萬朝報に入り將に驥足を展べんとしたが惜しいかな惡疫に罹つて明治三十年十一月十四日不歸の客となつた。享年僅かに三十七。高山樗牛嘗て明治小說の一文を太陽の臨時增刊紀念號に寄せて「森田思軒は外國文學の翻譯家として知られ、探偵ユーベル瞥使者、月珠、哀史等は英文によつてユーゴー、ヴエルレーヌ、コリンス等の作を譯したるもの、文體は和漢折衷體なり。粗大の文字を以て能く情緻の意を傳ふるの才ありと稱す。其門末の輩はユーゴーの輸入者として子を崇拜すると雖も、ローセツチにして初めてダンテを註解することを得たりきと聞き傳へたる吾等は、佛文を解せざるもの如何にしてユーゴーの眞趣を傳へ得たるべきかを驚くのみ」と評し、其他の批評家は譯文の嚴正を稱揚してゐる。

森田草平　モリタソウヘイ（小）

名は米松、曾て二十五絃、白楊等と號した。明治十四年三月岐阜縣稻葉郡鷺山村に生れ、東京帝國大學文科大學に入つて英文科を卒業した。最初詩を作つたが小說「煤煙」を公にして名聲大いにあがつた。夏目漱石に師事して赤門作家の雄である。「草雲雀」「扉」「初戀」「自叙傳」「十字街」「女の一生」「踊」等の長短篇以外「人及藝術家としてのトルストイ」「快樂兒」イブセンの「鴨」ドストエフスキイの「惡靈」ドロシイ、カンフイ

ールドの「大戰と女」等がある。
現住所 東京府下西巢鴨町堀の内九八二

森田恒友 モリタツネモト（畫）

明治十四年四月埼玉縣大里郡玉井村に生れ、初め不同舍主小山正太郎、及中村不折、黑田清輝の諸大家に學び、後、東京美術學校西洋畫選科に入り三十九年卒業して、美術雜誌「方寸」の編輯をなし、又「帝國新聞」に入社して大阪に行き、大正三年歐洲各國を巡遊し同四年歸朝した。文展へは第一回に「湖畔」を出し、大正五年、二科會會員となり、其の第三回に「松原」「城址」を出し、又其年の第三回院展に「天草の一村」「見下した る港町」を出して名を揚げ、遂に同人となつたが大正六年同會を退いて後美術院同人となつた。第四回院展には「對岸の村人」「緩流」を出した。日本風景版畫の作がある。大正十三年三月春陽會第二回展覽會には「堤傍の外」デンサンや水墨畫を出品したが、何れも氏獨特のリズムを表現して面白く見せてゐた。

守田寶丹 モリタホウタン（書）

名は祐孝、字は維則、丹丘と號し、幼名藤之助、通稱は治兵衞、退穩して寶丹（とみあき）と稱し、又別に長祿翁、寶丹樓主人の號がある。天保十二年六月十四日に生れた。幼時より筆墨を弄して他の玩具を好まぬ。七歲の時江間東丘氏の門に入り、董其昌の書法を學び、丹丘の號を受け、後更に篁雪翁について同山派の畫法を修めた。後實業に身を投じて妙藥寶丹を製劑し、文久二年の熱病流行に人を救ひしこと其數を知らぬ。氏成功の後家を十世守田治兵衞に讓り、賑恤を好んで身を持（おさ）ること極めて儉素、又厚く三寶を信じて三千遍の念佛を唱へるを日課とし、平生古書畫を愛玩して頗る鑑識に富んでゐる。翁の書は行に似て行でなく隸に似て隸でない。所謂寶丹流の書であつて看板の文字としては、これ位品があつてうつりのよいものは少い。著書に「明治泉譜」「天災前知身體保全法」等がある。寶丹は「とみあき」であるが、藥は「ほうたん」として聞えてゐるからこの書も通俗に從つて其目次に入れて置くのである。
現住所 東京市下谷區池ノ端仲町

森鳳聲 モリホウセイ（彫）

木彫家。名は磯雄、慶應三年五月丹後國舞鶴町京口に生れ、彫刻を獨修して終に京都美術學校の教師となり、內國勸業博覽會、佛國巴里萬國大博覽會、米國市俄古世界博覽會、同聖路易萬國博覽會日本美術協會、東京彫工會等の內外の諸博覽會に出品して屢々賞を受けた。文展へは第一回に「聖章」第三回に「信玄謙信」第十一回に「百川卿」を出して何れも好評があつた。
現住所 東京府下田端四七

森無黃 モリムコウ（俳）

名は貞二郎、元治元年三月江戸駒込千駄木町に生れ、幼時慶應當時いろ〳〵の苦艱を嘗め、元老院小舍人に拜命し、十等書記生に至り、明治十九年横濱驛遞出張局及郵便局に轉じ、郵便行政及外國郵便事務に從事し、後辭して春陽堂や東京經濟雜誌社の出版物編輯に從事したり中央新聞に勤めたこともある。二十五年內務省警保局に出仕し、警察監獄學校に轉じ、三十七年東京朝日新聞に入り更に南滿洲鐵道會社の事務員となつたが、これも大正二年に辭した。氏は秋聲會の創設された時これに加入して句作をなし且つ「秋の聲」の編輯に與かつたが、後に卯杖の編輯を擔任した。木太刀と改題の後も尙これに執筆し、四十二年「初冠」の監輯に任じて今日に至つた。氏の句は「にひはり」「初冠」等に投稿されてゐるしまた「木太刀」新派句選」「大正句選」等に採錄されてゐる。氏には諸雜誌に論說考證等の揭載は見るが纏まつた單行本の著書は無い。

目くばせや蟬見出したる兒と兒
新聞や鎭石にしたる籠枕

臨濫の皐月を絶えし煙かな
雨乞や錆びし錠明くる奥の院
牡丹國香あり春の百花妍に似す
馬追虫の髯すこき居る障子かな

現住所　東京市麻布區谷町六六

故諸井春畦　モロイシユンケイ（書）

實業家であつて有名なる書家。名は直行、字は習郷、時三郎と稱し、春畦の外別號を山紫閣と言つて、武藏國兒玉郡本庄の人で、家は世々商人であつた。父直在性質頗る讀書を好んだので、氏はその感化影響を受けたと言はれてゐる。夙に東京に出て理財の學を修め、諸會社に關係して後西洋諸國のビブローカ！に倣つて業を創めた。氣宇豪爽にして雅量があり、執業頗る慧敏であつたので衆望を集めた。また夙に書家西川春洞に就いて書法を究め、豐道春海、中村春坡、安本春湖、花房雲山、武田霞洞及諸井氏夫妻を稱して西川春洞門下の七福神と言はれた。氏は楷隷の二書に長じ、尚ほ西洋の學理をも參酌し有名なる「書法三角論」を著して斯界を驚かした。又楷書恰好論、書家寶典、詩文集等の著書がある。明治書道會長として盡すところあつたが大正八年五月九日東京濱町の居に歿した。年五十四。夫人久樂女史も華畦と號し書道歌道に秀でゝ有名である。春畦の歿後忌日毎に其の居に集り書法の研鑽をなして「春畦會」と稱してゐるが、これをもつても氏の薫化の大きかつたことが知れる。

故師岡正胤　モロオカマサタネ（國）

江戸の人、父理輔は醫師である。正胤は野々口隆正に就いて國典を學び、節齋、豐輔、布志乃屋等の名を以て世に稱せられた。平田篤胤歿後の門人となり、その子鉄胤について深く國典を究めた。幕末東西に奔走し、皇室のために竭すところ尠くなかつた。文久三年二月二十二日夜長尾郁三郎等同志八名と共に、足利氏の菩提所洛西等持院を襲ひ尊氏義詮義滿三代の木首を斬り、其罪狀を板書して三條磧に梟した。京都守護職會津藩のために捕へられ、やがて重罪に處せられようとした時、長洲侯土州侯其他諸有志の懇願によつて、死一等を減ぜられ流滴され、氏は信州上田藩に預けられた。幽囚中呻吟したもの六年、其間の詞藻一として尊皇の誠心を示したものでないものがない。「みゝずの日記」「しのぶぐさ」「囚屋のすさび」「いさゝむら竹」等は皆この間の著作である。明治維新の赦に逢つて明治元年徵士に擧げられて刑法官出仕を命ぜられ、東幸に供奉して進んで監察司知事に命ぜられ、彈正臺大巡察、宣教權中博士官幣大社松尾神社大宮司、權少教正、神道事務局教授、宮內省文學御用掛、伊豫神宮本部の教授、神宮教協贊、廣島神宮本部愛媛皇典講究所の教授理事等の諸官務に就き、後進を誘掖するために國文研究會松山美娜備會を起したが、病氣のため三十一年七月歸京し、翌年一月二十三日遂に歿した。享年七十。氏は實に學德二道に優れたる人であつたから、朝野の人は一般にこれを惜しんだ。

師岡須賀氏は其後である。

ヤの部

八木岡春山　ヤギオカシユンザン（畫）

名は亮之助、明治十二年十二月東京市に生れた。下條桂谷に學び三十五年以來日本美術協會に於て毎回受賞し、文展へは第六回に「江山晩興圖」第七回に「山雨新霽」を出した。現今日本美術協會の日本畫部の幹事格で所謂協會派十人組の一人であつて、東京大震災後佐藤紫烟、高取稚成氏等と共に伯爵芳川寛治氏の後援によつて數多の作をすることになつた。

現住所　東京市牛込區砂土原町三丁目六

矢口達　ヤグチタツ（評）

明治二十二年九月二十日茨城縣新濱郡田余村高崎に生れ、土浦中學校を經て早稻田大學に入り、大

正二年英文科を卒業した。後三年間東京府立第三中學校に教鞭を執り、次いで早稲田大學講師、早稲田高等學院教授となり今日に至つた。「アルネ、コザツク」「巖の處女」「不朽の戀」「移民文學」「デヰツドの生立」「ドリアン、グレイの畫像」「戀の力」「家庭の幸福」「性的心理大觀」「クリスマス・カロル」其他數種の翻譯書及び「英文學概觀」「オトギ」等の著譯がある。

現住所　東京市外池袋大原一三七八

矢崎千代治　ヤザキチヨジ（畫）

明治五年八月横濱市に生れ、初め大野幸彦の門に學び、後東京美術學校に入り、三十五年優等の成績をもつて卒業し、三十六年より四十三年まで歐米諸國に遊學した。文展へは第三回に「夕涼」第四回に「奈良」第六回に「機織」第七回に「草苅」第九回に「籔入」「樹蔭」第十回に「磯」第十一回に「焙鑛爐」を出して褒狀又は三等賞を得、大正八年支那及び印度に遊んで其の地の風物と古美術に接して大いに得る所があつた。

現住所　東京市本郷區駒込東片町九三、仙龍寺内

矢澤弦月　ヤザワゲンケツ（畫）

名は貞則、明治十九年四月長野縣に生れ、初め畫伯寺崎廣業に就いて學び、東京美術學校に入つて四十四年日本畫科を卒業した。研精會等で賞を得たる外文展へは第七回に「熟果」第十回に「童謡」を出して好評を博した。

現住所　東京府下目黑村上目黑五七三

故矢島立軒　ヤジマリユウケン（漢）

名は剛、字は毅侯、文政九年福井藩の士家に生れた。幼より好學の心篤く、東遊して安積艮齋の門に入り、鹽谷宕陰、藤森天山等の間に來往してゐたが、藩主明新館を創立した時立軒は擢んでられてその幹事となり後助教に擧げられ、累進して明治三十一年教授に任じ、十月二十三日病氣のために歿した。年四十六。氏は資性頗る恬淡で功利の念がないため家に餘財がなかつたが、藏書は積んで數千卷の多きに上つた。文章は法度を超越して自由奔放頗る流暢なものである。經義は洛閩を主とし晩に周易魯論を治めた。後の人その遺文を刊行して「立軒存稿」と題し公にした。

矢代幸雄　ヤシロサチオ（畫）

明治二十三年十一月横濱市に生れ、東京帝國大學文科に入り、傍ら大下藤次郎、赤城泰舒等に就いて水彩畫を學び、第七回文展に「草原の赤い傘」を出した。東京美術學校教授として美術史を講ずる外美術評論、翻譯等に筆を執つてゐる。

現住所　東京府下高田村雜司ケ谷五〇三

安井小洒　ヤスイシヨウシヤ（俳）

名は知之、明治十一年十二月九日東京市麴町飯田町に生れ、學歴は格別取り立てゝ記すべきものがないけれども獨學で俳句の研究に這入つた。初め「めさまし草」の讀者であつた頃子規居士の句風に興味を覺えて三十一年の夏より作句を試みた。爾後「大阪毎日」「ホト、ギス」「寶船」「日本」等に投句したが、松ケ瀬青々子の句境に共鳴して四十年頃よりは「寶船」に全精力を捧げるやうになつた。氏の句は「續春夏秋冬」「朝日句抄」等に蒐錄されてゐる。

荔枝箋日にとぶ驛の土用かな
鴨涯の窓相似たり釣しのぶ
かり初めに渡す山市の日覆かな
帆は過ぎて游子の袷傳へけり
北山のやうすもの寒き夜の興
玉筍は日毎掘られて鮓の宿

現住所　神戸市旗塚通三ノ二九

安井曾太郎　ヤスイソウタロウ（畫）

明治二十一年五月京都中京の木綿問屋に生れ、三十七年夏、中林儛の紹介を得て淺井忠の門に入り四十年春巴里に留學し、ジユリアンに通ひ、大正三年、英國を經て歸朝し、同じく四年二科會會員

となり、其の第二同に「孔雀と女」「黒き髪の女」「スペインの踊」「縫物をする若き女」等數十點を出陳して大いに世の注目を惹き第三回に「ダリヤ」「丘の道」「女」「芽出し頃」第四回に「肖像」「女」「グロキシニヤ」「少女」を出し益々其技を認められるに至つた。

現住所 東京府下高田村字高田一六七三

安江不空 ヤスエフクウ（歌）

大阪朝日新聞の社員で其畫は一種言ふべからざる氣品のあるものである。氏はまた正岡子規生存中歌の指導を受けたもので、所謂日本派の歌人である。その歌頗縱橫で古語を使ひこなして氏獨自の思想を自由に表現し描寫するところ萬葉歌人を今の世に見るの概がある。氏が耳聾し口また常ならぬにかく歌に繪畫に精進したる努力には驚嘆せずにゐられぬ。

大住と淘綾とあはせゆるく澄む花水川の花水の橋。

夕潮の今か滿ちくる小餘呂岐の磯のたらひに嘯ぶき居らく。

秋風のそよろに吹けば蟋蟀のこほろと鳴きぬ肌し寒しも。

大地のものことごとに燒けいきる眞夏の日照り嚴しくさやけし。

海津見の豐旗雲に刺す入日八百重浪は元吾が面に照る。

於渡臺之途鎌倉丸舷上答不空道人歌並短歌

日高見の 南の島に 何ものか あさりをなさむ 何事か なさで來べきと 燒太刀の 利心起し 手綱かふ 心の駒に 鞭を打たし 餞すとて 魂合の 友がきの君が 雄詰の たけき言の葉 群肝の 心にゐりて 勇みゆく 吾はも今し 燒鎌の 鎌倉丸の 船床を 踏みとゞろかし よろこびて 船のり出でつ 萬須良雄が 擊つや矢彈の 音高き 響の灘に まさやけき かざし〻月を 浪蹴り行くも

やまと海のたけびの灘にあかねさしのぼる天津日雄々しくありけり

何ものも目にはさやらね骨鳴りつ肉躍らする灘のあら浪

現住所

安川久流美 ヤスカワクルミ（川）

名は實、明治二十五年一月一日石川縣河北郡高松村に生れ、市立南業學校に入り、病痾のため半途退學、十七歳の時父の移住地なる北海道に渡つて文章講義錄によつて文學の研究をなし、金澤市に來つて質屋、骨董商、酒屋 新聞記者等を經て目下は著述に從事してゐる。氏は個人雜誌「川べり」を出してゐるし、著書としては「小品文集」「北國俚謠集」「久流美句集かき松葉」等を出してゐる。氏大正六年奈良に三ケ月滯在した時の川柳の內に

大佛の鼻は凡夫に見上げられ

挨拶でなく奈良の鹿首をふり

尙其の外の秀作としてたのやうなのがある。

左りの眼つぶり自分の鼻を見る

倒れる樹誰れも支へてくれません

故長兄俳人曉花氏は大內白月編北國句集「蕪ずし」の中に數句載せられてゐる。次の一句は其の中より拔いたものである。

沈默はさかしさうなり餘寒面

現住所 金澤市犀川下川除町一三川柳學會

保田素堂 ヤスダソドウ（畫）

名は芳太郎、明治十五年二月大阪市大寶寺町に生れ、初め中川蘆月、竹內栖鳳、僑本雅邦に就き、後、寺崎廣業に學んだ。三十年、大阪扶桑繪畫協會で三等賞を得、二葉會、巽畫會、正派同志會、美術研精會等で屢々受賞し、文展へは第一回に「佛陀と魔女」第二回に「笛の音」「晩秋」第三回に「秋雨」第四回に「秋の夜」第五回に「榛名の初夏」第六回に「秋林」第九回に「暮春」第十回に「綠陰」第十一回に「和樂」を出して數回褒狀を得た。

現住所　東京市下谷區谷中眞島町一

安田稔　ヤスダネン（畫）

明治十四年十月新潟縣長岡市に生れ、初め小山正太郎氏の不同舍に入り、三十六年東京美術學校西洋畫家を卒業した。後獨逸に留學して四十四年六月ミュンヘン美學大學を卒業し、更に英佛に二ケ年間研究して、在歐七年の後歸朝した。滯歐中倫敦のアート・ソサイテイに出して受賞したことがある。文展へは第八回に「お茶どき」第九回に「樹蔭のまどね」第十回に「肖像」第十一回に「盛夏」を出した。現に太平洋畫會會員となつてゐる。

現住所　東京市四谷區鹽町一丁目二〇

安田靱彦　ヤスダユキヒコ（畫）

名は新三郎、明治十七年二月日本橋區新葭町の商家に生れ、幼時より軍艦の繪を好んだが十四歲の秋、古土佐派の大家なる小堀鞆音の「維盛哀別の圖」を展覽會に見て大いに感動し、翌年の春入門した。三十一年同門磯田長秋、及び今村紫紅等と紅見會を起し、寫生に熱中したが、後、古畫研究の目的で東京美術學校に入學して少時その方面の研究に耽つた。四十年畫壇の先覺者天心、岡倉覺三氏に知られ、常陸五浦の研究所に起臥し、翌年岡倉覺三及び橋本雅邦の世話で九ヶ月間奈良に遊んだ。四十二年、病を得て休養し、一年間畫筆を捨てるの止むなきに至つた。作品は第一回文展に「豊太閤」を出品して三等賞を得、第二回に國畫玉成會の「守屋大連」第六回文展の「夢殿」に二等賞を得て其の名益々揚つた。次いで第一回院展に「御産の禱」同第三回に「項羽」を出したが出陳毎に評壇を賑はした。美術院には再興以來同人に列し重きをなしてゐる。大正十二年大震災後の展覽會には「神農」を出品して斯界の賞讃を博した。日本美術院評議員。

現住所　神奈川縣大磯町臺町

保田龍門　ヤスダリュウモン（畫）

明治二十四年五月和歌山縣那賀郡龍門村に生れ、東京美術學校に入つて大正六年西洋畫科を卒業し尙ほ藤井浩祐に就いて彫塑を研究した。文展へは第十一回に「母と子」を出して特選となり、又院展へは第四回に「風景」及び「肖像」、二科會へは第二回に「老婦」「母と子」「自畫像」を出して好評を博した。現に日本美術院々員である。

現住所　東京府下瀧野川町中里三二一

安田老山　ヤスダロウザン（畫）

美濃の人。名は養、字は老山、萬里翁と號し、後字を以て本姓とした。高須藩の侍醫に生れたが家業を捨てゝ、畫家を志し、長崎に赴いて鐵翁に學んだ。又元治元年支那上海に行き書畫を以て生活し、當時彼の地に名高い南宗の名家胡公壽を師友とし、明治六年歸朝して東京に住し東都に於て當時隨一の盛名を得、淡墨側筆を以て縱橫に塗抹した其の作品は頗る世を驚倒するものがあつた。明治十五年五十五で病歿した。（一說に明治十六年八月二十四日に年四十八で歿したとも言つてゐる。）

看梅

鐵幹回春玉綴ㇾ枝　平生難ㇾ寫此幽姿
靜觀自得丹靑訣　我是人間老畫師

故安成貞雄　ヤスナリサダオ（評）

明治十八年四月二日秋田縣北秋田郡阿仁合町御倉の銅山に生れ、同四十一年早稻田大學英文科を卒業した。曾て俳句を作り俳號を蕗臺と言つて。「實業の世界」や「萬朝報」「二六新聞」「やまと新聞」等の記者となり後更に「實業世界」に入り、中外記者となり、三度「實業の世界」に歸り「野依雜誌記者」となり大正十一年六月同社を辭した。氏は磊落で博覽强記學普く識高い。氏の著書「文壇與太話」は一見漫然たる放語のやうであるが皆根柢をもつてゐる。得易からぬ文才を以て論壇一方の重鎭であつたが大正十三年七月二十二日腦溢血にて歿した。年四十。

現住所　東京市麻布區市兵衞町二ノ七六

安成二郎　ヤスナリジロウ（小）

安成貞雄氏の弟、明治二十一年一月秋田縣阿仁合町に生れ、秋田大館中學校を半途退學して鑛山の役人となり、三十八年上京して本屋の番頭となり更に幾多の雜誌記者となり、大正八年より同十年まで讀賣新聞記者となり原稿生活者となつて今日に至つた。歌集「貧乏と戀」の著及び小說「駈け出し作家」等の作がある。

現住所　東京府下大久保百人町二一二

故夜雪庵金羅　ヤセツアンキンラ（俳）

氏は夜雪庵四世の男にて、東京の有名なる俳人である。

（俳略統）

芭蕉―其角―早野巴人（嵐雪）―夜半亭蕪村―夜雪庵金羅一世―金原貞山―谷口櫻川―夜雪庵金羅二世（寛政六年正月五日歿）―同三世（慶應三年歿六十九）―（明治二十七年十月三日歿六十五）―同四世―同五世現宗匠

ある。著書には俳諧壹萬集其他の俳書がある。夜雪庵一世といふのは篠崎氏であつて、かの夜半亭蕪村の門人である。それから二世といふのは東氏で峨眉山人、芳草林、曲沙、櫻風等と號して、初め金原貞山の門に這入り、後谷口櫻川に從つた。この人は江戸の人であつて、ある事情があつて初世金羅の號をつぎ芝露月町にゐた。寛政六年正月五日歿した。高輪正覺寺に葬つた。同三世は近藤氏で慶應三年十二月二十七日歿した。享年六十九、同四世は近藤氏、通稱榮治、播州龍野に生れた。三世金羅の門人である。別號を三萬堂といふ。本郷區湯島に居たが明治二十七年十月三日、六十五歳で歿し青山青原寺に葬つた。今の金羅は卽ちこの男である。

矢田挿雲　ヤダソウウン（俳）

本名は義勝、明治十五年二月香川縣丸龜に生れ、早稻田大學に學んで後、三十九年福本日南に從つて福岡市九州日報に入社し、爾來柳原極堂氏の伊豫日々新聞社に入り、早速整爾氏の藝備日々新聞社を經て大正四年報知新聞社に入つた。俳句については同三十一年仙臺奥羽百文會に入つて若尾瀾水氏の指導をうけ、續いて佐藤紅綠氏に學び、三十二年春以來正岡子規に就き歿するまでその指導を受け、尙ほその間に於て內藤鳴雪、高濱虛子、河東碧梧桐諸氏の提撕を得たが、子規居士の歿後は全く獨自の道を歩んでゐる。氏は曾つて「日本新聞」「ホトヽギス」等に投句して居たが、今は報知新聞の「俳壇」と俳句と批評とに發表してゐる。尙ほ舊作の方は子規居士の選した「春夏秋冬」に多く拔かれてゐる。

帷子に迫る嚴の冷氣かな

幅たれて晝も寢て居る五月雨

螢火のこもりて見ゆる夏柳

稻車あるは菊曳く籬かな

水を出て短き鮎の命かな

枝蛙芭蕉玉卷く葉末かな

現住所　東京府下大森不入斗三八六

故矢田部尙今　ヤタベシヨウキン（詩）

名は良吉、伊豆國韮山の人、明治二年開成學校教授試補に任ぜられ、尋いで大學少助教に、明年中助教となり、其年十月外務省文書大令吏に任ぜられ、森有禮に從つて米國に派遣された。歸朝後東京博物館長を經て東京帝國大學教授となつた。次いで東京盲啞院長、東京女學校長となり理學博士を授けられた。三十二年八月鎌倉に避暑中海に溺れて四十九歳を以て卒した。著書に「日本植物圖解」「植物學初步」等がある。氏は外山、山氏等と共に新體詩を創唱して文學方面に盡すところも少くなかつた。

鎌倉の大佛に詣でゝ感あり

今を去ることかぞふれば
六百年のそのむかし
建長のころ鎌倉に
稻多野局が建てられし
總青銅の大佛は、
御身のたけは五丈にて、
相好いとゞ圓滿し、
見者無厭の尊容は
何れの地にも比類なし。
さるに明應四年とや、
由井のつなみの難により、
大殿破壞の其後は
紫磨金仙も雨にぬれ
風に暴されたまふこと
殆どこゝに四百年、
こはこれ人に聞くところ
われもこのごろ鎌倉の
古跡たづねてをちこちと、
杖を曳きつゝ大佛に
詣でて心おちつけて、
しかと尊顏見上ぐれば、
はちすの花もおよびなき
淨き如來の御心は
外にあらはれ何となく、
涅槃てふ語の思はれて、
凡夫不覺のわれとても
しばしの間胸の雲
霽れて無明の夢は醒め、
眞如の月の圓かなる
影見る如き心地せり、

（後略）

故矢田部善信　ヤタベヨシノブ（歌）

山口縣士族であつて、有名なる歌人、通稱は武助と言ひ、幼より讀書を好み、古書佛典に深く諸藝にも通じてゐた。資性頗る明敏且つ記憶がよくて一度目を經たるものは終身これを忘れないから、時人は氏を稱して生き字引となし、鄕に難解のことがあれば之を喜信に質問する習慣であつた。氏はかゝる時いつも丁寧親切に博引旁證十分の解說をしてやつた。又和歌を好んで秀詠甚だ多い。晩年中風症に罹つて就蓐十七年の久しきに渉つて明治三十一年十月二十六日年七十七で歿した。四十一年十二月東京靖國神社能樂堂に於て古今歌人大祭を行はれた時、喜信も亦その祭神の列に加へられたのを以て見ても、歌人としても相當の地位に置かれた人であつたことがわかるのである。

故矢土錦山　ヤツチキンザン（詩）

名は勝之、三重縣飯南郡射和村の人。夙に漢詩文を好み後大儒で詩人の岡本黃石に學んだ。隨鷗社客員として詩壇に名を稱せられ、縱橫の作を出した。頗る酒豪を以て知られ、終に健康を害して鄕里で病死した。

秋

未ニ曾秋景讓ニ春和一、　音羽山中間勝過一、
青嶂白雲紅葉寺、　剩看ニ樓閣夕陽多一、

大磯

漁郎蜑婦共謳歌、　春入ニ湘南一生意多一、
思及ニ飛翔一清世澤、　大鷗波接ニ小鷗波一、

嵐峽

紅濕山櫻宿雨含、　澗流新漲暖雲涵、
嵯峨御室花方盛、　幾度春風歌曲譜、

無題

提封百萬覇圖定、　智勇當推一世雄、
知己只餘茶博士、　山花委レ地怨ニ春風一

詠史

奉ニ還政柄一早藏レ身、　絕世聰明終始純、
恩寵賜レ班最高爵、　卽光ニ其祖一顯ニ其親一、
乾坤旋轉奏ニ維新一、　建ニ策征韓一志不レ申、
絕代英雄歎ニ末路一、　城山遂纔首邱仁、
機略縱橫與レ世宜、　謀藏洛北蟄居時、
戊辰終奏維新業、　興ニ起千年帝室衰一、
身兼ニ將相一決ニ樞機一、　嚴正操持不ニ怒威一、
游ニ息湘南一風月好、　草庵唯署古來稀、
還都奏議建ニ東京一、　經畫十年尤勗精、

樹暗 烟迷 清水 谷、　於ゝ今夏 五郭 公鳴、

氏は伊藤博文公在世當時詩賓を以て遇を受け、常に接近したものである。

生前住所 三重縣飯南郡射和村

彌富破魔雄 ヤトミハマオ（國）

明治十一年十一月熊本縣上益城郡秋津村字沼山津村に生れ、尋常中學濟々黌、東京國學院大學、同研究科を卒業の上、東大文學國文科の選科を修了し、作歌を鄕里にあつては小學校時代に槇島昭胄中學時代に新居繁儀吉永千秋翁に就き、東京に出でゝは高崎正風翁後に井上通泰博士の門に入つて學び、繪は時々吉川靈華の談を聞き又高島北海翁に就て學んだ。漢詩は中學時代より落合東郭氏の正を乞ひ、時に高島張輔、谷口鹿洞諸氏に見せた。氏は曩に東京府立第一中學校教諭、皇族御用掛、東宮職御用掛、皇子傅育官、山梨縣立都留中學校長等を經て大正十年十二月弘前高等學校教授に任ぜられて今日に至つて居る。氏は「國學院雜誌」

「心の花」「さをしか」「國歌」「扶桑」「若竹」「國風」「向上」「たづぞの」「奉公」「藝苑」「書苑」「文字」「歷史地理」等に主として寄稿してゐる外著書としては、「桂園遺稿」「花のかげ」「天津日影」「大和心」「穗井田忠友家集及小傳」「名家書翰集抄」「短册物語」「短歌作法講話」「義士帖」等があり、何れも斯界を利したるものである。

うたゝねの夢の胡蝶はかへれどもまだ日は高し櫻散る窓

朝露にたもとぬらして牡丹切るあるじの女いらへだにせぬ

あけがたにこぼれし星か草山の所々の白百合の花

秋近き風の音こそ聞ゆなれ學びの窓の青桐のかげ

御佛の寢姿ゑると大岩にあなゝひ結ひて工等のぼる

孔雀舞ひ鸚鵡囀る朝明に聖者おりくる靈鷲山かな

等は氏の數多き詠歌の中でも名高いものである。氏の祖父彌富朋承、叔父同承瑛等何れも田舍の歌人として相當の人であつたことはその家集によつて知ることが出來る。尙短册蒐集家としての氏は特に有名なものである。

現住所 弘前市相良町五

故柳川春葉 ヤナガワシユンヨウ（小）

名は尊之、明治十年東京下谷に生れた。祖父は播州龍野藩主の御側役であつた。最初廣津柳浪の世話になり十八歲の時尾崎紅葉門人となり短篇「街頭」を書いて讀賣新聞の懸賞小說に當選して創作的天分を認められ二十二歲の時長篇「夢の夢」を讀賣新聞に載せ頗る好評を博した。春陽堂にあつて雜誌「新小說」の編輯に從ふこと七年この間長短篇の作甚多く聲名漸くあがり小栗風葉、泉鏡花、德田秋聲等と共に紅葉門下の四天王と仰がれ、硯友社內に頭角を表はした。自然主義の潮流文壇を滔すに至つて通俗作家家庭小說家として新聞の續きものを執筆したが典雅婉麗洒脫輕妙の文を以て自然人事を表現するところこの方面に於ては第一人者として高評嘖々たるものがあつた。氏は飽くまで堅實なる道念の上に立つて我が國固有の道德を高尙し之を基調として人情の機微世事の萬態を描いてゐるから家庭團欒の中に高誦して趣味盡くることが無い。「生さぬなか」の如きは愛の源泉、繼母と實母、敎養者被敎養者等の社會問題を取扱つた一種の暗示的諷刺をやつたのが非常に歡迎された。「母」「かたおもひ」「うき世」「二人靜」等は何れも技巧の圓熟した晚年及晚年に近い作である。氏の歿後金尾文淵堂は春葉全集十八卷を紀念出版した。「生さぬなか」のやうな長篇ものには比較的實感を盛つたものが多いやうだ。幼い時母に別れて繼母の手にかゝつたやうな關係から、さういふことを多く材料に取つてゐるやうに思はれる。俳句に趣味のあつた人だけに氏の短篇には俳味が多い。生活氣分も俳趣味が多かつた。祖母に似て骨董趣味があり交際も廣かつた。死ぬ時に枕

もとに九官鳥がゐたりお葬式に力士等も會葬したのでわかる。

秋晴れの岡にのぼるや弓とりて
枝川や人なき雨の四手綱
二階から遠き火事見る寒さかな
寺見えて露の萩原みち遠き
陶庵侯に招かれて
仰ぎ見る山皆奇なり五月晴

故柳 敬助 ヤナギケイスケ（畫）

明治十四年五月千葉縣君津中村泉に生れ、中學の頃堀江正章につき洋畫を學び、後東京美術學校に入學した。三十六年、中途退學して黒田清輝の白馬會研究所に入り、間もなく米國に留學して大いに研究した。在米五年ブリツヂマン、ヘンライ、チェース等に就き、後歐洲に行き、佛英に留る事一年有餘、四十二年九月歸朝した。文展には第四回に「朱羽」第五回に「病婦」第七回に「椅子に凭りて」を出し、大正三年二科會の創立と共にその鑑査委員となつたが、四年退會し、第十回文展に「佐久間大將立像」を出した。大正十二年歿したが、同九月石井林響外六氏の盡力によつて東京三越樓上にてその遺作展覽會を開いたが震災の爲遺作を燒いたのは惜しいことである。

柳澤 健 ヤナギザワケン（詩）

明治二十二年十一月三日福島縣若松市榮町に生れ會津中學校、第一高等學校を經て東京帝國大學法科大學に入つて大正四年佛蘭西法科を卒業し、横濱外國郵便局長を勤め、大正八年四月公職を辭して大阪朝日新聞に入り、同九年渡航して約一年半歐洲に遊び今日に至つた。詩集「果樹園」「海港」「現代佛蘭西詩集」翻譯「印象派畫家」「レニエ詩集」等の著の外、紀行「西班牙遊記」「シチリア遊記」「伊太利遊記」「南佛遊記」隨筆「巴里の藝術」「文樂座 印象記」「アンナパヴロヴア」「ジヤン・ジョレスの人及び思想」評論「子は親に優る」「婦人論者の立つ岐路」詩「希臘頌歌」等の作がある。今は外務省に入り書記官となつて、亞細亞局に勤務してゐるが、多忙の閑をもつて盛に詩を作り、文藝を論じてゐる、大正十三年四月十三日家族と共に渡佛し、西條八十氏も之と同行した。

現住所 佛國

柳 宗悦 ヤナギソウエツ（文）

明治二十二年三月二十一日東京市麻布區市兵衛町二ノ一三に生れた。學習院を經て帝大文科大學哲學科を卒業の後著作を事としてゐる。著「キリアム・ブレーク」「ブレーグの言葉」「宗教とその眞理」「朝鮮とその藝術」等の外數篇の宗教哲學文藝上の論說がある。夫人は有名な獨唱家柳兼子女史である。千葉縣我孫子の別莊に瞑想に耽つては神拂の考察をなし時に東京麹町の本邸に歸るのである。氏は實に我が宗教哲學界の第一人者であり且つ最も眞摯なクリスチヤンの一人である。最新刊「神に就いて」は著者が宗教生活の核心をなす「神」の本質についてその多年の深き蘊蓄と尊き體驗とを傾到した良著である。

氏は「神の存在と言へば、人はすぐその存在に形あるものを聯想する。しかし見えない神を見ゆる事物よりより明かに見ない人間は神の國に入る事は出來ぬ」と言つてゐる。志賀直哉氏の薦めによつて、兼子夫人と共に京都に寓を移すことになつたさうだ。

現住所 東京市赤坂區高樹町一二ノ七

故柳田正齊 附柳田泰麓 ヤナギダセイサイ（書）

名は貞亮、字は節夫、正齋は其號、下總國香取郡佐原の人、初め江戸に上つて昌平黌に學び、入木道を究め。遂に天保の末より神田お玉ケ池に住して書道專門の大家として知られた。其の書は趙子昂王羲之を學び後一家をなし、安政の大火に遭つて居を本所に移し、暇ある毎に天下周遊の目的を遂げ足跡全國に遍かつた。明治二十一年九月三十日病んで歿した。享年九十二。著書に「歲華小牘」

「今樣假字消息」「論書二十首」及詩文集若干卷ある。其の子泰麓も亦斯道の大家をもつて知られ本所に在つて門人を指導してゐたが大正十二年の大震火災に遭つて窮厄に陷つた。讀賣新聞社の看板に假名で「よみうり」と書いたのは有名なものである。現代に於ける臨書家中最も有名の一人である。

傳統　柳田正齋—柳田泰麓—松本蔦齋

柳原白蓮　ヤナギワラビヤクレン（歌）

明治十八年故伯爵柳原前光卿を父とし今上の御生母從二位早蕨の內侍を伯母として生れ現伯爵柳原義光伯と同腹の姫君である。十六の頃京都下加茂の北小路家へ迎へられ、やがて結婚の後、男子を殘して生家に歸る。佐々木信綱氏の門に入りて歌を學び英和女學校に通學して惱める過去を逃れようとしたが明治四十四年の春二十七歲で福岡の富豪伊藤傳右衞門に嫁ぎ歌によつて悶をやる外京大の講師について哲學の研究をした。毛利元恒、同愛子、近衞秀麿、三木露風氏等と牧神會を起した。白蓮女史の名によつて短歌壇に評判のあつたのはこの頃である。大正八年十二月「解放」に出した戲曲「指蔓外道」の一篇は女史が三年苦心の餘になつた作であつて、帝劇に上場された。著書「几帳のかげ」「幻の華」「白蓮自選歌集」「處女のころ」等は何れも有名なものである。後宮崎龍介氏と戀愛に陷り大正十一年遂に伊藤家を離緣して柳原家に復歸し男子香織を擧げた。

矢野橋村　ヤノキヨウソン（畫）

名は一智。明治二十三年八月愛媛縣に生れ、永松春洋について南宗畫を學び、文展へは第七回に「湖山清曉」第八回に「雨の後」第九回に「雲邊淨刹」を出品して各褒狀を受け、院展へは第四回に「麓」を出して其の才を認められた。

大正七年一月北野恒富、水田竹圃、山口草平等と大阪に茶話會を起し、別に日本美術院院友として努力してゐる。大震災後大阪高島屋に開催した同氏展覽會には二十五點あつたが、大和繪風のものや寫生風のものや輕妙洒脫なものなどがあつて觀者の注意を惹いた。大正八年主潮社を起し、その後大阪市美術協會設立に盡力し、同十三年天王寺悲田院町に大阪美術學校を設立し本科研究科に分つて男女兩部を設けて斯道の發展に盡してゐる。

現住所　大阪市南區天王寺伶人町

矢野龍溪　ヤノリユウケイ（文）

氏は大分縣の人、舊豊後國佐伯藩士矢野光儀の長子である。父は政治の才があつて小田縣令を奉職して治績があつた。氏は幼より學を好んで讀書に耽り、諸葛孔明を慕ひ韓魏公等の人と爲りを欣び弱冠上京して慶應義塾に入つて英語を學び、明治三年卒業して助教となつたが、大阪に去つて同地の慶應義塾を管理した。尋いで德島英學校に教鞭を執ること一年の後京阪の間を漫遊して十年再び出京の上政治經濟學を獨修した。其の間矢田部良吉等と定期講談會を開いて修學の資とした。翌年擢んでられて大藏省書記官に任ぜられ檢査局に勤務した。時に大隈重信大藏卿として政局に當つてゐたが氏を頗る信任した。十三年地方官會議開會に際して內閣委員を命ぜられ尋いで太政官少書記官大書記官兼二等檢査官に陞任した。此間紙幣增發に關し之が價格回復に盡すところがあつた。十四年統計院幹事に任ぜられ、太政官大書記官となり六月農工高等會員を命ぜられた。十月內閣の變動によつて大隈氏の退官すると同時に氏も亦辭して藤田茂吉と共に愛知新聞記者となり次で改進黨組織に關して盡力するところがあつた。十八年歐米各國漫遊の途に上り翌年の夏歸朝した。爾來再び報知新聞を管理し聲名頓に揚つた。二十年の春政界に志を絕つて都門を去り京阪及び九州地方を周遊し、後復た同社に入つて主筆となつた。二十二年大隈伯外務大臣となつて條約改正の事があつた時、氏は頗る之に參畫した。既にして輿論の反對を受け改進黨亦其勢力の失墜にあひ、氏は之が恢

復を圖り、竟に九州同志會と氣脈を通じ、議會開設に對する準備をなした。爾後復た政界を去つて讀書と銃獵を事としたが、二十三年伊藤侯爵の推薦によつて宮內省御用掛となり次いで式部官に任ぜられ後從四位勳三等に陞叙され全權公使に任ぜられ三十二年全く野に下つた。著書に「經國美談」「浮城物語」「演說文章組立法」「文體文學新篇」「出鱈目の記」等數多い。中でも「經國美談」は希臘國の古い歷史によつて執筆したもので、明治初年中年の讀書子には大變歡迎された。柴東海散史の「佳人の奇遇」と相並んで評判高いものであつた。「出鱈目の記」は名の如く全く隨想雜筆だが肩の凝らぬものとして廣く讀まれた。近時大阪每日新聞客員として同紙に寄稿することがある。

現住所　東京市小石川區大塚仲町四一ノ二

扇橋俱樂部

山內愚僊　ヤマウチグセン（畫）

名は貞郎。慶應二年六月江戶に生れ、初めは高橋由一に就き後、五姓田芳柳、渡邊文三郎等に學び、二十三年、大阪に移つて大阪朝日新聞に入り、二十七年關西美術會を創立し松原三五郎等と共に大阪洋畫界の爲に盡した。後、フランスに遊んで研究し、大阪洋畫界の元老となつた。門下に赤松麟作、山本森之助、國枝金三、大塚作二郎、赤野愚村等がゐる。

現住所　大阪府下豐能郡池田室町

山內秋生　ヤマウチシユウセイ（文）

明治二十三年十月福島縣南會津郡八幡村に生れ、東京攻玉社中學校を出て、少年少女文學に志し巖谷小波の門に入つて學んだ。曾て東京每夕新聞記者となつたことがあるが現今は雜誌「日本青年」の編輯主幹をしてゐる。氏は少年少女の雜誌に作物を寄せた數は三四百篇の多きに及んでゐる。故竹貫佳水氏等と少年文學研究會を組織して、童話選集「お伽の森」「お伽舟」「お伽學校」「お伽の日本」「雀のお宿」等を同志と共に刊行した。著書としては抒情小品文集「春の別離」の外、少年のために「作文自習書」「手紙大辭典」其の他文章に關する著述數種がある。

現住所　東京市外巢鴨一四七六

山內多門　ヤマウチタモン（畫）

明治十一年四月宮崎縣都城に生れ、都洲と號す。十六歲の時鄉里の狩野派畫家中原南溪に就いて學び、三十二年三月上京して川合玉堂の門に入り、又橋本雅邦に學んだ。三十六年、日本繪畫協會で銅賞を得たのが最初で、其後屢々受賞し、文展へは第一回に「驟雨」第四回に「波濤に洗はれつゝある巨巖」第五回に「日光山の四季」第六同に「郡上十二景」第八回に「颶風」第九回に「盛夏、初冬」第十一回に「薩南六題」を出し多く三等賞を得た。又院展第一回には「雨後」を出した。大正八年帝國美術院推薦となり、十二年展覽會の審査員となる筈であつた。大正十三年六月東京竹の臺陳列館に於て氏の門下より成る茗葉會第六回展覽會を開いたが大に見るべきものがあつた。

現住所　府下淀橋柏木八九六

故山縣含雪　ヤマガタガンセツ（詩）

名は有朋、含雪と號し、又別に無隣庵を京都に結んで無隣庵主と號した。舊山口藩士で天保九年四月に生れ、狂介と稱した。維新の初參議兼內務卿となり、又陸軍中將兼陸軍卿、內務大臣、內閣總理大臣に任じ、陸軍大將樞密院議長等の顯官を經遂に從一位大勳位公爵に進み大正十一年病をもつて薨去した。公は政治の餘暇常に風流韻事を事とし詩歌文章を始め入木道に至るまで見るべきものが甚だ多い。

信州途上作

杜鵑聲裡出二城闉一、　六月蘇山又逢レ春、
諏訪湖邊暫停レ馬、　桃櫻杏李一時新、

失題

紫電光中酒三杯、　蓬窓孤坐聽二奔雷一、
觸レ山風浪崩還起、　白雨黑雲翻レ地來、

久能山

三百昇平一夢間、　英雄事業幾辛難、
松青砂白駿南路、　來訪將軍埋骨山。

偶成

雪浸苦志熱腸冷、　風送清香一去又來、
獨按地圖問燈下、　瓶間帶笑一枝梅。

圍棋

數石飛々點局中、　機心不語自然通、
兩三妙手隨時施、　忽作周郎赤壁工、

寄國祝

浪風もおたやかなりとわたのとの人そよりくる
皇御國に

立太子式に

大空にすかたのとけく舞ふ鶴のさもゆたかなる
君か御代かな

山内義雄　ヤマウチヨシオ（翻）

明治二十七年三月二十二日東京に生れ、曉星中學東京外國語學校の佛語科を經て、京都帝國大學經濟學部法學部に學び、後外國語學校講師となつて今日に至つた。駐日佛國大使、クローデル氏の詩翻譯がある。

現住所　東京牛込區市ケ谷田町二ノ二四

故山岡鐵舟　ヤマオカテツシユウ（書）

名は高歩、字は猛虎、鐵太郎と稱し、鐵舟と號し有名な勤王家にして草書の大家である。天保七年大川端四軒屋敷の官邸に生れ、父に從つて飛驒に生長した。久須美順三郎祐義に就いて槍術を學び樫原流の極意を得、劍術は眞影流を學んだ。又井上八郎清虎の門弟と成つて甲州流の軍學を學び、中にても頗る劍道を好み、千葉周作について一流を發明して無刀流と號し、春風館を設立して多くの門生を敎育した。讀書習字は富田定禮に受け、後に岩佐市右衞門一亭に就いた。また善倫に就いて大師流を學び遂にその傳統を得て一樂齋と號した。人の爲に書くこと實に其の數を知らない。その筆を走らす早きこと神の如しと言はれた。晩年朝鮮版一切經の書寫に力を注ぎ、明治二十一年二月より病床にあつても尙一日に一枚を課した。同年七月十九日拂曉次の辭世を口吟して、白衣を着坐禪の姿をなして椅子に凭り微笑して逝いた。年五十三。功に依つて華族に列し勳二等に叙せられた。

腹いたやくるしき中に明けがらす　（辭世）

過臨川寺（寺在信州木曾、傳稱浦島太郎舊跡）

浦子曾乘龜背去、　仙蹤誰是答其非
今朝來見臨川寺、　竿影依然坐釣磯、

逸題

學劍勞心數十年、　臨機應變守愈堅、
一朝壘壁時摧破、　露影湛如還覺全、

門人千葉道本建累卵堂于谷中全生庵

時應其需

行險徼幸皆邪路、　居易守仁途不窮、
更有乾坤無私句、　不生不滅主人公、

病申作

二竪何因煩此躬、　大飲暴食害不空、
轉苦爲樂觀自在、　生死任天臥孽中、

故山岡米華　ヤマオカベイカ（畫）

南宗畫家。土佐國高知の人。畫を名草越峯に學んで一家をなし、文展第二、三、五、六、七回の日本部審査委員となつた。作品は第二回に「水墨山水」三回に「淺絳秋景山水」五回に「水墨山水」六回に「水墨夏景山水」七回に「萬壑松濤」がある。大正三年四月甲府に旅行中歿した。年四十七

山縣適所　ヤマガタテキシヨ（書）

氏は舊山口藩士で東京の書家、天保八年十一月長州萩城下に生れた。通稱篤藏、適所は其號、一に華巖と號し、夙に學を修め書法に通じ曾て帝國博物館學藝委員に擧げられ正七位勳八等に叙せられた。後宮內省圖書寮助心得に奉じ又日本美術協會々員となつた。近來その消息を詳にしない。

現住所

山岸光宣　ヤマギシコウセン（劇）

明治十二年二月高田市に生れ、東京帝國大學に入つて明治三十七年獨文科を卒業した。後四十年頃より約二ヶ年ばかり獨逸に留學して、かの地の戲曲について大に研究を積んだ。大正十年文學博士となり、早稻田大學教授、東京帝國大學文科部の講師となつて、得意の講演を續けてゐる。著書「現代の獨逸戲曲」「藝術と藝術家」の外、評論「獨逸文學に於ける世界同胞主義の運動」「ラインハルトの民衆劇場」「獨逸劇界の最新傾向」「新獨逸表現派の社會革命劇」等の作がある。

現住所　東京市牛込區原町三ノ六

山口花笠　ヤマグチカリユウ（俳）

名は林造、明治十二年十一月二十日富山縣西礪波郡福田村和田に生れ、明治二十九年「日本新聞」を讀み、新俳句の興趣を感じて子規居士の門下となり、三十年頃碧梧桐の漫遊を機として越友會を

起して今に至つた。其の間新傾向の句を喜び或は不滿に思ふこともあつた。氏の句は「高岡新報」「ホトヽギス」「日本人」「文庫」「新聲」等に投稿したが「春夏秋冬」に揭載されてゐる。

蝸牛檀林を出でゝ正風に

現住所　富山縣福田町佐野和田

山口松陵　ヤマグチショウリヨウ（詩）

名は宗義、出雲に生れて少より漢詩文を學び一家をなすに至つた。雅文會員として其詩は主に「大正詩文」に出してゐる。

望海

茫々千里海、放レ眼見二潮生一、山遠天疑レ盡、
風收雲欲レ平、帆邊歸鳥小、離背夕陽明、
誰以二蒼溟色一、醒二吾三日醉一、

海樓觀月

水面明二於鏡一、遙峰倒影浮、新凉沁二吟骨一、
月湧海門秋、

送二人之一北海道一

北住謀成理二旅裝一、荒陲從レ此樂二桑梓一、
水村處處新秧綠、山郭家々熟繭黃、
幾樹櫻桃誇二味美一、滿畦燕麥禱二年穰一、
知君子女團欒裡、唱出幽風七月章、

小金華歌

怪石昔從二仙掌一落、奇勢嶙峋龍虎躍、
層巒重嶂森以嚴、絕壁倒臨千仞壑、
十洲三島天所造、此石莫二是蓬萊島一、
蒼然古色幾星霜、希世何啻連城寶、
獲レ之向レ人昂然誇、坐上忽生五色霞、
高人寄レ興在二仙境一、知是君家小金華、
其の詩逸宕恣肆にして前人の束縛を受けない。

山口半峯　ヤマグチハンポウ（書）

氏は故長三洲に師事して其技大に熟し、且つ普く晉唐古法帖に就いて研鑽を積み遂に一家をなすに至つた。又宮內省に出仕して貴重文書の淨書に從事し且つ各宮殿下の御用命を拜し、次に文部省の依囑によつて小學校の書方手本を書いた。その書

する所の三體千字文は故師長三洲に髣髴して、筆力勁運高尙優美雅趣に富んでゐる。現に東京高等商業學校に於て習字を教授してゐる。

山崎斌　ヤマザキアキラ（小）

明治二十三年十一月九日長野縣東筑摩郡廐績村に生れた。十九歲の時上京して國民美學會に學び後放浪して朝鮮に行き「京城日報」を編輯したことがある。大正八年歸京して雜誌「青年改造」を編輯し所謂帆足事件にかゝはつて朝憲紊亂罪に問はれた。著書に「靜かなる情熱」は長篇「二年間」の外中篇「波」短篇「桃」「郊外」等の新作を輯めてゐる。「二年間」は島崎藤村氏をして第二の國木田獨步生るとまで激賞させたものであり、「波」は淫卑な港町に疲れきつた生を送つてゆく一夫婦の面影を描いたものでフローベルの「眞心」を思はせる渾然たる藝術品である。「靜かなる情熱」の標題は作者の持ち味をよく言ひ表したる言葉である。この作は眞に氏の出世作であり代表的

名作である。小說「三月」「結婚」「沼津町在の朝」「郊外」「白い花」評論「壺中談議」等新作を發表してゐる。

現住所 靜岡縣土肥郵便局區內土肥溫泉中濱

山崎樂堂 ヤマザキガクドウ（俳）

本名は靜太郎、明治十八年一月十九日和歌山市に生れ、中學校卒業の後、京都第三高等學校に入學し、更に東大工科に入つて建築學科を專攻し、四十二年に同學を卒業した。爾來大藏省臨時建築部に奉職したが大正二年退職して建築設計の業に從ひ、傍ら著述に從事してゐる。南品川の最賀氏舞臺、本鄉弓町山本舞臺、鎌倉能樂堂、麴町能樂俱樂部、富士見町細川侯爵家能樂堂、厩橋梅若家能樂堂、染井松平伯爵家能樂堂等は皆氏の設計に成つたものである。三十三四年頃より句作に興味を覺え、ホトヽギスを愛讀し、「浮巢會」同人なる吉田笠雨、竹中雄濱、岡本松濱、岡本樂南諸氏と交り、三高に入るに及んでより寄宿舍に於て俳句團體を結び「三高俳句會」を起した。爾來松根東洋城、清水鑑江、安田木毋、粟津水棹、松田露聲、左田野衣川。岩動炎天諸氏と出入し、句佛法主の邸にも行き四明、羊我、瘦石、秋蒼の諸氏と相知るに至り、三十九年東京帝大に入るに及んで虛子の門に入つた。現にホトヽギス派の論將として有名なことは一般の知るところであるが四十二三年頃作句の絕頂として主として能樂に深入りをしてゐる。氏は「ホトヽギス」「懸葵」「日本新聞」等に投句し、其の句は多く松根東洋城氏の編にかゝる「新春夏秋冬」に蒐錄されてゐる。趣味は多方面で、繪畫、謠曲、大皷、ヴアイオリン寫眞、動物剝製術、和洋音樂、和洋演劇演藝、能樂、食物道樂、酒、煙草等である。著書には「家と人と」「詳說圖學講義」等專門に關したものゝ外に、能樂に關して「謠曲地拍子精義」「鼓筒の鑑定」等能樂に關するものがある。

壬生の面烏許なる顏をかくし鳧
なき人の衣に涙や壬生念佛
鷄頭の種を惜しみぬ菊五郎
潮變る浪の形や夏の月
六月の雲や釣瓶の竿の先
袷著てかろき芝居の草履かな

現住所 東京市牛込區築土八幡町二四

山崎紫紅 ヤマザキシコウ（劇）

名は小三、明治八年三月三日橫濱市戶部町に生れ、高村光雲に就て學ぶ、本彫をよくし、內外國博覽會に出品して幾度も受賞した。文展へは第二回に「大葉子」を出して三等賞を得、第四回から彫刻部審査員に任じ、第四回に「達磨」「東奧の乙女」第五回に「林和靖」「滄溟」「霰」第六回に「山そだち」「竹生島」「供養の乳」第七回に「觀音」「雨悠々」「產屋」第八回に「孃歌」第九回に「みなかみ」「獲物」「藥研」第十回に「響泉」第十一回に「狹圓頰相乙女」「弗多羅」を出して好評を博した。氏は特に人物に妙を得、又裝飾的彫刻並彩色の法に精通した。門下に松尾朝春、佐藤朝山等がある。

大正十二年十一月東臺派曠原社派の兩美術團握手の時北村朝倉氏等の若手連より除外的にされたの花の花咲く庭のあたり花の香に醉ふ日の光天の榮を集めけるかな

現住所 橫濱市戶部町二ノ四一

山崎朝雲 ヤマザキチヨウウン（彫）

明治元年二月福岡市櫛岡町に生れ、高村光雲に就て學ぶ、本彫をよくし、內外國博覽會に出品して幾度も受賞した。文展へは第二回に「大葉子」を出して三等賞を得、第四回から彫刻部審査員に任じ、第四回に「達磨」「東奧の乙女」第五回に「林和靖」「滄溟」「霰」第六回に「山そだち」「竹生島」「供養の乳」第七回に「觀音」「雨悠々」「產屋」第八回に「孃歌」第九回に「みなかみ」「獲物」「藥研」第十回に「響泉」第十一回に「狹圓頰相乙女」「弗多羅」を出して好評を博した。氏は特に人物に妙を得、又裝飾的彫刻並彩色の法に精通した。門下に松尾朝春、佐藤朝山等がある。

大正十二年十一月東臺派曠原社派の兩美術團握手の時北村朝倉氏等の若手連より除外的にされたの

で一波瀾を起したが、十四年帝展審査員に擧げられた。
現住所　東京市本鄕區駒込林町一四二

故山路愛山　ヤマジアイザン（文）

名は彌吉、元治元年靜岡縣沼津に生れた。家は代々德川氏の幕臣天文方である。愛山と號して夙に文名を揚げた。氏は史學に通じ詩文に長じて其の文を作るの早きこと前に福知櫻痴があり後に氏があると言はれてゐる。國民新聞及雜誌國民の友に執筆して多くの愛讀者を有したが後信濃毎日新聞社に聘せられてその主幹となり、後更に「獨立評論」を發行して侃々諤々の論を書いてゐたが大正六年三月十五日五十四歲で病歿した。友人內山省三氏は氏の文を集め、愛山文集として東京民友社より發行したが讀むべき文章が多く收められてゐる。德富蘇峯氏は「君や學に常師なく、徹上徹下獨學自修せり。而して文章に於ては天才と云ふも蓋し溢言にあらず。其の文體や、漢文體なり、譯文體なり、口語體なり、如何なる文體も一度君の

筆を經れば自由自在なり。其の題目や小說なり、論文なり、時務策なり、史論なり、いかなる方面も其の意の向ふ所可ならざるなし。君や管を搦れば、萬人の敵なり。いはゆる明治二十餘年より、大正の初期に於ける、文壇の飛將軍を求めば、君や其の唯一人たらざるまでも、隨一人と云ふを憚らず。是れ故友の諛辭にあらず、嚴正なる批判者の言固に此の如し。しかも若し君の勝場を求めば史論に若くはなし。日本國民史は、蓋し君が畢生の心血を注ぎ、君が千載の紙碑たる可き好題目たりしなり。而して君や、之を大成するに至らずして逝けり。是れ君に取りて、終天極地の恨事たるのみならず、君の故舊同人にとりて亦實に然りと爲す。」云々と又「あまりに自ら愛惜せず、遂に多作、濫作の弊に陷れり。君や結構剪裁に用意を缺き、駛りて止らず、往いて還らず、部分に成功して全局に失敗するの處なしとせざりしなり。もし君にしてその精力を集注して畢生の事業をなさば、乃ち賴襄以後の第一人たる史家として千載不朽の名を天地の間に留めたらんも未だ知る可らざりしなり」云々。愛山文集に載せてあるものは氏の全述作ではなくて僅に其の幾百分の一にも過ぎない。長編の著作に至つては單に其の一二章を錄するに止め、貳百餘篇を載錄してゐるが、それだけを見ても、いかに氏が史眼あり、達筆家であるかといふことがわかるのである。英雄論、聖書論星巖集を讀む。近松の戲曲に現れたる元祿時代、文字は符徵なり、日歐人、ヴオルテールを論ず、余は何故に帝國主義の信者たるか。市川團十郎論カーライル論等題目は多種多樣である。

山下繁雄　ヤマシタシゲヲ（畫）

號は冬村。明治十六年東京に生れ、小山正太郎の不同舍に學び、文展第二回に「あやせ川」「夏木立」第九回と第十回に「軍雞」を出した。太平洋畫會等にも出品がある。
現住所　大阪市天王寺小宮町大正市場

山下新太郎　ヤマシタシンタロウ（畫）

明治十四年八月東京に生れ、東京美術學校に入つて三十七年四月西洋畫選科を卒業し、翌年巴里に留學し、初めラファエル・コランについたが、後コルモンに移り、更に美術學校に入り、二年間在學した。後西班牙に遊び、又伊太利に旅行し、一九〇八年サロンへ「窓際」を出品し、翌年又「讀書の後」「讀書」の二點を出し、四十三年六月歸朝した。其年、文展第四回に「讀書の後」外二點を出し第五回に「窓際」を出して共に三等賞を得第六回には「マンドリーヌ」を出し、大正三年、二科會の運動に參加して鑑査委員に選ばれ、其第一回展覽會に「カフエー・コンセール」を出し、第二回に「端手」第三回に「田舍にて」第四回に「橙」等を出した。大正十二年大震火災後、大阪毎日新聞社の開催した日本美術展覽會には共の選者となつた。
現住所　東京市芝區白金三光町二五五

故山田介堂　ヤマダカイドウ（畫）

名は已三郎、田能村直入に就いて南宗畫を學び、文展第五回に「萬竿煙雨」第六回に「白雲一帶」第七回に「積翠塔影」第八回に「清溪漁隱」を出して幾度も褒狀を得た。十三年九月病死。

生前の住所　京都市富小路御池南

故山田寒山　ヤマダカンザン（文）

名古屋の富豪の家に生れて篆刻詩書畫をよくし、特に墨竹に巧である。幼少の頃より不羈奔放頗る風流を好み、明治二年長崎に學び篆刻を小曾根乾堂に學び、達觀和尙に就いて曹洞禪を學び、頭を剃つて潤子と號し、のち紀州田邊最明寺の住職となつた。一二年の後還俗して大阪に出でゝ文人と交り、鐵筆を以て門戸を張らうとしたが意のごとくならぬので遂に賣卜者となつて漸く口を糊した。中井啓所、野口寧齋、尾崎紅葉、佐藤六石等の諸大家と交り漸くその名を知られた。後支那に遊んで蘇州寒山寺を訪うたところが寺塔頗る荒廢して見るも痛ましくなつてゐた。日本本願寺派の一僧が假りに之を守つてゐた。寒山は之を讓り受けて自ら住職となり、名詮自稱を喜んでゐた。同寺の銘鐘が亡せて見えなかつたので氏は日本に歸り寄附を募り、終に再鑄して銘文を伊藤博文に請うて自ら書した。氏は伊藤公への謝禮として金印三顆を刻して之を献じたが、それは「一片氷心」「春畝」「滄浪閣主」といふ文である。大正七年十二月二十六日年六十三で病歿した。

故山田鬼齋　ヤマダキサイ（彫）

幼名は常吉、家は代々佛師を業としてゐるが、氏は元治元年五月越前坂井港元新町に生れ、明治三年から父に隨つて佛像彫刻を學び、九年から圓山派の巨擘中島潤章に就いて畫を修業した。又十二年より十三年にかけて越前坂井郡吉崎兩本願寺別院に於て經堂其他の建築物に彫刻を試みて實地の研究をなし、十七年北陸地方を遊歷し、それより各地の神社佛閣に彫刻をなし、第三回內國勸業博覽會には「大塔宮護良親王馬乘等身像」を出した二十三年東京美術學校に奉職し、二十六年名を鬼齊と改め、二十八年「武者行列」を製作して大に名聲を博し、遂に政府買上の名譽を得、二十九年美術學校教授に任じ三十二年九月巴里博覽會に農夫及釋迦の木像を出品して合格となり、大に名聲を博し三十四年二月年僅に三十八で歿した。

山田邦子　ヤマダクニコ（歌）

明治二十三年五月三十一日德島市に生れ、直ちに上京して三歲まで麹町區富士見町の家に於て育てられ、後信州下諏訪に移つた。本姓名は今井邦枝と云ふのである。著書は「初姿見日記」と短歌及散文集を女子文壇社より出版し、次に歌集「光を慕ひつゝ」「片々」を出しまた少女少年の讀物として「白い鳥よ」「笛を吹く天人」等の著がある。

近來盛に童話に手をつけてゐる。

冬深みいたくさびたる丘の木をわれは見て居り病床より出でゝ

五月雨庭のさつきの赤き花きのふも今日も濡れて咲き居り

葭あををしげる河邊をゆきかへり生きむと思ひかへさざりしかたゞ一羽鳴いて通りし小鳥の口まねしつゝ吾子かへり來も

手にとりて弟の文字よみにけり此捕虜郵便十行に足らず

大正十三名五月の總選擧に於て夫君今井健彥氏は衆議院議員に當選した。

現住所　東京市外千駄ヶ谷八四九今井內

山田敬中　ヤマダケイチユウ（畫）

名は忠藏、本姓は島根、別に可得と號し、明治元年四月二日東京市淺草區吉野町に生れ、夙に川端玉章に師事して圓山派を研究し、殊に花鳥、山水、人物を能くし、爾來東京美術學校、石川縣立工業學校、同縣圖案所に歷任すること約十年、文部省

美術展覽會其の他諸種の畫會に出品して銀、銅牌褒賞狀等を受けたること枚擧に遑が無い、又御用品となること十數回、御前揮毫を勤むること數回に及ぶ、帝國繪畫協會、日本美術協會の會員で巽畫會の評議員、美術研精會の顧問である。文展には「華の蜜」「桃の園三傑」「孤村の夕」「朝霧」「唐美人」「白馬銀鞍」「池畔」「山路六趣」等を出して泉も好評あつた。現に川端畫學校に教鞭をとつてゐる。大正十二年帝國美術院展覽會審査員の候補者に擬せられてあつた。

現住所 東京府下田端町四七

山田三子 ヤマダサンシ（俳）

名は麒太郎、明治七年六月若狹國小濱西津村に生れ、中學高等學校を經て東京帝國大學國文科に入つたが故あつて半途退學した。爾來中學教師となり、文部省の官吏を勤め、書籍雜誌の編輯に從事し今は中學校教諭となつてゐる。氏は小中學生時代既に月並俳句に指を染め、二十八九年頃より日本派の新俳句に傾倒し、東京に遊學中同窓の柘植潮音、田口孤雁、沼波瓊音等と翠風會を創設して一高俳句會の前身をなした。數藤五城、大谷繞石松根東洋城、中山稻青、永井荷風、井上唖々、松下紫人、原抱琴等と相交り、三十一年頃より根岸會又はホトヽギス主催の會に出席して、日本派の俳人として句作した。氏の句は「日本新聞」「ホトヽギス」「俳星」「蟲籠」「車百合」「新綠」「ましろ」「花月」「俳諧雜誌」等に投稿し、「春夏秋冬」其の他の選集に掲載されてゐるし、著書には「蕪村俳句全集」其他がある。

現住所 長岡市中千手町二一八

山田新川 ヤマダシンセン（詩）

名は長宜、字は子昭、通稱は東平、新川は其の號別に太刀山人と號す。越中の人、初醫を志し後詩を以て立ち、明治十四年頃東京に於て正葩吟社を興し、當時の詩調が浮辭綺語に流れてゐるを慨して、頗る蘊藉雅馴の詩を唱へた。其の作凡て近體で專ら力を七絕に用ゐた。太刀山房絕句鈔二冊世に出て居る。人となり淡泊風流で書道に於ても大に熟達してゐた。明治三十八年十一月病歿した。年七十九。

本門寺

絕代高僧名是蓮、　一篇國論忤二當權一、
自二從龍口脫一奇厄一、　法統連綿六百年、
原途上

報レ讐餘勇斫二轅門一、　就レ虜五郎猶大言、
一片嶽雲吹二暮雨一、　不レ知何處古鴿原、

讀西行上人十二首錄一

雲水悠々五十年、　和歌悟我大乘禪、
春風二月櫻花下、　畢竟東山好墓田、

故山田淳子 ヤマダジユンコ（國）

播州の人、近藤揚純翁の長女、大阪の國學者である。三足庵、梅香社、花廼家と號す。文政八年二月十八日生れた。年二十七醫師山田修敬氏に嫁し夫病歿後歸鄉し村童を集めて讀書習字を教へ明治六年以來數年間教職についた。八年病を京阪の地に養ひ偶ま高松保實卿國風社を京都に起し、諸國に支部を設けられるに當り兵庫支部會長を命ぜられた。十八年十一月大阪女學校に聘せられたが病氣がまだ癒えないので幾もなく之を辭し、北濱二丁目に私塾を開いて歌道を教授すること數年、二十八年十二月契沖阿闍梨の古跡圓珠庵境內に草庵を結び三足庵と稱し國風の教授を長くやつた。其著に「よしのゝつと日記」「あづまのつと日記」「新撰唱歌集」「幼時教訓唱歌」「花がたみ」「花のいさを」「契沖阿闍梨二百年忌梨獻詠歌集」「芳雲餘香集」「梅香社月俳集」等の外數十部ある。

百鳥のさへづる花のいろもかものどかにかすむ
み吉野の山

もろ人の言の葉そへて手向山紅葉の錦たてまつる見ゆ

生前住所 大阪市東區東平野町字東高津五九

故山田美妙齋 ヤマダビミヨウサイ（小）

幼名は武太郎、通稱は武夫と言ひ、南部藩士吉雄の息で、父は各縣の警部長となつたことのある人である。氏は明治元年に生れて初め三田英學塾に入つて學び、後大學豫備門に入つたが、教師と合はないため爭議を起し、二十一歳の時退學した。當時既に自由の學風を夢みてゐた美妙齋は美目秀麗長髪長靴樹陰に詩集を繙く一個の貴公子であつた。語學の殊に堪能であつたことは同級生であつた正岡子規の隨筆にも出てゐるから間違なからう氏はこの年尾崎紅葉、石橋思案と共に「硯友社」を起し、自ら言文一致の文體を創始し、盛に小説を書いて同社の雜誌「我樂多文庫」に掲載した。併しこの誌二三號發行の後、氏は社友に無斷で他の雜誌「都の花」に小説を掲載したといふので、紅葉思案等の怒りにふれて遂に絶交するに至つた後「國民の友」に「胡蝶」を出して文名一時に揚つた。爾來「新太平記」「猿面冠者」「教師三昧」「可憐狂」「やたら縞」等を出した。三十八九年頃大辭書の著作を思ひ立ち、晝夜勵精未だ完成せぬうちに頭部に癌腫を生じ、醫師の勸に從つて暫つて退學の時再入しないと揚言した大學校の門を過ぎらざるを得なかつた。意志の強い氏は心に甚だ之を恥ぢて、これは死刑の宣告を受けたよりもつらいと嘆息したさうである。四十三年十月二十四日遂に四十三で病死した。氏は實に才氣縱橫、比律賓の志士アギナルドを庇陰し、又は色ラムネを發明して販賣などしたが、大に失敗して家資蕩盡赤貧全く洗うがやうになつた。それに氏は嘗つて女流作家稻舟女史を娶つたが、間もなく稻舟女史は自殺したので、美妙齋は之がために大變惡評を招いだ。しかし女史の死は全く精神病のためであつたらしい。氏は晩年甚だ振はなかつたが、氏の計劃は何れもよい頭、進んだ頭から出てゐるものゝみであつたことが今になつて感ぜられる。口語詩もよい、言文一致體の創始もよい、字書の編輯法もよい。要するに氏は世間より半世紀又は一世紀ほどお先に行つて居たゝめに不幸であつたのではあるまいかとさへ思はれる。

つぼすみれ

いそで摘みたるつぼすみれ、
こぞ見よがしの衣紋どめ。
いろがくろむとしほかぜに、
たゞならたれが吹かれうぞ。
海士になるとも君がため
いとひはせねどしかすがに
くろまばさぞや笑はれん、
それが苦勞としら雲の
よそなるいろもうらやまし、
なみもしづかに水入らぬ
をぶねにふたりおゝられし、
いやな！ゑくぼを出せよとて
頬つくゆびのにくらしや、
出すもはづかし、出さぬもいや、
さても辛氣の世の中や。
海はやよひの潮干時、
むらさき色のとほあさに、
みづぎはだちしうきねどり
かろくゆられて五つ六つ、

むつむふたりがこひ中を
まねてか小綠吸ふなみも、
しほらしや、ふねと痴話げんくわ。
（後略）

山田わか　ヤマダワカ（評）

山田嘉吉氏夫人、明治十二年十二月神奈川縣三浦郡久里濱に生れ、同地の尋常小學校を卒業したる外に取立てゝ記すほどの學歴は無い。現に社會問題婦人問題等について筆を執つてゐる。「戀愛の社會的意義」「女・人・母」「愛と生活と」「社會に額づく女」「若き愛と智の眼覺」「賣笑婦の研究」「八時間勞働の理論と實際」等多くの著書を出してゐる。

現住所　東京市四谷區南伊賀町四一

山中古洞　ヤマナカコドウ（畫）

本姓は佐藤。山中家に養はれて其の姓を名乘つた名は升。明治二年七月十日東京麹町區永田町に生

れ、月岡芳年、熊谷直彦、在原古玩、石原白道等に就いて住住派を研究し、二十八年第四回內國勸業博覽會に褒狀を得、三十四年大野酔方、鏑木清方等と烏谷會を起した。現に小說、雜誌の口繪を描いて大いに世に知られてゐる。人物は最も得意とするところである。

現住所 東京市芝區二本榎二丁目二八

故山名貫義 ヤマナカンギ（畫）

江戸の人。通稱は大助、名は廣政、後行雅と改めた。氏は住吉派の妙手弘貫の門から出て明治十年內國勸業博覽會事務局雇となつて以來、三十四年巴里印覽會に至る間に事務員又は審査官を勤め、又東京美術學校教授、古社寺保存會委員、帝室技藝員等に任じ、土佐派を復興して狂瀾を既倒に回し、畫壇に貢献頗る多かつたが、三十五年六月年六十七で病歿した。米國シカゴ博覽會に出品した金地屏風ほその大作として名高く、其子に山名義海がある。門下に津端道彦、大坪正義等の名手がある。

山名義海 ヤマナギカイ（畫）

名は繁太郎。慶應元年八月江戸に生れた。初め住吉廣賢につき、後父山名貫義に學び、帝室博物館技手鑑査掛、美術部繪畫主任等になつた。大和畫及び繪畫の鑑定に長じ博覽會展覽會等にて受賞した事も多い。父貫義は住吉派の大家であり、津端道彦等は其の門に出たのである。

現住所 東京市小石川區水道端町一丁目七一

山村耕花 ヤマムラコウカ（畫）

名は豊成、明治十九年一月東京府下に生れ、繪畫に志して初め尾形月耕について學び、後東京美術學校日本畫選科に入つて四十年に卒業した。文展へは第一回に「茶昆」第四回に「大宮人」第七回に「お國と山左衛門」第八回に「お杉お玉」第九回に「春」を出して其の技を認められ、院展へは第三回に「業火と寂光の都」を出して實力の非凡を示し遂に推されてその同人に列し、第四回に「駱駝」「八朔」を出し大正十二年大震災後の院展には「洛陽橋」「楊柳の圖」を出品して特異の才筆を示した。石井柏亭氏と共作の「現代婦人百態」の版畫を公にしてゐるし、大震後脚本家川村花菱氏と共に淺井了意の「むさしあぶみ」に倣つて「大震災印象記大正むさしあぶみ」を著した。

現住所 東京府下北品川本宿一二

山村暮鳥 ヤマムラボチョウ（詩）

氏は舊姓木暮、本名は土田八九十と言ひ、明治十七年一月群馬縣群馬郡堤ケ岡に生れ、東京聖三神學校を卒業して作詩翻譯小說童話童謠の創作等に從事してゐる。著作に詩集「三人の處女」「聖三稜玻璃」「風は草木にささやいた」「梢の巢にて」「穀粒」隨筆集「小さな穀倉より」翻譯「ドストエフスキイ書簡集」童話童謠「チルチル・ミチル」「萬物の世界」「鐵の靴」「葦舟の兒」「少年行」小說「十字架」「影」「春」等がある。

星

わたしは天をながめてゐた　なつのよるの
海のやうな天を……

陰影の濃い　日中のひどいあつさはどこへやら
よるの涼しさにひたつてゐるとまるで青い魚のやうだ
かきねのそとではひよろりと高い蜀黍が四五本
水のやうなそよかぜに廣葉をばさばさせてゐる
さかりのついてゐる豚が小屋からぬけでてぶうぶうろつきまはつてゐる　きまぐれる蟋蟀が一ぴき鳴いてゐる
もう秋がすぐそこまできてゐた

こどもをねかしつけてゐた妻が
こどもがねついたので聲音を盜むやうにそこへ

出てきて
すつかり晴れましたねわたしはだまつてゐた
なんて綺麗なんでせうねいつみてもお星樣は
わたしはそれでもだまつてゐたわたしはそれを
うるさいとさへおもつた　すつきりと澄透つた
心を　掻きみだされたくなかつたわたしは天を
ながめてゐた
妻は心配さうに低くわたしの顏をのぞきこんで
云つた
どうかなすつてその聲はしめつてゐた
すこしふるへてゐるやうだつたけれどもしんみ
りと美しかつた
わたしははつとしたそして跳返されたやうに口
を切つた
まあ見な永遠の寂しさだ
たゞそれだけそれぎりわたしは何にもいはず
妻もまたなんにもいはずあたりはしいんと
天では星がきらきらしてゐたふたりはそれをな
がめてゐた
（後略）

現住所　茨城縣磯濱明神町鬼坊裏別莊

山本鼎　ヤマモトカナエ（畫）

明治十五年九月愛知縣岡崎市に生れ、東京美術學校に入つて三十九年西洋畫の選科を卒業し、後數年間佛國に留學して、各地に遊び露國を經て大正六年歸朝し、美術院同人となつた。作品は第二回院展に「サーニヤ」「廢れたるダアチヤ」「自畫像」等十七點を出陳して畫壇の注目を惹いた。曾つて美術雜誌「方寸」の編輯に從つたこともあり文筆にも長じてゐる。大正七年六月戸張孤雁等と日本版畫協會を起し、又自由畫、自由教育を主張して教育界に一服の清涼劑を與へた。また信州大屋に有名な農民美術の研究所を創設した。「春陽會」幹部。著書に「油繪の描き方」「自由教育論」等がある。大正十三年四月春陽會に出品の「くぬぎ山」は好評を博して人の注意を惹いた。又臺灣に出張して彼地の土民藝術を研究するところがあり更に日本美術の總聯盟展覽會の議を主張したが、

共鳴者が少く無い。
現住所　東京市外大森新井宿熊野神社前通り

山本竟山　ヤマモトキヨウザン（書）

名は由定、有名なる京都の書家であつて、詩人長尾雨山、磯野秋渚諸氏と共に關西の雄を以て稱せられてゐる。六朝を唐風の堅實なのに合せたやうな行き方でその楷書にも大層面白味があるが、氏の最も得意とするところは篆書である。大正十年月岡柄霞、日下部鳴鶴、井上清堂等と支那に遊んで大に進境と變化とを示した。京都には多くの門人あつて其の傘下に集つてゐるが、大阪の門人より成る浪華臨池會もなか〳〵盛大である。

山元春擧　ヤマモトシユンキヨ（畫）

名は金右衞門。明治四年一月近江國大津に生れ、少時森寬齋の門に學び、明治三十二年、海外に遊んで泰西の藝術に接した。京都繪畫專門學校、及び京都美術工藝學校教授に任じ文展では第一回以來日本畫部審査員である。文展では第一回に「海月」第二回に「雪松圖」第三回に「鹽原の奥」第四回に「寂寥」第六回に「嵐峽」第七回に「春夏秋冬」第十回に「山二題」を出した。大正六年六月帝室技藝員に任命され、又夙に家塾を開いて後進を指導し、川村曼舟、小村大雲、林文塘、山下竹齋、玉合春輝、西井敬岳、窠本一洋、庄田鶴友栗林太然、高山春陵、長嶺折堂、岡文濤、高瀨春曉、浦島春濤、川畑春翠、中野春播、柴田晩葉、山元春汀等の名作家を門下より出した。大正八年帝國美術院會員となり、十二年大震火災後大阪毎日新聞社の主催にかゝる日本美術展覽會に於て審査員を囑托された。畫家山本春汀は氏の實子である。春擧氏は大正十三年六月家塾早苗會の第二十五回展覽會を開いたが社中の新進にも見るべきものが少くない。
現住所　京都市高倉丸太町下る

山本昇雲　ヤマモトシヨウウン（畫）

名は茂三郎、昇雲はその號、別に松溪の號がある明治三年十一月高知市本町に生れ、狩野洞素、河田曙山について土佐派を學び、後上京して米山朴庵、佐藤紫烟等と共に南宗畫の大家瀧和亭に就いで學んだ。花鳥山水、人物何れも巧である。三十六年日本美術協會に出品して銅賞を得、後その會員となり、文展へは第六回に「花」第八回に「屠蘇」第九回に「享保の頃」第十回に「春雨時雨」を出した。宮內省御用となること前後十數回。實に現代南宗畫の名家と仰がれてゐる。餘技として圍碁を好む。

現住所 東京市麻布區森元町一ノ二七

山本梅莊 ヤマモトバイソウ（畫）

名は倉藏。字は子野。弘化三年八月十五日尾張國半田町に生れ、滄洲堂公平氏の養嗣子となり、初め半村と號し後梅莊と改めた。年十八貫名海屋の門人三谷雪崦に就て南宗を修め、明治初年劉冷窓に從つて漢學詩文を修め兼ねて古學を研究し後私塾を開いて生徒に教授し後畫名漸く顯れた。山水花鳥を能くし、諸所の展覽會に出品して受賞多く文展へは第一回に「秋景山水」を出して三等賞を得、第六回より第十回まで日本畫部審査員となり第六回に「夏景山水」第八回に「水墨松林」を出した。養父中風症を思ふとき氏孝養を盡し、常に畫を作つてこれを慰めた。明治九年其筋に於て奇特なる行に對して金若干を賜つて大いに賞せられた。養父歿後年々名山大川を拔涉して眞山眞水數百の寫生をして一々詩文を附して「鴻雪圖錄」と名づけた。石莊。香雲の二子皆畫に巧である。

現住所 愛知縣半田郡下半田

故山本芳翠 ヤマモトホウスイ（畫）

嘉永三年岐阜縣明智町に生れ、明治元年京都に出て南畫の大家久保雪江に就いて學び、後橫濱に移り、初代五姓田芳柳に洋畫を學び又工部美術學校に入つた。十年第一回內國勸業博覽會に「勾當內侍」を出して受賞、十一年渡佛、巴里美術學校に入り、ジェロームに就いた。二十年に歸朝し、芝櫻田本鄕町に生巧館畫塾を開き、二十七年日淸役に從軍した時の寫生畫二十枚を宮內省に獻じ、又三十七八年役に從軍して寫生畫御用品となる。又劇の背景改良に意を注いで貢獻する處多かつたが三十九年十一月十五日年五十七で病歿した。門下に藤島武二、白瀧幾之助、湯淺一郎、北蓮藏等の妙手がある。

山本森之助 ヤマモトモリノスケ（畫）

明治十年四月長橋新橋町に生れ、初め大阪に出て山內愚僊の門に入り、後、東京に移り、淺井忠、山本芳翠等に學び、東京美術學校に入學し三十二年西洋畫選科を卒業した。三十四年沖繩縣に遊び、三十七年白馬會展覽會へ「暮れ行く島」を出し四十年東京勸業博覽會へ「初夏」を出して一等賞を得た。文展へは第一回に「森の奥」第二回に「曲浦」を出して何れも三等賞を得、第三回出品「濁らぬ水」は二等賞を得、第四回より第七回まで洋畫部審査員に擧げられた。四十五年中澤弘光三宅克己等六人と光風會を起して每年開會し、最近の第十一回文展には「信濃の山」「滿洲の一部」同十三年「セーヌ川の曳舟」「フランスの田舍」を出して好評を博し、同年遂に帝展審査員となつた。

現住所 東京府下戶塚村字諏訪一八

山本有三 ヤマモトユウゾウ（劇）

本名は勇造、明治二十年九月栃木縣栃木町に生れその地の小學校を卒業後小僧にやられたが、後正則英語學校を經て大正四年東京帝國大學文科大學の獨逸文科を卒業し劇作に從つてゐる。脚本集「生命の冠」「欲生」「坂崎出羽守」「山本有三戲曲集」等の著がある。「生命の冠」「女親」「坂崎出羽守」等は何れも東都の劇壇に於て歡迎されたものである。尙ほ早稻田大學講師として得意の劇談を續けてゐる。

現住所 東京市本鄕區駒込神明町三二一

山脇信徳　ヤマワキシントク（畫）

明治十九年二月高知縣高知市に生れ、東京美術學校に入つて四十三年西洋畫科を卒業した。文展へは第一回に「町の橋」第三回に「停車場の朝」第八回に「午後の海」は宮內省御用となつた。尙ほ又四十三年琅玕洞で個人展覽會を開き、四十四年には白樺社主催の展覽會に多數のヂツサンを展覽して。院展へは第四回に「湖畔の冬」を出して樗牛賞を得た。明治四十四年、滋賀縣膳所中學に赴任し、大正六年まで其任にあつた。

現住所　東京市本鄉區駒込林町鳳林館方

ユ　ノ　部

湯淺一郎　ユアサイチロウ（畫）

明治元年十二月群馬縣安中に生れ、山本芳翠、黑田清輝、東京美術學校に入り、三十一年西洋畫の

選科を卒業し、三十九年渡歐し、かの地の畫壇諸大家に接して研究を遂げ四十二年歸朝した。文展へは第二回に「イスパニヤ國風景」第五回に「午睡」を出し、大正三年、二科會創設の時、その鑑査員に選ばれ、爾來其の會員として出品を續けてゐる。

現住所　東京市赤阪區榎坂町五

湯淺眞生　ユアサシンセイ（小）

名は勝義、明治二十八年二月二日福岡縣筑紫郡岩戸村山田に生れ、早稻田大學に入り大正七年英文科を卒業し、朝日新聞社を經て中央新聞記者となり今日に至つた。短篇小說及び評論等の作がある

現住所　東京市本鄉區富士前町四五

故結城正明　ユウキセイメイ（畫）

氏は本姓壺川、後今の姓に更めた人であつて、天保五年一月越中國富山に生れ、十九歲の時江戸に出て木挽町狩野の畫塾に入り、勝川院狩野雅信に學び、後の名家狩野芳崖、橋本雅邦等と同門であつた。維新後靑野桑州に就いて銅版鏤刻を學び明辰社を營んだが、芳崖の東京美術學校を起した時狩野友信と共に助敎授となり、明治二十五年岡倉覺三と衝突して辭職した。二十八年より不幸にも中風症に罹り畫筆を捨て、三十七年三月六日逝いた。年七十一。「前田犬千代奮戰の圖」はその代表作である。日本畫家小林源太郎は氏の甥であり、菱田春草、廣瀨長江等は一時氏に就いて學んださうである。

結城素明　ユウキソメイ（畫）

名は貞松。明治八年十二月東京本所の森田家に生れ、初め圓山派の川端玉章門下となり、二十五年東京美術學校日本畫科に入學し、三十年卒業し、更に洋畫科に移り、三十三年まで在學した。三十二年同志福井江亭、島崎柳塢、平福百穗、大森敬堂、渡邊香汀等と光聲會を起し、四十年東京勸業博覽會に「蝦蟇仙人」を出し賞を受けて名聲を博し、大正五年鏑木淸方、吉川靈華、平福百穗、松岡映丘、田口掬汀等と金鈴社を起した。文展へは第一回に「無花果」第五回に「轉」第六回に「甲ふたる馬」「樹下小集」第七回に「相思樹下把金糸圖」第八回に「箇是劉家黑牡丹」等の諸作を出して褒狀三等賞二等賞等を得、第十回に「歌神」第十一回に「八千草」を出品するに及んで共に名譽の特選となり、大に好評があつた。現に東京美術學校の敎授であり、又川端畫學校に於て日本畫を敎授する。大正七年遂に文展推薦となり、大正八年帝展審査員十四年會員となつた。

現住所　東京市本鄉區西片町一〇ヘノ四

故結城蓄堂　ユウキチクドウ（詩）

名は琢、但馬國城崎の人、父は大和屋勘右衞門といふ經師屋であつて山陽流の書に堪能であつた。蓄堂夙に詩畫に志あつて研學すること多年、遂に一家をなすに至つた。性旅行を好んで至る所名筆を揮つてゐる。氏の抱負を詩にしたものに

姓是結城名是琢、　十年身世托二斯文一
相如消渴金莖露、　太白辭乘御艇雲、
鄙諺不レ能盟二六國一、　丹心固足レ叱二三軍一、
生平一語休忘家、　佳但州湯島邨、

といふのがあるし、大隈侯を狙つた來島恒喜の二十周年追悼會には次の詩を靈前に供へた。

讜議當年亂似レ麻、　誰將二一死一報二邦家一、
秋風二十餘年夢、　淚墜碑前霜菊花、

寒翠莊雅集、用二皮陸唱和夏景冲澹韻一

新樹悟々竪二碧紗一、　亭豪瀟灑畫簾斜、
庭前風脩思二蘇老一、　雨後雲山是米家、
魚躍二清池一漾二蘋藻一、　蝸行幽砌蝕二苔花一、
詩成且向南薰憩、　一榻茶烟兩鬢華、」
懸崖飛瀑洞嚴幽、　八尺凉簟捲二畫樓一、
柱笏何山宜二獨在一、　涉レ園與レ鳥共群游、
逍遙聊擬謝康樂、　禪悅應輸湯惠休、
別有二醉鄉容一傲骨一、　功名漫托管城侯。」

三浦

三浦風煙天下稀、　松青沙白接二陵帽一、

波翻二島嶼一潮痕漲、　日映二樓臺一屋氣凝、
寶藏山深龍獻レ玉、　常光寺古佛懸レ燈、
千秋形勝依然好、　猶有二漁人說一廢興一、

尙氏は明治四十年前後、太陽によつて諷裳と題し時事を諷詠したものを數多く發表して、角田竹冷の時事吟と双璧をなしたものである。大正十三年十月七日淺間溫泉富士の湯に滯在中病死した。

湯川松堂　ユガワシヨウドウ（畫）

名名は愛之助。明治元年六月紀伊國印南町に生れ圓山派の畫伯鈴木松年に學び、三十四年小松宮殿下より三島御別邸全部の裝飾御用の仰を蒙り、三十九年大阪四天王寺大鐘樓に八間四面の大龍を描き、四十四年宮內省の命によつて「岩倉公事蹟繪卷」を描いた。氏はこれまで作品を公開の展覽會に出したことがないのは他人と異るところである三十五年小松宮殿下より樂壽の畫號と御染筆を賜つたので別號としてゐる。

現住所　大阪市南區天王寺上の宮町

行山採茶庵　ユクヤマサイダアン（俳）

名は辰四郎、明治元年七月二十九日石川縣金澤市に生れ、明治二十六年元第一高等中學醫學部を卒業し、醫を本業とする傍俳諧に遊んでゐる。庵號は芭蕉翁と哲の一人鯉屋杉風よりの傳統で氏はその十世を繼いでゐる。氏は十年俳諧と漢詩の門に入つたが漢詩はいかにしても支那人に及ばぬといふので俳諧に三昧してゐる。「九世石丈全集」「龍骨庵樂書」「快夢五十年」等の著書を出し、間宮猩谷女、辻本鷺琴女、山口東山、中島春郊外數人の門下を有し歌仙の普及を努めてゐる。氏の句に

元日やこれ人間の作り事
長命は花有る故の願ひかな
夕立や傘を返した歸り道
偽りは人間にあり今日の月
子に甘き親はまちけりつるし柿
喰はすべき夢とてもなし獏枕
明日といふ新らしき日あり大三十日

等あるが何れも今の新派とは相容れぬものであるけれども、この派の人にとつては喜ばれてゐる。

現住所　東京市下谷區谷中初音町二ノ一九

柚木久太　ユノキキユウタ（畫）

明治十八年十月、岡山縣玉島町南畫家柚木玉邨の子として生れ、初め太平洋畫會研究所に遊び、後佛國に留學してアカデミイ・ジユリアンに學んだ。文展へは第五回に「輌津の朝」第九回に「トンドの橋」「入江」を出して「入江」は三等賞となり、第十回及其後に「護書の圖」「麥秋」を出して特選となつた太平洋畫會會員で頗る熱心であるのとその道の天才もあるので將來を嘱望されてゐる。大正十三年九月太平洋畫會展覽會の用務を帶びて渡滿した。

現住所　京京府下田端六〇九

ヨノ部

故楊洲周延　ヨウシユウチカノブ（畫）

本名は橋本直義、越後高田に生れ、幼時より畫を好んで狩野派を學び、維新の際上野彰義隊に入り函館沒落の時捕へられて高田藩に引渡された。明治八年、上京して浮世繪に移り、國芳、國貞、國周に學んだ。錦繪の美人畫をよくし、改進新聞の挿畫家として名をなした。大正元年九月年七十五年で病歿した。繪は上野圖書館にも多く藏されてゐる。

横井時敬 ヨコイジケイ（書）

熊本藩士、横井久右衛門の三男で萬延元年正月七日肥後國熊本坪井に生れた。舊名豊彦、後今の名に改めた。明治四年九月熊本洋學校に入り英學を專修し八年之を卒業した。十一年東京駒場農學校本科に入學し十三年農學科甲等卒業後更に農業化學科を專攻した。十八年福岡縣農學校二等教諭となり、在職四年餘にして農商務省技師試補に任じ爾來農學科高等師範學校農學科等の授業を托せられた。二十七年農科大學教授に任じ正七位に叙し三十年從六位に進んだ。三十二年三月農學博士の學位を受領した。この年五月農業教育研究の爲滿一ケ年間獨逸國留學を命ぜられた。著書に「栽培汎論」「農業汎論」「農業讀本」其他數種ある。氏は餘暇をもつて詩書に親しみ造詣が深い。入木道に於ては草書を最も得意とし現代稀に見る能書家である。農學者なるが故に知らぬ人が多いが一度氏の連綿自在の草書に接すれば人をして懷素米芾の再生かとも思はしめるほどである。

現住所 東京府豊多摩郡千駄ヶ谷村一七八

横井時冬 ヨコイトキフユ（國）

尾張名古屋藩士横井猪右衛門の三男、安政六年十二月十四日生れた。柳城、鞆江、年魚市人等の數號ある。屋號を尾花鸚鵡軒、野菊亭といふ。氏幼時藩校明倫堂に入つて和漢並に數學を修め、後小塚直持、岡田顯等に國學を、佐藤楚材、角田春策等に漢學を學び、又歌を間島冬道に、詩を大沼枕山に學んだ。中年東京に出て小中村清矩、栗田寛、本居豊穎等につき國文國史を研究した。又早稲田東京專門學校に入り法律學並に英學を兼修し、後遂に擧げられて高等商業學校助教授となり尋いで教授に進んだ。著書に「大日本不動產法沿革史」「園藝考」「工藝鏡」「日本工業史」「日本商業史」「扶桑能書傳」等數種ある。其他「好古會雜誌」「大八州學會雜誌」「史學會雜誌」「皇典講究所講演」「國學院雜誌」「日本商業史要」等に盛に寄稿した。咏歌は文章と共に氏の最も好み且つ巧とするところである。

現住所 東京牛込區東五軒町一一

横井弘三 ヨコイコウゾウ（畫）

明治二十三年東京に生れ、早稲田大學商科に入つて學んだが、中途に於て目的を變更し退學の上洋畫を獨習し、二科會第二回に「霽れゆく園」を出して楊牛賞を得、第三回に「樂しき花畑」「砂糖搾り」第四回に「田園の夕」「愛する椎の庭」を出して何れも名聲を上げた。氏はまた大正十二年大震災後大阪に於て開催の日本美術展覽會へ出品した　は審査員安井曾太郎有島生馬諸氏の推薦によつて、銀牌並に賞金壹千圓を贈與された尙氏は二科會の會友であつて、同展覽會では殆んど毎回入選してゐるが、この日本美術展覽會で得た賞金を有意義に費すといふ考を以て東京市の全小學校に數十枚の油繪を描いて寄贈することにしたのは奇特のことであつた。

現住所 大阪府豊能郡庄内村牛立二八

横關愛造 ヨコゼキアイゾウ（記）

明治二十二年八月長野縣小縣郡中鹽田村に生れ、早稲田大學に入つて、大正二年政治經濟科を卒業した。嘗つて東京毎夕新聞に入つて記者となり、大正八年「改造」を編輯し、同十一年「女性改造」を創刊するに努力したる外、同社出版部係として現在に至つた。

現住所 東京府下中目黒七七〇

横瀬夜雨 ヨコセヤウ（詩）

名は虎壽、明治十一年一月茨城縣眞壁郡大寶村に生れ、尋常小學校の外學歴はないが天才的の詩人である。有名な病癒で獨りで歩を移すことも困難だといふ。氏の歌集に「死のよろこび」などのあるのは如何に現世を悲しみ且つ呪つてゐるかゞわかる。誠に同情すべき薄倖詩人である。「花守」「花守日記」「二十八宿」「夜雨集」等の著がある。前記「二十八宿」は四十年の作で彼が三度脚が立たなくなつた時の記念ださうな。大體平明な詩風で文庫派の一人である。

栗の花　（處女作）

寂しさは十人の戀を得つれども紛れぬものか涙の流る

行くべき道ゆきつくしけり戀を戀ひて生きし命も今日となりつゝ

あめつちにやりどころなきむくろをばあいぬの國にかくさんと行く

おほかたの人はそむきぬつかむべき毛の一すぢもわれはもたらず。

これらの諸作は氏の實感を抒したもので涙無くては讀めぬ。

旅にして

山秀でたる東路の
平の水を集め來て
南に落つる利根川の
浪は靜かに翩るかな

行くとも分かぬ白雲の
かゝりて長き眞砂地や
蘆邊に立ちて眺むれば
浪逆の浦は雨晴れて

日光遍き湖の上を
遙に渡る尾長鳥
眞白き羽は動かさで
鳴音は風に紛るれど

鏡に映ふ花ならば

異なる影にも慰まん
思へば旅の果にして
新に戀ふる人も無きを

蝦捕舟の漕ぎ昵む
八十の水はへだつれど
霧に浮べる筑波根の
眉なす嶺は北にあり

現住所　茨城縣眞壁郡大寶村

横山健堂　ヨコヤマケンドウ（評）

名は達三、明治五年十二月山口縣萩町に生れ、東京帝國大學に入つて國史科を卒業した。別號黑頭巾の方が廣く知られてゐる。氏の文はもと漢文より來てゐて、強い何となく急所を突くやうな文體でキビ〳〵した氣持のする書きぶりである。「近世教育史」「新人國記」「高杉晉作」「快心錄」「大西郷」「大將乃木」等の著は何れも多くの讀者をもつてゐる。大阪毎日新聞並に東京日々新聞の客員である。

現住所　東京市本鄉區駒込神明町三四一

横山蜃樓　ヨコヤマシンロウ（俳）

名は新藏、明治十八年一月十九日明石樽屋町に生れ、高等小學校卒業の外これといふ學歴は無く、實兄と共に父祖の業なる染物に從事中、三十一年頃より兄杣人の句作をしたり「ホト・ギス」を讀んでゐるのを見、其の感化を受けて今日に至つた大正三年七月原田合浦、南部琴林と共に俳諧雜誌「アユビ」を創刊した。氏の句は嘗て「ホト、ギス」「新聲」「寶船」大阪朝日等に投稿したが、今は「倦鳥」「アユビ」等に主として發表してゐる。そして「朝日句抄」「漁火」等に其の句が蒐錄されてゐる。

京を出てうしろになりぬ眠る山
高砂の町に日晴れて小六月
古き箕に花の種干す小春かな

現住所　兵庫縣明石町樽屋町

横山大觀　ヨコヤマタイカン（畫）

名は秀麿、明治元年八月水戸市下市三ノ町に生れた。少時東京英語學校に入り、後東京美術學校日本畫科に入り、二十七年、第一回卒業生として校門を出で卒業後京都美術學校教諭となつた。また博物館の囑を受けて菱田春草と共に京都及び紀州に國寶の模本を作り、三十六年印度に渡り、三十七年歐米に遊び、四十三年清國を歷遊した。又早くより天心岡倉覺三に親炙して其啓發を請け、美術學校教授となつたが三十一年天心と共に辭して日本美術院を創立し、大正三年、下村觀山等と共に之を復興した。文展には第一回より第七回まで日本審査委員に任じ、作品は第一回に「二百十日」「曙色」第三回に「流燈」第四回に「楚の春」第五回に「山路」第六回に「瀟湘八景」第七回に「松並木」を出した。又院展には第一回「游刃有餘地」第二回に「竹雨」第三回は「作右衞門の家」第四回に「雲來去」「秋色」等を出した。氏は明治に於ける新日本畫の樹立に貢獻せるもの多く、天心の歿後美術院派の巨頭として之を率ゐ、後進の誘掖に努めたことも少なくない。日本美術院評議員。大正八年帝室技藝員となり、大正十二年大地震後、東京京都に於いて開催された日本美術展覽會の審査員となり、又同年秋大阪に開催の日本美術院展覽會には長さ二十三間の大作「生々流轉」を描いて益々技の圓熟を示して斯界の驚異となつた。大正十三年六月詩聖タゴールの再來邦の時、第一に大觀に逢ひたいと言つたのを見ても、氏の人となりが如何に趣致に富んでゐるかゞわかる。十三年の春一時重態を傳へられたが、詩聖を歡迎する頃は全快して靈筆を振ふに至つた。

現住所　東京市下谷區池之端

與謝野晶子　ヨサノアキコ（歌）

本姓は鳳氏、明治十一年十二月七日堺市甲斐町の有名な菓子舖駿河屋の令女として生れ、堺市立女學校を卒業して、新派歌壇の急先鋒與謝野鐵幹氏の夫人となつた。女史は十二歳の頃より國文國史の類を耽讀し、十五六歳の頃はじめて短歌に志し大阪より發行した「よしあし草」に投稿したが詩人河井醉茗氏はこんな歌は作るのをよして雜巾でも縫つた方がよいではないかと言つたさうであるしかも一度新詩社に入り鐵幹氏の指導をうけるや歌才一時に迸涌して世は女史を目して鬼才とし天才と稱した。その最初の集「みだれ髪」は熱烈奔放、大膽の戀愛を歌うて道學者の非議を招いたが明治歌壇に新時代を劃し、新派の和歌に動かぬ基礎を据ゑたのは實にこの集であつた。後鐵幹氏に嫁して共に新詩社を經營し引き續いて「小扇」「戀ごろも」「舞姫」「夢の華」「佐保姫」「青海波」「常夏」「春泥集」「夏より秋へ」「さくら草」「與謝野晶子集」「旅の歌」「太陽と薔薇」等を出し歌壇の第一人者として他の追隨を許さない。又「新譯源氏物語」「新譯榮華物語」等の著を始め、思想問題社會問題を取扱つた論文や感想は有名なる各種の新聞雜誌に始終發表してゐる。何れも深刻な大膽な徹底的な議論である。多くの子女を撫育する片手間に、七厘の前で團扇を以て火を起しながら歌を作り文を草してゐると言はれた女史が歌はもとより宗教に教育に法律に經濟に其の他あらゆる社會問題に縱橫の筆を執つてゐるのは實に驚かざるを得ない。大正元年夫君と洋行して一層詩趣も思想も豐かにした。尤もある人は女史流の主觀的演劇的誇張を主とする歌は明治三十年代のものと一蹴してしまふが追隨者はまだ相當にあるやうだ。著書には前書の外「激動の中を行く」「愛理性及勇氣」及び新著感想集「愛の創刊」等五十餘種に及んでゐる。何れも考察敏慧、推論明徹なるは勿論情恩富潤、行筆雄快、至る所の頁に新理想主義を宣傳して新文化生活に對し好刺激資料を與へてゐる。尚大正十年十一月より夫寬氏と共に明星を再興し。これによつて多くの同人と共に、藝術の全野に貢獻しようと努力してゐる。大正八年十一月友達會に出した靜物の畫は女史の多方面に天才のあることを語つてゐるものである。世の

人は女史の思想を極端だといふがそれは女史の文をよく讀まぬ人の評である。よく讀めば極端に見ゆる論議の中に道理のあることがわかる。唯文學者の論は道理には合してゐても現實社會を顧慮しない理想論に陷ることがあるから、其點で過激となることがないとは言へぬ。女史は寧ろ穩健妥當で進歩的で先覺者風である。唯筆鋒が鋭いから一寸極端のやうに誤解されるのである。

霧迷ふ信濃の溪を立ち出でて北海に來ぬ秋風とわれ

一もとの白花として摘みぬべき隣の國の山のみづうみ

午ちかし山に寄りくる北海の裸の雲と衣着たる雲

美しき佐渡の小島の隱れゆく黄昏れ時となりにけるかな

あさましく大雨に追はれ走るなり山をめぐれる濁流とわれ

わが倚れば身の小さきこと天地の大なることを

知らしむる窓

死と我とはたまた戀と近く居ぬいつ横さまに思ひのりけん

山々の高きかぎりを白玉に換へていみじき春立ちにけり

砂の丘雪を被けるをちこちを鳥の歩めりわれも歩めり

われ淋し見る日來らずいつしかと文が運びし香料も盡く

白波の沫のやうなる眞珠の輪首にかくれば涼風ぞ吹く

明星のひかり郭公はたおのれ殊更めくと樂しむわれは

現住所 東京市麹町區富士見町五ノ九〇

與謝野 寛 ヨサノヒロシ（歌）

明治六年二月二十六日京都岡崎に生れた。曾て鐵幹と號したが、今は一般の傾向に從つて號を用ひない。氏は幼時から家學を受けて勉強し更に京都

同志社を半途で退學上京し落合直文、森鷗外二氏に師事し多數の作家と交際し得るところがあつた併氏を歌人とする根強いものを與へたのは氏の父である。氏は父によつて詩人の芽を出させてもらつたのを落合森の二大家によつて根柢を培つてもらつた。殊に落合氏の影響は偉大であつて氏の唱導せる新國文新短歌の感化を受けて、後別に一旗幟を翻したのである。日清戰後朝鮮に遊び歸來、「東西南北」「天地玄黄」等の詩歌集を公にした。豪健の調頗る世の歡迎するところとなり新派詩歌の宗として重んぜられるに至つた。三十三年新詩社を起し雜誌「明星」を發行して、新詩勃興の機運を導き所謂「星菫」時代の中心となつて、當時の青年の浪漫主義運動の主盟と目されてゐたが四十一年自然主義勃興と共に新詩社を解散し、「明星」は第百號を以て廢刊して了た。爾來頗る振はない。四十四年佛蘭西に遊んで大正元年に歸朝したが譯詩集「りうの花」一卷の外文壇に貢獻するところがあまりなく、新聞の傳ふる處にはこれより小說の創作をするさうであるなどいふ噂がとりどりのうちに、平野萬里等との相談もまとまつて「明星」の復活となつた。そしてこれには與謝野夫妻と平野萬里高村光太郎等前より關係ある人々とが中心となり努力することになつて、大正十年十月その創刊號を出した。これについては同號の卷尾に晶子夫人の書かれた「一隅の卓」に詳記してあるやうに、大勢の人即ち平野萬里、高村光太郎、永井荷風、石井柏亭、茅野蕭々、竹友藻風、北原白秋、吉井勇、佐藤春夫の諸氏が力を入れ尚あらゆる藝術の發表や紹介等に骨を折ることになつて繪畫でも建築でも音樂でも文學藝術の全視野を目標とする。從つて雜誌も自然宏大なものとなり定價も高いが繼續してゐる。因みに又氏の父が周防の國德山にて病死の時宇田淵、近藤芳介、赤松祐以、昆尼薩台巖、猪熊夏樹、富岡百錬等多くの歌人が送葬したのを見ても、その歌人としての位置勢力及それがいかに鐵幹氏に詩的感化を與へたかを知るべきである。大正十二年二月二十六日は寛氏

が五十回誕辰を迎へるといふので新詩社の人達が發起となり帝國ホテルに祝賀會が開かれた。著書には「鐵幹子」「槲の葉」「相聞」「鴉と雨」「灰の音」「りうの花」等の著がある。鷗外全集の出版については大に力を盡すところがあつた。閨秀作家として有名なる與謝野晶子女史は氏の夫人であつて、多くの子女を養ひつゝ同じ藝術の道に力を盡してゐる。大正八年五月より慶應義塾大學文學部教授となつた。

徒らに何をか言はん事はたゞこの太刀にあり
この太刀にあり

食みて啼く一羽の雀二羽となり三四羽となりぬ
栗の穗の上に

韓にして爭でか死なんわれ死なばをのこの歌ぞ
またすたれなん

うまおひも蝉も闇に爪彈く二妻こふるわれを嫌ふや

わたつみの枯れし白花名をしらぬかたし貝をもうつくしむかな

うまや路の川ぞひ柳ひと葉こぼれふた葉こぼれて日は暮れにけり

この寢ぬる朝けの風の冷きに別れて往なば君の病みなん

いたづらに我は死なじと誰も言へど名もなき墓の多くこそあれ

彗星

かの虛空過ぐるは誰ぞ。
しろがねの箜篌の音うかび、
疾風ふき、雲こそ明れ。
蓬として、見よ九萬尺の
青き髮背になびけり。

あゝはうき星、未曾有と
汝を讃す。命運の
外なる道を驅けめぐる
天上の才、不退の子、
千萬年に一たびの
秘密もたらす大使者よ。

常珍らなる黃金の
燭臺とりて高照し、
無始の世からの歎きゆゑ、
泣き濡れたる雙の眸、
日月輪も金牛も
大熊星も見かへらず。
唯、あはれなる地球星
半死のさまを一瞥す。

行方はいづこ、ましぐらに
かなたへ、かなたへ。永劫に。

現住所 東京市麹町區富士見町五ノ九〇

吉井勇 ヨシイイサム（歌）

伯爵吉井幸藏氏の嗣子。維新の志士吉井友實氏の孫。明治十九年十月東京麹町に生れた。早大文科に入學し後政治經濟科に轉じて中途で退學した。早くより新詩社に入り「明星」に歌を公にした。後感情上相容れざるところがあつて北原白秋、木下杢太郎、長田秀雄、長田幹彦、秋庭俊彦等と共に退社し、石川啄木、平野萬里、平出修等と「スバル」を發行した。四十一年處女戲曲「午後三時」を發表し、四十三年處女歌集「酒ほがひ」を公にして、歌人として又戲作者として文壇に立ち、その縱橫の才を稱された。戲曲「夢助と僧」と「河内屋與兵衞」とは自由劇場に依つて有樂座にて演された。歌集「昨日まで」「戀人」「祇園歌集」「未練」劇曲集「午後三時」「夜」「俳諧亭句樂」「髑髏舞」小品集「水莊記」「明眸行」等の著がある。華胄の文學者として多方面の才を謳はれてゐる。長田幹彦氏と友としてよく、遊蕩文學者として文士赤木桁平氏の痛棒を受けた一人である。夫人ふみ子女史は柳原義光伯の令嬢で問題の歌人白蓮女史の姪である。

冬の夜のほりにただよふ月魄がほのかに君をおもふ心か

わが住みし山寺の緣にぬぎすてし君が草履にこ

ほろぎの啼く
おひぼれし新内ながし過ぎゆきぬ避暑地の街の
秋の夕ぐれ

現住所 相州鎌倉

吉植庄亮 ヨシウエシヨウスケ（歌）

明治十年四月千葉縣印旛郡本埜村に生れ、第一高等學校を經て東京帝國大學法科大學に入り、大正五年その經濟學科を卒業した。爾來短歌に精進し大正十一年中央新聞社に入つて記者となり、十二年短歌雜誌「橄欖」を創刊し、十三年一月北原白秋、前田夕暮の諸氏と「樹海」を創刊して「橄欖」を之に併せやうとして果さなかつた。前記の外短歌雜誌 自然、婦人の友、中央新聞等に短歌を發表してゐる。著書に詩集「寂光」がある。

現住所 東京市外大森木原山一六六三

吉江孤雁 ヨシエコガン（評）

名は喬松、明治十三年九月信濃國東筑摩郡鹽尻村に生れ、三十八年早大英文科を卒業した。在學中中澤臨川、窪田空穗等と共に文學雜誌「山彦」を發行した。卒業後國木田獨歩の經營せ 近事畫報社に入り、又早稻田中學の教師となつた。今は早大教授になり大正五年同大學在外研究員として佛蘭西に留學した大正九年歸朝した。初め小說を書いたが小說家としてよりも紀行文家として世に認められた。「綠雲」「青空」「旅より旅へ」「霧の旅」「輝く海」等の文集はいづれも作者獨得の自然描寫を主とせる好個の散文集である自然を愛する事氏の如きは文壇他に類がないと言はれてゐる文章に才氣は乏しいがあくまでも眞摯で些の匠氣がなく愛誦に堪へたものがある。又神秘主義的思想家として一方に重きをなし著書には論文「純一生活」「愛と藝術」『佛蘭西印象記』翻譯モーパツサンの「水の上」「貧者の國」ゴーリキーの「三人」ピエル、ロチの「氷島の漁夫」「近代文明と藝術」などがある。

「佛蘭西文藝印象記」は氏が佛國に留學して其風

物に親しみ其の文藝を究めたる數年間に於ける印象記であつて佛蘭西精神の深刻なる解剖である。篇中南國記、ポールロワイヤアル訪問ヴエルサイユ、以下十數篇或は歷史を說き文藝を語り其の視野其考察まことに文壇稀有の收穫である。大正十三年頃から佛蘭西文學を取纏めて博士論文を提出するといふ噂があつた。

現住所 東京府下日暮里渡邊町一〇四〇

吉川英次 ヨシカワエイジ（川）

明治二十五年八月十一日橫濱市石川中村に生る。取立てゝ記すべき學歷は無い。幼時より印判屋の小僧、活版屋の丁稚、御用商人の小僧等を經て十五六歲の時小間物行商人、目あきの子供按摩、土工の群に入つて少年勞動者の體驗があり、永きは船渠會社の船舶勞働者二年、二十歲より三十歲迄の十年間は古代蒔繪、象嵌品製作に從事し、大正十一年より東京每夕新聞記者となつて家庭部に在勤してゐる。著書「親鸞記」の外「耳環の娘」「でこぼこ花瓶」などの童話數十篇、「古川柳隅田川考」などの川柳研究及滑稽小說等を書いてゐる。

現住所 東京市本鄕區駒込千駄木町六五

吉田金重 ヨシダキンジユウ（小）

明治二十三年五月岡山縣御津郡馬屋下村に生れ、大阪府立職工學校に入學したが中途で退學し、後建築、官吏、職工、新聞雜誌記者等を經て創作生活に入り、今日に至つた。「落書」「人食虫」「鈴の響」「雨を衝いて」「骨を碎いて」「一人の漂浪者」「鐵の呻き」「狂人の夢」「ある看護人の日記」「癡狂院の冬」「宿なし犬」等の創作の外、評論に「プロレクタリアの文學」「虐遇者の戀愛觀」「血に染む夕日から」「社會から文壇へ」「作家と作品」「人と作品」「プロの代辯者を檢討す」感想に「享樂の社會化」「湘南漫語」「煤煙の町から」等多くの創作や評論を矢繼ぎ早やに發表して無限の努力と才筆とを示してゐる。

現住所　神奈川縣川崎町砂子六八

吉田弦二郎　ヨシダゲンジロウ（小）

明治十九年十一月佐賀に生れた。本名は源次郎。明治四十四年早大英文科卒業目下早稲田大學講師であつて傍ら評論感想や創作に筆を執つてゐる。「生く日の限り」「島の秋」「大地の涙」「光落日」「人間苦」「無限」「雜草の中」「小鳥の來る日」「生命の微光」「草光る」「芭蕉」「タゴールの哲學と文藝」「生の悲劇」等多くの著書があるが何れも有名な著書である「生命の微光」は人は孤獨から生れるといふ信念の上に立つて眞の生活を忠實に徹底的に味はうといふ淋しい勇しい境地を示して孤獨なる著書の力と光とに憧るゝ聲である。「草光る」は「小鳥の來る日」の姉妹篇で新に成れる著書の感想集であつて或は芭蕉を說き基督を論じ人間哀を歌ひ或は自然の美しさを讃へ實に哲人の語錄の如く聖者の祈禱の如く一篇意韻の詩致をもつてゐるのでセンチメンタルに過ぎていやだ

と云ふ人もあるが兎に角氏の作は一作出るごとに洛陽の紙價を高からしめるほどの愛讀者を有してゐる。最新刊「芭蕉」は氏が蕉翁の風格にあこがれて、翁の臨終の胸を掠めた淋しい人生觀に筆を及ぼし、その弟子路通を配して傾向的に二人のニヒリストを描いてゐる。「山の院から」などにしても、天刑病におかされてゐる少女の身の上について、生れながらにして何の罪も無いものが、なぜその不幸を負はねばならぬかといふやうな問題を少女の筆のやうな感觸をもつて書かれてある。

現住所　東京府下瀧の川二八六

吉田白嶺　ヨシダハクレイ（彫）

美術院同人の彫刻家明治四年十二月東京本所松坂町に生れた。幼より彫刻を好み、夙に木彫を獨修し、文展へは第三回に「念」第七回に「寂靜」を出し入選して褒狀を得た。また大正三年、再興美術院第一回展覽會に「樂女」「海女」を出して其の才を認められ同人に推され、其第二回に「漁夫」「髭」第三回に「鏡」「供燈」「女」第四回に「失題」を出し大正十二年の大震火災後の日本美術秋季展覽會には「竹林寺僧」「朔北の朝」等の力作を出して好評を受けた。

現住所　東京府下瀧ノ川村字田端一五五

故吉田晩稼　ヨシダバンカ（書）

東京の書家、長崎の人で香竹と號した。書を春老谷に學び高島秋帆に西洋兵法を學び、戊辰の役筆を投じて軍に從つた。維新中興の後身を官に奉じてあつたが遂に之を辭して詩酒の間に適意筆硯に親しんで自ら樂しんだ。老齡に達しても鑓鑁尙ほ衰へないで建筆を揮つたが明治四十年四月三日病死した。

吉田博　ヨシダハク（畫）

明治九年九月久留米市に生れ、洋畫家小山正太郎の不同舍に入り。後、三十二年より歐米に遊ぶこと三年、三十四年中村不折、滿谷國四年、石川寅治等と太平洋畫會を起し、三十七年より三年間再び歐米諸國を巡遊した。文展には第一回に「ピラミツトの月夜」第二回に「雨後の夕」第三回に「雲表」を出した二等又は三等となり、第四回より第七回迄洋畫部審査員となり、第四回に「劍ケ峯より」「雲界」「溪流」第五回に「朝」「芥屋大門」第六回に「奔湍」「飛驒の深山」「寢覺の床」第七回に「酒田港」「漁村西日」「初秋の朝」第八回に「春」「ばら」「牛車」第九回に「穗高山」「奔流」「初秋」第十回に「溪澗」「山頂の花崗岩」「天龍川」第十一回に「崖底」「保津川」等を出した。此他太平洋畫會展覽會等にも出品多く、風景畫最も得意である。又太平洋畫會理事をしてゐる。大正十三年規則改正後の帝展審査員に擧げられた。

現住所　東京府下瀧之川町中里二七二

故吉嗣拜山　ヨシツグハイザン（畫）

筑前太宰府の人で、名は達、別に左手拜山、獨掌庵又は拜山と號し、少時京都に入り、中西耕石の

門に學んで同人の間に嶄然頭角をあらはした。旁ら詩畫を巧みにし、維新後倉敷縣令となり、後修史局に轉じた。明治四年震災に遇つた時、家屋倒壊のために右腕を挫折し遂に之を截斷した。その後は左手を以て揮毫し左手拜山又は獨掌庵と號したのである。尙その截斷したる右腕の骨をもつて筆管を作り、揮灑するに雲煙飛動する趣がある。二十七年第四師團より英國皇室へ獻上の畫を囑せられた時は芙蓉峯の圖を描いたら、英皇の激賞するところであつた。爾來各國貴賓の需に應じて多く描いた。又佛國東洋畫研究家ミジョンに其の技を識られ、同國に多數の崇拜者を得てゐる。氏は明治の初め日本詩人の詩を選んで編輯し題して「寒玉集」と言つた。又別に「骨筆奚囊」の著がある。大正四年一月十一日年七十で病歿した。嗣子鼓山も父の後を繼いで南畫を得意としてゐる。拜山の書は關東には餘り知られないが關西には崇拜者が多いので僞物もなか〳〵少くない。

吉野臥城　ヨシノガジヨウ（詩）

名は甫、仙臺の人。長詩人で夙に「小百合集」「野茨集」等　出したが近來その作を見ない。四十一年氏の著作せる「明治詩集」は卷末に細密の年表を添へて有益な著書であつた。

埋火三律

一

灰の面の稍崩れたる午すぎの
埋火や、若き男と女と物がたる。
薄日さす障子に映る鳥の影、
香に蒸してもからに火照る炭の顏。
寒牡丹音なく散らふ卓の上、
ゑましさの悲しみを生む一瞬に、
手放てば、二人の緣兒はれぬ。

二

灰古の幸もなう、唯更くる夜の
埋火や、うら若き女ぞ物おもふ。
銀燭は薄冷の香を吐いて、
金盞は契りし人を待つけはひ。
籠居の炭こそ老ゆれ髮白に、
叫銳の本兒こそ過ぐれ闇暗を、
忽ちに靜寂にかへる惡寒の、
高樓に、あはれや人の寢もやらぬ。

三

灰清く搔き均したる朝の間の
埋火や、うら若き男ぞ歌おもふ。
額黑の炭漸々に醉ひ惚けて、
腹白の水入の鳥啼かまくす。
洋裝の金字の本に照る光、
淨玻璃の玉戶の曇消ゆる影。
活くる日の希望仰げば、戀心、
美しき靈の宮居に憧るる。

吉野左衞門　ヨシノサエモン（俳）

本名は太左衞門、明治十二年二月十日東京府下北多摩郡三鷹村大字野崎に生れ、明治三十三年早稻田大學の前身である東京專門學校の政治科を卒業し、直ちに國民新聞社に入つて編輯に從事すること約十年、四十三年京城日報社長となつたが、大正三年病氣の爲辭した。明治二十八年頃正岡子規の門に入つて俳句を學び、後高濱虛子の後を承けて國民新聞俳句欄の選者となつたことがある。著書には「栗の花」があり、氏の句は「左衞門句集」に載せられてゐる。

敷藁に落付く瓜や此の日頃
蚊柱や桑のかぶさる野の小路
苔清水弘法の井戶と申し傳
現住所　東京市麴町區上六番町四二

吉原雅風　ヨシハラマサカゼ（畫）

名は義雄。別に探仙齋の號がある。明治十五年十一月埼玉縣熊ヶ谷町に生れ、橋本雅邦について狩野派を學び、東京美術學校に入つて明治三十六年日本畫選科を卒業し、二葉會、美術研精會、日本畫會、日本美術協會等で屢々受賞し、二葉會及び美術研精會評議員となり、文展へは第一回に「暮

雪」第三回に「鼾睡」第五回に「雨後の朝」第九回に「山二題」第十一回に「木曾御嶽」を出した諸會に出品して銀牌銅牌を受けたこと屢だ多い。

現住所　東京府下日暮里谷中本一〇三二

吉屋信子　ヨシヤノブコ（小）

明治二十九年一月十二日新潟縣廳の官舍に生れ、栃木高等女學校を卒業して創作に從事するやうになつた。大阪朝日新聞の當選小說「地の果てまで」で名をなした。作者の頭がなか〳〵機敏に働いてゐて、性格を描き別ける手腕もあり、觀察が細心で特に牧師の家庭を書いてゐる處などは巧妙である。後「花物語」「屋根裏の二處女」「海の極みまで」「野薔薇の約束」「ちる〳〵みちる」「黃金の貝」等を書いて益々其の才を示してゐる。「花物語」の如きは女學生の非常な歡迎を受けて、今では第三集まで出してゐる。「海の極みまで」は宗教的情操深く、婦人の性の秘密を巧みなる筆で精刻に描いてゐるし、「野薔薇の約束」「黃金の貝」等は多くの童話を集めたものである。

現住所　長崎市櫻町五一

故依田學海　ヨダガクカイ（漢）

下總佐倉藩士依田貞剛の二男、名は百川、字は朝宗、學海はその號である。夙に漢籍を藤森天山翁について學び詩文を巧にした。維新の際尊王の說を唱へ、入京して公卿の間に周旋するところがあつた。後集議院幹事、地方官會議書記官、文部省少書記官、修史局編輯官に歷任した。明治十八年官を辭して專ら鉛槧に從事し其著に「譚海」「吉野拾遺」「英武蒙求」「改良脚本小御門」「十津川」等の外數種ある。

看レ花逢レ雨
片雨晴時暖　驟催　千枝萬朶望中開
梅兒塚是在二何處一　都被二紅雲遮斷一來

塔澤客舍
四山圍　萬二綠一、奔湍崩二澆雪一、一橋架二其上一、細徑通二屹嶪一、唯覺二天上近一、不レ知二人間熱一、玉龍勞二蒼崖一、飛瀑下二瑤闕一、淵源銀河遠、萬古長不レ竭、峻樓屹相峙、山勢自頑頑、況有二溫泉靈一、病骨輒蘇活、吾欲レ謝二風塵一、養生得二秘訣一、唯與二山水一親、不下與二世人一褻上。結習耽二吟詩一、多言增二罪孽一、將下汲二清冽泉一、以濯二三寸舌一。

秋懷篇
蓮塘秋瘦芙蓉死、清淚化レ碧凝二池水一、騷客骨削詩腸枯、酸風苦雨吹不レ起、羲娥迴轉年華馳、顧念夢斷薰風時、凉氣浸レ肌墜二斜月一、素衫露濕二泫纖絲一、美人衰老頭盡白、縱是金石猶變色、四時循環何足レ云、陸離誰憐熱血赤、

明治四十二年七十七歲で家に病死した。其の文は漢ヶ教科書にも採られてゐる。

震災前の住所　東京市神田區小川町一

故四屋恒之　ヨツヤツネユキ（漢）

名は恒之、字は子固、通稱萬三郎、後行藏と改めた。穗峯又半讀廬主人と號した。日向延岡藩士乘槎の第三子天保二年九月生れ、幼時藩校に入つた嘉永三年江戸に遊び高松藩儒赤井東海に從學し、後大學頭林氏の門に入り、都講河田迪齋の塾に寓し、又業を鹽谷宕陰に受けた。安政二年十月延岡に歸省し四年十二月備後の藤江塾に往き森田節齋に就いて文法の精を究めた。既にして又京攝の間に游寓し六年十一月再び江戸の藩邸に抵り藩命によつて子弟を敎授した。萬延元年藩侯世子の侍讀となり、尋いで近習頭を兼ねた。明治七年修史館に入り協修より編修官に進んだ。十四年元老院書記官に轉じて從五位勳六等に叙された。後東京帝國大學華族女學校等の講師となつた。氏學は洛閩を宗とし旁漢唐諸家に折衷し、最も力を文章に用へた。曾つて斯文學會講師となつたこともある。文久年間川田甕江、依田學海等と盍簪社を結び、古文を講究した。明治三十九年一月十四日東京麹町の自宅に歿し青山に葬つた。年七十六。

米川正夫　ヨネカワマサオ（譯）

明治二十四年十一月二十五日岡山縣上房郡高梁町に生れた。東京外國語學校の露語科を卒業して後第七師團將校外國語研究會教授となり、傍翻譯に從事して「白痴」「戰爭と平和」「カラマゾフ兄弟」「オネーギン」「最後の一線」「神々の後活復篇」「悲戀の曲」（トルストイ）等の翻譯をした。大正六年大藏省財務屬官として露都に派遣せられて、そこに居たこともあるが、七年二月華命の亂のために引上げた。白樺派の武者小路實篤氏は人の事をめつたにほめぬ人だが『大正六年に出たいろ〳〵の文のうちで一番感心したものは高村光太郎氏の譯した「ロダンの言葉」と米川正夫氏の譯した「カラマゾフ兄弟」だ云々』と文章世界で書いて居た。これで見ても氏がいかに露語に通じ、且つ又ドストエイフスキーの魂をいかによく摑んだかゞわかる。尙この外著作の創作「靈の底にて」があり、雜誌に發表した翻譯に「嫉妬について」「母の肖像」「考へたる城主」「血痕」「村の悲劇」「評論に「トストエーフスキイと革命」感想「闖入者」「ガルサーボーナの思ひ出ロシヤ藝術」等がある。今は東京外國語學校の講師と陸軍大學教授とを兼ねてゐる。

現住所　東京市外下高井戶

米澤順子　ヨネザワジユンコ（歌）

明治二十七年十一月東京市神田區に生れ、三輪田高等女學校に學んで才媛の評があつた。後日本畫を熊谷直彥氏に就いて學び、詩作を試みて名を知られるやうになつた。東京日本橋區蠣殼町の齒科醫の夫人として多忙の生活を送つてゐる間の所産として詩集「聖水盤」といふものを東京堂より出版してゐる。收めるところは五十餘篇の多きに上り、飽くまでも純一なる女性に徹して、典麗優雅しかも其の高貴なる詩品と豐潤なる詞量とは、女史の正しき素質をして愈々光輝ある晶玉たらしめ全く異色ある獨自の詩境を領せしめてゐる。名古屋の出身で大正五年に歿した東京の有名な書家渡邊沙鷗は女史の實父である。

わが心しづかに
されど練鵠のつばさの如
いとも疾く
色彩密に輝けり

わが心しづかに
されど倦む事なく
ひさまづき
たゞ祈禱す

わが心しづかに
沈默を見つむ
めざめよ
重きよろひ戶

現住所　東京府下中野町桃園三四六四

米原雲海　ヨネハラウンカイ（彫）

彫刻家、明治二年八月安來節の本場、出雲國安來町に生れて、彫刻界の名家高村光雲に就て學び、東京彫工會、日本美術協會、內國勸業博覽會及び外國博覽會等に出品して賞を得ること十數回である。文展では第一回に「神來」第二回に「寒山子」第三回に「宇宙」第四回に「仙舟」「和氏の璧」「竹取翁」第五回に「天樂」「觀音」「專念」第六回に「虛心」第七回に「沙金」「吉祥寺觀牡丹」第八回に「旅人」第九回「曠野」「松風」第十回「瓢箪鯰」を出した。門下に石本曉海、戶田海笛、太田南海がある。第四回以來文展の審査委員となり、斯界の重鎭となつてゐる。加州善光寺の樓門內にある。新彫刻は高村光雲翁との共力である。大正十二年十一月東臺曠原兩派の美術團體握手の時北村西望、朝倉文夫等の若手連より除外されたので一波瀾を起したのであつた。

現住所　東京市本鄕區曙町一六

萬鐵五郎　ヨロヅテツゴロウ（畫）

明治十八年十一月岩手縣和賀郡土澤町に生れ、東京美術學校に入つて大正六年西洋畫科を卒業し、齋藤與里、高村光太郎、岸田劉生等と共にフユーザン會を起して、毎回之に出品し、又大正五年、眞田久吉、齋藤與里等と日本美術家協會を設立し爾後毎回出品した。其他、第四回院展に「雪の朝」「池」「夏の眞晝」第四回二科會に「靜物」「もたれて立つ人」等を出品して何れも好評を博した。現に二科會會友である。

現住所　相模國茅ヶ崎町天王山木村別莊

レ ノ 部

冷泉爲系　レイゼイタメツグ（歌）

明治十四年八月京都市上京區今出川通烏丸東入玄武町の自邸に生れた。父は御歌所參候冷泉爲紀で

平安神宮宮司の要職にあつた人である。明三十八年爲紀薨去によつて同年十一月家督を嗣いだ。爲紀の條に述べたやうに歌はこの家のもので二條家冷泉家は昔より相並んで歌道師範家の名を恣にしたものである。故に父爲紀は御歌所參候叔父爲守は入江子爵家を嗣いだが御歌所長となつた。氏も父の後を承けて御歌所に奉仕し參候となつた。新らしい教育を受けて一般の理解もあり且斯道には熱心であるから未來の寄人を以て目されてゐる。

霜雪のいろにまかひてかをるなり山田のいほの軒の梅が枝

曉のほだほのぐらきしばらくは雲と峰とをわけぞわつらふ

現住所　京都市上京區今出川通烏丸東入玄武四

冷泉爲紀　レイゼイタメノリ（歌）

爲理の男で安政元年正月京都に生れた。三年從五位下に叙し萬延元年九月元服昇殿を聽され從五位上に叙し文久二年冬侍從に任じ尋で正五位下に叙し明治二年正月從四位上に進み、八年少講義に補し次で大講義となつた。十三年五月權少教正に補せられ在職三年餘更に宮內省御用係となり十七年七月伯爵を授けられ式部職御掛兼勤を命ぜられた翌年六月宮內省庶務課事務取締兼勤となり又殿掌兼宮內省御用掛に轉じ式部職御用掛を兼勤し後之を辭した。十九年冬正四位に叙し二十一年御歌掛參候を命ぜられ二十三年貴族院議員に當選した。後正三位に進み官幣大社平安神宮宮司となり御歌所參候となつた。歌は師範家の流であるから固より堂上の俊秀である。祖先に俊成定家爲家の外十六夜日記の著者として有名な阿佛尼があり。世々和家師範の家として知られ、中御門の一流にして羽林の一家である。明治三十八年十一月薨じて爲系家を嗣いだ。

（備考）

爲理——爲紀——爲系　御歌所參候
　　——爲守　入江子爵　御歌所長

生前住所京都市上京區今出川通烏丸東入玄武町四

ロ ノ 部

故老鼠堂永機　ロウソドウエイキ（俳）

文政八年の生。東京の舊派俳諧の宗匠である。姓は曾、父鼠肝の後を受けて寶晋齋其角堂第七位世を繼いだ。夙に其角派の流を汲んで其角堂、善哉庵又は阿心庵と號し後更に老鼠堂と云うた。都下俳壇の老宿である。其著に其角集、支考全集、芭蕉以前俳諧集、俳諧自在等ある。氏は學殖あるばかりでなく、家に多くの藏書を有し、其抱負識見も亦普通の俗宗匠とは大層異つてゐる。作句を見ても其角の句を習つてゐるから往々難しい句もないことは無いが佳い句も少くはない。書も其角の傳統を得てゐるし畫も一寸した俳畫を物する。明治三十七年一月十日八十二歲で逝いた。其角堂は不忍辨天境內にあるのを向島三圍社域に移して自ら其の側に居り後門人機一に讓り、芝公園紅葉山

に住し、別に雪人をして阿心庵を繼がしめようとした。雪人は慶應出身の天才俳人として望を囑されたが、のち放浪の生活をしたので、永機の歿すると共に庵中の寶物も藏書と共に四散した。まことに惜しいことである。

身に雪の消ゆるところや山櫻
夕櫻をしまれね身に散りかゝる
ほと〳〵ぎす我がための第一義
吹けや鳴け一こと寺のほと〳〵ぎす
月も世をのがれんと入るや山の雲
殘月や右は昔の有磯海
シテ脇をひとりに雪の夕哉
妻もてと又もいはれて年の暮

尙氏は俳句の外畫を善くして名聲があつた。序に其角堂機一の句を次に擧げて置く

佗住と人はゆるさじ花のやど
行春の誠や榮華物語
夜あらしやけさ花も夢春も夢
牡丹あり草庵の什乏しくも
鶯のまゝ子もゆかし時鳥
能因の嘘あらはるゝ蚊遣かな
如月やしばし柳の隅田川
梅寒し木の間〳〵の星明り
何よりもわが好きなもの櫻哉

（俳統）

其角―老鼠肝湖十―霜柱菴湖十―黄花菴湖十―木者菴湖十―螺舍永機―老鼠堂永機―其角堂機一
巽窓湖十―風窓湖十

ワノ部

若月紫蘭　ワカツキシラン（劇）

名は保治、明治十二年二月山口縣佐渡郡西浦村に生れ、山口高等學校を經て東京帝國大學に入り、明治三十六年英文科を卒業し、地方中學の教諭を經て四十一年萬朝報に入り、大正十一年まで文藝及科學を擔當した。大正十年十月東儀鐵笛中村吉藏兩氏を顧問とし、津村京村平尾盈高等と新劇研究會を起して、現に俳優二十餘名を養成中である十一年劇研究所を設置し「人と藝術」の同人となつてゐる。「滅びゆく家」「石田三成の死」「彫像」「妹の心」「信仰」「愛慾の彼方へ」「出發前」等の戯曲、小説「手紙」評論「近代劇の使命と教育との關係」及翻譯「青い鳥」「サロメ」「スケツチブツク」等がある。氏は千九百十七年「青い鳥」の翻譯權及發行權をメーテルリンクより讓受けた。氏は頗る多方面であつて和歌をもよくし毎月の「水甕」に寄稿してゐる。大正九年「青い鳥」の翻譯權問題で桶山正雄氏と問題を起したことがある。

氏はまた歌俳をよくし次のやうな名吟がある。

手をのべて虚空をうてば淋しさの爪の先よりひしひしとわく
黒やみの天地をこめし鴈の音のすきたるあとの夜のまどろみ
さびしさに森のこだまを呼びさまし物ぐるほしく呼びつゞけたる
見おろせば臀こそばゆき紅葉かな
行々子論ずる國の境哉
二階から見送る鴈の別れかな

現住所　東京市小石川鷲籠町一一五

故若松賤子　ワカマツシヅコ（小）

女史は福島縣會津若松の藩士島田勝次郎の長女であつて、元治元年その鶴ケ城下に生れ、幼より文を好んで才人の聞えがあつた。本名は嘉志子、若松賤子はその鄕名に由つた雅號である。後に女學雜誌社長兼私立明治女學校長巖本善治に嫁し、家事を執る傍文筆に親しんだ。英文學及び國文學に造詣深く著譯少くない。「お向ふの離れ」「すみれ」「忘れがたみ」「イナツク、アーデン物語」「小公子」「ローレンス」「セイラ、クルーの話」「波の

まに〳〵」「おもひで」等は其の主なるものであつて、何れも讀者を悦ばぜたが中でも「小公子」は非常に多くの讀者を得て女史を有名にしたものである。これは米國女流小說家バーネツト夫人の傑作を譯したもので明治二十三年八月より二十五年一月にかけて「文藝倶樂部」に連載したものである。譯文は極めてやさしい女らしい文であるが頗る暢達であり內容は云ふまでも無く健全なので家庭の讀みものとしてよろしい。明治二十九年二月病んで歿した。

若山牧水　ワカヤマボクスイ（歌）

明治十八年八月日向國臼杵郡坪谷村に生れた。早大英文科の出身。延岡中學生時代に和歌を投稿し佐々木信綱博士の選により一首直ちに天位にのぼり諸友人を驚かした。中學卒業後小說家を希望して上京し早大に入り又尾上柴舟の門に入り前田夕暮等と「車前草社」を結び雜誌「新聲」に詠草を發表した。四十年處女歌集「海の聲」の自費出版をなしたが出版部數七百の中三分の一も賣れなかつたといふことである。卒業後中央新聞に入つて三面記者になり、四十三年短歌雜誌創作の編輯に從事した。同年秋煩悶の激しさに堪へないですべてを拋つて放浪の旅に上つた。四十五年閨秀歌人喜志子と結婚した。大正四年相模三浦半島に移住し相南の風光に浸りつゝ靜かに歌作に耽つてゐたが今は靜岡縣沼津町在上香貫にあつて雜誌「創作」を主宰してゐる。

大正七年八月奈良に遊覽の折斯道の熱心家は松のバーで歡迎會を催したら氏は氏獨得の朗吟などをやつたが席上酒をあふつて肴には少しも手をつけなかつたとの事である。兎角詩人にはどつか變つた所を持つてゐる人が多い。藤村、白秋、泡鳴、桂月、漱石、小劍、未明、潤一郎其他の文士を見るに多くは常人と異る所がある。

歌集には「別離」「路上」「みなかみ」を經て「くろ土」「山櫻の花」に至るまで十三冊散文集「牧水歌話」「旅とふる鄕」「海より山より」「靜かなる旅を行きつゝ」「比叡と熊野」「批評と添削」選歌集に「花さける曠野」「路ゆく人々の歌」其の他多くの著があり短篇小說もある。最近の歌集「山櫻の花」を見るにその心情は天眞に風懷は渾熟して現下歌壇の第一人者と言はれてゐる。尙氏が近く發表した作物を見るに、和歌に「伊豆西海岸風景」「山の歌」「山櫻二十五首」「河鹿鳴く」「富士の歌」「夏終る頃」紀行文に「山路」「大野原の夏草」隨筆に「追憶と眼前の風景」感想に「夏の言葉」童謠に「婦人の友」の外數多く、每年の詠出歌數のみでも實に五六百首の多きに上る。氏は歌人としてのみ知られてゐるが、又紀行文家としても相當の地位を保つべき人であることは、氏の三十有餘の紀行文と愛吟措く能はざる數十の短歌とより成つてゐる「靜かなる旅をゆきつゝ」の一編を繙いてもよくわかる。

ほそぼそと萠えいでゝ花も持たざりきこの一本の名も知らぬ草（名なし草）

葉を茂みしだれて地に影の濃きこの樫の樹に夏の來にけり（初夏）

眼馴れたるこの樹四時に落葉せず黑き寶ぞなる秋風立てば

ひろ〴〵と光れる磯に獨り居て貝拾ふ手に眺め入りぬる（貝）

萬葉集いにしへ人のかなしみに身も染まりつゝ讀む萬葉集（雜）

（略統）

- 與謝野寛
- 金子薰園
- 尾上柴舟
  - 前田夕暮
  - 若山牧水

落合直文

夫人喜志子は明治二十一年長野縣東筑摩郡廣近村に生れ、太田水穗氏の指導を得て歌道に精進し後牧水氏の夫人となつて今日に至つた。閨秀歌人として知られてゐる

現住所　靜岡縣沼津市千本原

和氣律次郎　ワケリツジロウ（翻）

明治二十二年一月伊豫國松山市に生れ、同地中學を經て上京し、慶應義塾に學んで語學に於て夙に其の天才を表しだが事情あつて半途で退學し、大阪毎日新聞社々員として勤務の傍英米文學ものゝ翻譯に力を注いでゐる。「オスカア・ワイルド」「死刑囚の手記」「畫僧フラ・アンヂエリコ」(和田英作氏と共著)、アナトール・フランスの簡潔で鋭利な感想文集なる「エピキユラスの園」及び「英米七人詩集」「強者の力」等の著譯がある。

現住所　兵庫縣武庫郡精道村字打出吉岡別莊内

和田英作　ワダエイサク（畫）

號は外面。明治七年十二月鹿兒島縣肝屬郡垂水村に生れ、大野幸彦、上杉熊松、原田直次郎、久保田米僊等につき、又黒田清輝、久米桂一郎等に學んで東京美術學校西洋畫選科に入り、三十年卒業した。二十八年第四回内國勸業博覽會に出品し、受賞して以來屢々受賞し、三十年佛國に留學してラフアエル・コランの門に入り、三十三年歸朝して東京美術學校教授となつた。文展には第一回以來洋畫審査員となり、大正二年國民美術協會の創立に盡し、作品は文展第二回に「おうな」第三回に「角田市區改正局長の肖像」「原法學博士の肖像」第四回に「肖像」「まとものあかり」「薔薇」第五回に「草花」「小金井博士肖像」「曇り日」第六回に「石黒男爵肖像」「H夫人肖像」第八回に「黄昏」「赤い燐寸」第九回に「佐用姫」第十回に「あけちかし」等がある。大正八年帝國美術院會員となり斯界の元老となつた。

現住所　東京市麻布區笄町八

和田英松　ワダエイシヨウ（國）

和田五平の長男で慶應元年九月十日備後國沼隈郡鞆町に生れ、上京して同二十一年東京帝國大學古典講習科を優秀の成績を以て卒業し同三十三年四月學習院教授史料編纂官たること久しい。その間各種の專門雜誌に獨得の研究を發表したる外「建武年中行事註解」「官職要解」「式逸」「日中行事

增註」「御撰解題」「榮華物語詳解」「增鏡詳解」(以上の二書は佐藤球氏と合著)等の既刊著書の外未刊の著書數種ある。有職故實の學に通ぜる氏は大正七年帝國學士院の賞を受け更に大正十年文學博士の學位を授けられた。氏の從母弟に當る永井潛氏は當代有名の醫學博士であつて生命哲學や遺傳學及其他の著書論文は何れも洛陽の紙價を高からしめてゐる。

現住所　東京市本鄉區湯島新花町一〇六

故和田垣謙三　ワダガキケンゾウ（文）

但馬國豊岡の人で、明治十三年帝國大學文科大學を卒業し、渡歐して英國ケムブリツジ大學に入學して經濟の學を修め、獨逸に移つて更に法律經濟の諸學を研究して歸朝した。初め文部省に入つて御用掛となり、十九年帝國大學教授となり、二十四年法學博士を授けられ、東京商業學校長及日本女子商業學校長となり、大正八年七月十八日年六十で歿した。氏は法學者ではあるが寧ろ文學者型の人であつて、文才に長じ、談議を得意とし、滑稽諧謔はその天賦の才をもつてゐた。著書鬼糞錄の外和歌俳句漢詩の類で氏の英譯になつたものが少くない。そして多くは外國の雜誌にも發表されてゐる。毎年の勅題の時の御製と御歌は例として之を英譯し公表してゐた。資恬淡謠曲を好み俗曲を樂しみ、警句滑稽は博士の頭から自然に湧き出るやうに口を突いて出たものである。平生酒を嗜み、細長主義と太短主義とはどんなものかといふやうな奇問を高等文官試驗に提出したやうなこともあると言はれてゐる。「もちづくし」の研究講演は實に滿堂の人をして驚き且つ笑はしめたものである。

和田三造　ワダサンゾウ（畫）

明治十五年福岡縣に生れ、幼より繪畫を好み、初め白馬會の溜池研究所に入つて西洋畫を學び、後東京美術學校西洋畫撰科に入つて三十七年優等の成績をもつて卒業した。文部省美術展覽會へは第

一回に「南風」第二回に「煒燁」を出して共に優秀の作を示し二等賞の上席を克ち得て大に好評を博した。四十三年文部省の海外研究員として三年間佛國に留學を命ぜられ、その歸途印度に長く滯在して東洋の古典佛教藝術を研究し大正四年三月歸朝したが、後忠ふ所あつて再び印度に渡つて研究を續けた。第十回文部省美術展覽會の審査員となり、第十一回に久し振りで傑作「バーの午後」を出して當時の畫界を刺戟した。大正七年南蠻繪更紗「海の幸」「山の幸」の大作をなし、その年文展審査員を辭任した。大正十二年大震火災後の秋日本美術展覽會が東京京都に開催された時はその審査員に擧げられた。また朝鮮總督府の大壁畫作成の傍、新方面の藝術境を開拓する意味で獨自の新日本畫に筆を染め、數十點の力作が出來たので、十二年の秋第一回作品發表會を催す計劃中の處、その作品全部京橋區の高島屋呉服店に集積のまゝ大震火災の厄に罹つて烏有に歸してしまつた爾來一家を擧げて靜岡縣沼津町在見附の大久保大將の別莊へ引籠つてゐるが、こゝ兩三年の間はこゝに在つて專心製作三昧の生活には入り、そして失はれた邦畫作全部に代る特作邦畫數十點を一大努力をもつて描き上げることになつた。蓋しこれが出來上つて十三年の春、千代田館内高島屋に新設の展覽會場で公表する筈である。東宮殿下の御成婚を奉祝するため、兩殿下の御肖像大額面の謹寫を大阪每日新聞より依囑され、東海道見付町に於てその大作を完成したが良子女王殿下よりは御服、御帽子、御靴、御手袋等御貸下の光榮を有した。大正十三年規則改正後の帝展審査委員に擧げられ再び其職に就いた。

現住所　東京市赤坂區臺町三

和田山蘭　ワダサンラン（歌）

名は直衞、明治十五年四月青森縣北津輕郡松島村に生れ、青森縣師範學校を優等の成績をもつて卒業したる後、短歌を若山牧水氏に師事を歌人に詣家なる岡山高陰氏に學んだ。小學校に教鞭を執つてゐる傍作歌に精進してゐる。歌集「泡雪ふる頃」「野びる」「酒壺」等の著があり、歌の雜誌「創作」同人である。

現住所　東京市外大井町五一六

和田重太郎　ワダジユウタロウ（畫）

石川縣の人、明治六年八月十五日加賀國江沼郡山代村に生れた。年甫めて四歳の時椿の枝を畫いて其技妙を極めたので鄉人其の異才に驚嘆した。氏初め精陰と號し更に烏江と改め又好山と號した。夙に普通學を修めた後二十二年石川縣工業學校專門畫學部に入學し、二十七年品行方正學術優等を以て卒業した。別に國文學及英話を修め富山縣工業學校の教師となり校長納富介次郎氏と共に同校創業事業に從事し、後教諭に進み繪畫圖案の科を擔任した。二十九年同縣工業品評會審査員を命ぜられ陶銅漆器繪畫木彫を擔當した。三十年母の喪に會ひ同縣を辭し、翌年香川縣工藝學校に聘せられ、繪畫圖案教授を擔任し亦校長納富介次郎氏と共に創業事務を完成した功として善行證書を受けた。五月職を辭し、佛國パリ大博覽會佐賀縣陶磁器出品協會に聘せられ、同會出品物の圖案を調製し、傍ら製陶法を指揮して三十二年同會事業の完成を告げた。後再び香川縣に奉職し日本美術協會員となり各種の品評會等に於て褒狀銀牌を受けたことが屢々ある。又會て天賞堂懸賞圖案募集に應じて優等賞金千圓を贈られた。茶及子規派の俳句を好み且つ巧みである。

現住所

渡邊霞亭　ワタナベカテイ（小）

名は勝、霞亭の外に綠園、黒法師、碧瑠璃園等の別號をもつてゐる。元治元年十月二十日名古屋市主稅筋に生れ、別段學歷とては無いが多讀多作の結果其の作頗る平明輕快であつて一般の興味を唆るに十分である。現今速筆多作家の隨一として知られてゐる。これも多作家の長田幹彦氏が同氏を訪問した時の話も名高いものである。氏は諸新聞

の記者生活を經て大阪朝日新聞社會部長となつたが、大正八年退社し、現に同社の客員となつてゐる。「松風村雨」「渡邊華山」「楠正成」「弘法大師」「金扇」「水戸黄門一代記」「由井正雪」「石井源藏」「小三金五郎」「殘月」「白珊瑚」「新比翼塚」等の外歷史小說、家庭小說の著頗る多く、殆んど枚擧に遑ないほどである。氏はまた頗る藏書家であつて、近松ものゝ古淨瑠璃本のみでも實に多くの珍本を藏してゐる。氏は辯また筆のやうに巧であつて講演にも長じてゐる。又詩も作り、

芳山是峻笠山雄、　至處春風旭日紅、
萬朶櫻花三尺鐵、　神州正氣在二此中一。

のやうに特に絕句を巧にする。

現住所　大阪玉造唐居町

渡邊清　ワタナベキヨシ（小）

明治二十八年七月十六日大阪南區高津四番町に生れ、大阪明星商業學校を經て、早稻田大學に入り英文科に學んだ。「死を超ゆるものへ」「或の心の記錄」の著の外評論に「明暗の街の作者に」「ブラスコ・イバーニエス傳」「革命主義者と理想主義者との道」感想「劈られた花と澄める青空」等の作を出してゐる。

現住所　東京市本鄉區本鄉五丁目

故渡邊金秋　ワタナベキンシユウ（畫）

美濃の人。通稱は鍬太郎といひ十歲の時狩野派の武光桂園に就いて學び、十八歲の時上京して宮本三平に就學した。十八年より二十五年まで帝國大學に雇はれ動植物寫生に從事し、又畫手本數種を編纂した。二十二年明治美術會に入り、次いで福地復一と日本圖案會を起し、三十八年一月年四十六で病歿した。

渡邊公觀　ワタナベコウカン（畫）

名は耕平、明治十一年一月大津市に生れ、森川曾文に學び、後月協會員となり、二十四年日本繪畫展覽會、四十年東京博覽會、四十二年東京美術及工藝品展覽會等で褒狀、四十三年東京美術工藝品展覽會で三等賞を得、文展へは第一回に「進言」第八回に「蹴飼時」第九回に「夕茜」第十回に「志摩の月」を出して何れも好評を博した。

現住所　京都市西洞院丸太町西

渡邊湖畔　ワタナベコハン（歌）

佐渡の富豪の若主人で道樂に歌を詠んでゐる。大正五六年頃歌集を自費出版したがよい歌があつた大正十年「若き日の祈禱」を第二歌集としてアルス社から出した。大正六年以降の作で四百三十餘首を收めてゐる。與謝野寬氏は「著者自身の內にある愛と美と眞實と其の三位一體の神に捧ぐる哀慕禮讚のこゑならぬはなし」と評し、同夫人晶子女史は「主の前に淸き祈を忘れぬも人を烈しく思へるがため」「若き子が皐月ばかりの野に出でゝ摘める眞白き薔薇の花束」といふ序歌を書いてゐる。「神による淨き命を寂しむもわかきわが身の病ならまし」「吾をして常にさびしく生かしめよ寂しきにのみ聖父を思へば」等は卷頭の歌である

現住所　新潟縣佐渡

故渡邊沙鷗　ワタナベサオウ（書）

東京の書家、文久三年十二月二十一日尾張國名古屋に生れた。名は周、字は士顯、通稱は沙鷗、又通じて號としてゐる。別に飛淸閣主、淸華道人等の號がある。氏少時書法を水谷魯堂に學び、後恒川宕谷に就いた。又漢籍を淺田藤山及佐藤牧山に學び、繪畫を神保木石に問うた。宕谷の弟子千人ばかりあつたが氏は之を助けて書法を授けた。時に年僅かに十六。宕谷は子が無いので氏を拔いて嗣子となさうとしたが實弟の喪にあつて自家繼承のために果さなかつた。後上京して日下部鳴鶴の門に入つた。一日鳴鶴從容として語つて曰ふのに方今の書家各擅長がある。之を兼ねれば一世に雄視することが出來る、苟も書道の奧義を究めようと欲するならば宜しく諸家を歷訪して聞見を博め諸說を取捨して一家の見を立てよと。蓋し鳴鶴翁

は氏に許すところがあつたのであらう。後中林梧竹、巖谷一六及其他の說を聞き併せて石碑法帖を見、元明より遠く六朝漢魏に遡り諸體の文字に習熟した。氏は又鐵筆に長じ刻するところ古勁にして趣が多い。室春瀾も亦能書家で聲名がある。氏は大正五年十月十五日年五十四歲をもつて病歿した。閨秀詩人米澤順子は氏の長女である。

故渡邊小華 ワタナベシヨウカ（畫）

南宗畫家渡邊華山の第二子。名は諧。字は韻鄕、舜次と稱し、父の遺風を傳へて花鳥を畫くに妙を得た其の書更に妙を極めてゐる。明治二十年年五十三で病歿した。門下に大橋翠石等がある。

故渡邊省亭 ワタナベシヨウテイ（畫）

名は良助、家は代々佐竹侯の廻船問屋であつた。氏は嘉永四年十二月江戸神田南佐久間町に生れ、十六歲の時菊池容齋の門に入り、後、父の歌道の友人である渡邊光枝の跡を繼いで渡邊姓を冒した。畫は晩年まで容齋に師事したが畫風は必ずしも師のあとを繼承するものでは無かつた。多方面に優れてゐたがとりわけ花鳥を得意として大に名譽を博した。明治十一年佛國巴里萬國博覽會に妙技賞牌を得、十六年、和蘭萬國博覽會で銀牌、三十七年、米國聖路易萬國博覽會で金牌を得る等、受賞頗る多い。交友少く主義として弟子も取らなかつた。大正七年四月三日東京淺草三筋町に逝いた。年六十八。省亭の「花鳥畫譜」は廣く行はれて後進の大に參考となつてゐる。

渡邊審也 ワタナベシンヤ（畫）

明治八年十二月岐阜縣大垣町に生れ、明治二十七年明治美術會洋畫教場第一期を卒業、後同會自由研究科に三年間通學し、更に淺井忠に就て五年間學んだ。文展へは第三回に「供まち」を出し、外に「富士の裾野」「濱の風」等の作がある。文部省囑託となつて教科用圖畫を擔任してゐる。又太平洋畫會々員である。

現住所 東京府下下澁谷三一五

渡邊水巴 ワタナベスイハ（俳）

名は義、明治十五年六月十六日東京淺草區小島町に生れ、日本中學校を半途で退學し、同三十三年初めて俳句を試み、翌三十四年內藤鳴雪翁の門に入り、三十九年以降主として高濱虛子氏の選評を受けて今日に至つた。氏は「二六」「國民」「日本」「ホト、ギス」「文庫」等に主として投稿してゐるが、其の句は「水巴句集」「ホト、ギス雜詠集」等に揭載されてゐる。氏の父は花鳥畫家として有名なる渡邊省亭氏である。

苗賣が過る日影の葭戶かな
母か連れし子のいとほしや菖蒲打
山の邊にさはるものなき幟かな
夏川や樓の灯映る增り水
水增さる北上川や夏の月

現住所 東京市赤坂區丹波町三五

渡邊桑月 ワタナベソウゲツ（書）

東京の書家、福島縣伊達郡川俣町の人、弘化三年十二月生れた。諱は淸綱、桑月は其號、別に眞風舍又子光の號がある。幼時より風流韻事喜んで夙に學を柳生寬齋及び藤原貞秋に修め、書は子昂其他の古法帖を學んで大に書法を窮め遂に一家をなした。氏は又繪畫、和歌、俳諧等に志し屢々海內を漫遊して諸家を歷訪し研鑽を怠らない。從つて其技大に進んで行くとして可ならざる天才を各種の方面に發揮してゐる。門下として書道を修める者數百名ある。

以前住所 東京市淺草區公園地第六區百七號

渡邊長男 ワタナベナガオ（彫）

彫刻家、明治七年四月大分縣竹田町に生れ、山田鬼齋に學び、後東京美術學校に入つて明治三十二年彫刻科を卒業した。東京彫工會其他で屢々受賞し、文展へは第八回に「同盟罷工」第十回に「同

性」「膽」を出した。主なる製作には「廣瀬中佐及杉野兵曹長銅像」「井上侯銅像」印度バロダ王依囑の「大佛像」等がある。
門下に川崎繁夫、高橋祐像等がある。斯界の大家朝倉文夫は氏の實弟である。
現住所 東京府下日暮里一一〇〇

渡邊未灰 ワタナベミカイ（俳）

名は正男、明治二十二年十一月十一日東京淺草區東三筋町生れ、大倉商業學校を卒業したる後東京市役所に入り吏員となつた。十七歳の時岡本癖三醉氏の指導を受けて俳句を始め、二十四歳の時東京毎日新聞の俳句欄を擔當して二十八歳まで繼續した。俳諧雜「のつち」「鈴蘭」等を發行したことがあるけれども長く續かなかつた。氏の句は「日本」「國民」「時事」「東京毎日」「懸葵」「あられ」「ホトヽギス」「浮城」「ましろ」「鈴蘭」等に投稿し、著書としては「未灰句集」を出してゐる。

傘出入る椿深さに醫院かな

故渡邊與平 ワタナベヨヘイ（畫）

長崎の人。本姓は宮崎。明治三十九年京都市立美術工藝學校を卒業し、後、東京に出て太平洋畫會研究所に入り、閨秀洋畫家渡邊文子と結婚した。コマ繪を以て知られ、文展には第二回に「金さんと赤」を出し、第四回に「ネルのきもの」を出して三等賞を得た。大正元年六月年僅かに二十四歳で夭歿した。

故渡忠秋 ワタリタヽアキ（歌）

近江の人、初め新太郎安雄と言ひ、楊園又は桂蔭と號し、和學を善くして江戸に住み、桂園門下の秀才であつた。宮内省に出仕して居たが明治十四年六月一日歿した。年七十、「讀史有感集」、「先入抄

終點に空らの電車や花の風
畫火事は櫻の中の一軒家
一軒家灯す萩野の小雨かな
現住所 東京麻布區宮村町八〇

研哉抄」、「桂蔭集」等の著がある。

櫻花さか行く御世の春風に老樹の松もいろまさりけり
君が代のゆたかに立てる大空の春の袂は霞なりけり
藤波の花の盛にまかセたる松の心の高くもあるかな
千早振神代ながらの天地に人のまことのたゝさらめやは

渡平民 ワタリヘイミン（劇）

名は保次郎、明治三十一年七月七日東京下谷區金杉大町一七に生れ、京華中學校を經て早稻田大學政治科に入り、後文科に轉じて中途退學し、「下谷自治新報」を經營し、名古屋の日刊新聞「大公論」の編輯主任となり、研究座脚本主任等になつたことがある。氏はまた一時社會運動に加はり拘留されたこと數回ある。現に「舞臺藝術」の同人として民衆劇を執筆してゐる。脚本「監獄部屋」「失職者」の外クレーグの「歐米劇史論」「近代一幕物選集」「新劇原論」「世界童話劇選集」ショウの「新聞切抜」ゴルキイの「叛逆者の母」及び「歐米演劇史潮」等の著譯がある。
現住所 相模國大磯山王町四六〇岡田別莊內

和辻哲郎 ワツジテツロウ（評）

明治二十二年三月一日兵庫縣神崎郡穗野村に生れた。姫路中學、一高を經て四十五年東大文科大學哲學科卒業。新進論客としてその批評の銳敏と文章の精巖とを以つて認められた人である。氏が時評の筆を執り初めたのは近くの事であるが篤實なる少壯學者としては夙に聞えた人で、その浩瀚なる「ニイチエ研究」や「ゼエレン・キエルケガールト」「偶像再興」「古寺巡禮」の如きは隨分讀まれたものである。大正七年春頃より創作の方面に手を著けて世人の注意を集めてゐる。獨特なる創造的天分について、これを的確に明瞭に指示してゐる原作は甚だ床しい著述であるが、譯筆また之に

ふさはしく所々に註釋を挿んでゐるのは譯者の深切である。大正八年東洋大學教授に就任して日本倫理史を擔當してゐる。最近田中秀央氏との共譯「希臘天才の諸相」は先づ希臘の國家觀念や希臘人の憂欝について論じ更にソホクレスを論じ次に希臘文學に於けるロマンテイシズムの曙光に說き及ぼしてゐる。大正十四年度より京都大學文學部の講師となつて「道德史」の講義をすることになつた。

現住所　東京府下中野町一〇一八

明治大正　文學美術人名辭書終

補遺

宗星石　ソウセイセキ

名は重望、星石はその號。慶應三年一月二十七日對馬嚴原に生れ、大倉雨村（僧鐵翁に學んで一家をなしたる明治の南宗畫家で、明治三十二年六月歿した）に就いて南宗畫を學び、其枝堂奥に達した。同派に人なき今日小室翠雲、松林桂月、佐藤紫畑等の諸大家と共に重きをなしてゐる。日本美術協會々員、東京彫工會名譽會員。伯爵。

現住所　東京市下谷區二長町五一

那珂梧樓　ナカゴロウ

名は通高、梧樓はその號。盛岡藩の儒者。初め江幡五郎と言ひ、後に那珂梧樓と改めた。性頗る博覽多識、經典佛書諸子百家より音樂舞曲俚諺巷談に至るまで通じないところがないが、中でも最も國學に通じてゐた。氏は父の業としている醫を好まないで安積良齋森田節齋等の諸大家に就いて儒學を學んだ。明治元年伏見の役に奥羽列藩の謀に與り、後終に縛について四年間幽囚の身となつた。氏は文章の精練を以て知られ、又詩歌をよくした。赦後刑餘の身であるからといふので世に立つを好まなかつたが、唯文部省の委囑を受けて小學校讀本等の校閲をなして、國家教育の事業に貢献する所があつた。

著書數種あつたが、中でも「文法捷徑」は明治十四年に通世氏之を印刷に付し、「はゞかりながら」は二十五年に十文字信介氏之を出版し、「旅の苞」は二十六年門人佐藤半次郎氏によつて上梓された。又榊原琴洲と共に「古事類苑」の編輯に從つたが、業半ばで明治十二年五月一日病歿した。年五十三。故東京高等師範學校教授文學博士那珂通世氏は、實に氏の門下であり養嗣子であつた。

西村五雲　ニシムラゴウン

明治十年京都に生れ、始め岸竹堂（明治初期の岸

駒派の畫家。岸連山の門に入り後その養嗣子となり、晩年帝室技藝員となつた。)に就いて岸駒派の畫風を學び、其の歿後竹內栖鳳に就いて四條派の蘊奥を究めた。最も動物畫を得意とする。文展には明治四十年十月その第一回に「白熊」を出し、好評を博して三等賞を克ち得、續いて「牧場の夕」「秋興」等を出して入選したが、其後長く病床にあつて彩筆を執らなかつた。

現住所 京都市新烏丸切通下る

堂本印象 ドウモトインシヨウ (畫)

本名は三之助、印象は其の號。明治二十四年十二月二十五日京都市に生れ、後京都市立繪畫專門學校に入つて其の日本畫部を卒業した。作品の主なるものは帝展第一回に「深草」同第二回に「西遊記」「柘榴」の二點を出して好評を得、同第三回に「調鞠圖」及び「夾山映雪」の二點を出品して、前者は特選となり大に其の筆の非凡なるを認められた。同第四回に「訶梨帝母」即ち鬼子母神の像を出すに及んで、其の清新にして獨得の筆技を認められ名譽の推薦となり、大正十三年以來擧げられて帝展審査委員となり斯界の重鎭となつた。尙作品は右の外大正十一年東京府主催の平和博覽會に「猫」を出品して金牌の首席となり、大正十二年大阪每日新聞社主催展覽會に「維摩」を出品して斯界の注目を惹き、帝展第五回に「乳の願ん」「故父」の逸作を出して愈々その確實性を認められ、福田平八郎氏等と共に京都畫壇の將來ある青年畫家と目せられてゐる。

現住所 京都市祇園下河原四六三

吉田三郎 ヨシダサブロウ (畫)

明治二十二年五月二十五日金澤市長町に生れ、先づ青木外吉に就いて研究し、又明治四十一年石川縣立工業學校卒業後東京美術學校に入學して、明治四十五年その彫刻科を卒業した。文展へは「たちんぼ」「無題」「潮騷」「岩吉」「執着」「波」「熔鑛爐」等を出して、何れも好評を得、文展第十二回に「渾」、帝展第一回に「老坑夫」を出品してともに特選となり、帝展第二回に「殘照」を出品して遂に推薦となつた。文展帝展以外では東京府美術及美術工藝展覽會に彫塑を出品して銅賞を、大正博覽會に彫塑「濁り」を出品して褒狀を得た外帝大其の他に等身以上の銅像を澤山製作してゐる。尙氏は平和博覽會の審査官となつたことがあり、第四回以來引續いて帝展審査委員にも擧げられてゐる。

現住所 東京市外田端一〇五

明治大正文學美術人名辭書

名と號の索引

〔ア〕

哀果（土岐）……五五三
哀歌（尾瀬）……一八六
愛山（山路）……八六〇
靄山（谷口）……五二六
愛正（野村）……六四二
愛造（横關）……八七九
愛竹（小林）……三四四
赤彦（島木）……四〇九
秋香（中村）……六〇〇
晶子（與謝野）……八八二
槃（武田）……四九六
晃（前田）……七三四

彰（仲小路）……五八七
彰（植松）……九六
城（山崎）……八五七
城（坂崎）……三六七
明人（清浦）……二七九
阿佐緒（原）……六七三
麻太郎（宮森）……八〇三
朝鳥（加藤）……二一四
安宅（戸川）……五五三
篤夫（増田）……七五〇
敦子（稅所）……三五六
厚（海野）……一一〇
綾子（中原）……五九八
有明（蒲原）……二五五

有經（植松）……九六
有年（加藤）……二一四
亞浪（臼田）……一〇〇
澁（内藤）……五六八
濱（上原）……九五
晏川（狩野）……二三四

〔イ〕

猪一郎（德富）……五五五
爲王（松浦）……七五六
爲（福井）……七〇一
幾三郎（三宅）……七九三
幾太郎（西田）……六六二
幾之助（白瀧）……四二九

多馬生（有島）……三
伊作（西村）……六二四
勇（吉井）……八八七
爲山（下村）……四二四
委山（村上）……八〇六
殿雄（荻原）……一七四
磯夫（加藤）……一八〇
磯子（服部）……六三
至（田邊）……五一三
格（田邊）……六三五
一雨（宮崎）……七九六
一鶯齋（豐原）……五六六
一雅（沼田）……六三〇
市子（神近）……一三〇
一堂（納谷）……六三三
一鷹（織田）……一八七
一葉（樋口）……六八〇
一六（巖谷）……八七

〔ウ〕

右一郎（小倉）……一七九
一郎（湯淺）……八七四
一桃齋（月岡）……五三三
一轉（杉山）……四四一
一平（島林）……四一六
一平（岡本）……一六一
一碧樓（中塚）……五九二
糸重（橋）……五〇六
糸子（神中）……四三
猪之吉（久保）……一四
伊之助（中西）……一四
萎文（渡邊）……五九四
巖（松本）……七六八
磐根（安部井）……一二五
岩三郎（沖野）……一七三
印象（堂本）……九二四
宇一郎（田中）……五〇八
迂外（小泉）……三一七
雨郷（内藤）……五七一
雨江（鹽井）……四〇四
雨谷（川村）……三五三
雨山（大瀧）……一三三
雨山（白井）……四二七
雨山（長尾）……五七九
雨廣（大熊）……一三五
雨雀（秋田）……五
雨情（野口）……六三五
烏水（小島）……三三〇
芋錢（小川）……一七〇
歌子（下田）……四三
空穗（窪田）……二九四
宇之吉（服部）……六六一
宇之助（都路）……五三七
鵜平（鹽谷）……四〇三

〔エ〕

英一（松村）……七六六
榮一郎（岡）……一五二
羽峯（南疊）……六一八
馬治（金子）……二三
芸（平福）……六九四
芸（田崎）……五〇二
海（米原）……八九七
雲海（尾形）……一五五
雲山（花房）……六六七
雲樵（池田）……三八
雲驅（間中）……七七二
雲坪（長井）……五七三
雲邦（植竹）……九一
雲峰（篠田）……四〇〇
雲來（石橋）……五一
雲嶺（垣内）……二〇二
榮一郎（綱島）……五四〇
永海（佐竹）……三八一
英喜（都鳥）……四四二
永機（老鼠堂）……一八七
映丘（松岡）……七一四
永湖（佐竹）……三八〇
榮作（長谷川）……六六三
英作（和田）……九〇四
永治（池田）……三九
英次（吉川）……八八九
英舟（加藤）……二一四
英松（和田）……九〇四
永洗（富岡）……五六〇
永濯（小林）……三四五
榮達（小山）……二五三
英忠（河合）……八二七
永孚（元田）……六九五
英朋（鰭崎）……五四〇
永邦（橘本）……六六九
永陵（佐竹）……三八一
悅（鈴木）……四四二
越堂（尾竹）……一八七
衛彦（藤澤）……七一四
煙崖（荒波）……三二
圓玉（浪上）……六六五
遠湖（内田）……一〇二
煙村（小川）……一七
炎天（岩動）……五七
燕郎（鈴木）……四四二

〔オ〕

鷗外（森）……八二
櫻魂子（安齋）……二六
櫻溪（中村）……六〇一
甕江（川田）……二四一
櫻谷（木島）……三四四

鷗二（伊藤）……六一
櫻泉（小牧）……三四八
鷗村（森）……八二三
櫻痴（福地）……七〇五
鷺塘（武田）……四九六
鷗波（富田）……五〇八
汪洋（正富）……五六一
王蘭堂（長井）……七四七
興功（栗田）……五七三
乙字（大須賀）……三〇五
乙男（藤井）……一二九
於菟吉（三上）……七七一
乙羽（大橋）……七七七
鬼太郎（岡）……一四五
溫亭（篠原）……一五二
折柴（瀧井）……四〇六
溫（鹽谷）……四八三
華香（都路）……五三
華山（茅原）……五三
臥城（吉野）……二三三
霞城（松田）……八九二
佳水（竹貫）……七六二
和郎（廣津）……四九九
一夫（加藤）……六九七
瓦全（庄司）……二一六
華邨（鈴木）……四四七
花袋（田山）……四四三
花蝶樓（豐原）……五三
勝衛（柴田）……五六六
勝二（藤岡）……四〇三
勝次郎（中村）……七一三
勝藏（高橋）……六〇二
勝南（陸）……四七一
勝之助（仲田）……二八三
勝廣（香川）……五八八

〔力〕

華（郁）……二〇
華岳（村上）……二七
華庵（關澤）……四二三
華鶴（丹羽）……六二八
華舟（畔柳）……六五〇
華關（橋本）……七二三
芥舟（畔柳）……三一三
介春（加藤）……二一五
海石（村田）……七一一
快太郎（坂田）……三〇五
介堂（山田）……八六二
桃南（森）……八六三
佳園（水谷）……七七五
蕉外（小山內）……一四四
花外（兒玉）……一八四
花外（川上）……一五三
花崖（廣田）……六九七
介春（加藤）……六六七
海石（村田）……六六七
快太郎（坂田）……三〇七
介堂（山田）……六六七
桃南（森）……六六七
佳園（水谷）……六六七
學圃（福井）……六六七
鵞峯（平沼）……六六七
鵞友（庄田）……六六七
岳陵（中村）……六六七
角戀坊（高木）……六六七
禾原（永井）……六六七

蝸牛（今戶）……八〇
學鷗（松田）……七二
學海（依田）……八九四
確太郎（中桐）……五八二
格堂（赤木）……四
蘿堂（松原）……七六五
樂堂（山崎）……八九八
鵞年（田）……五四九
確治（石川）……四五
岳峰（田南）……五一六
覺醉（酒井）……三六三
花蹊（跡見）……二三
學圃（福井）……七〇一
鵞峯（平沼）……六九一
鵞友（庄田）……四二七
岳陵（中村）……六〇三
角戀坊（高木）……四六〇
禾原（永井）……五七三

勝平（廣瀨）……六九六
克巳（三宅）……七九三
勝美（黑板）……三〇七
勝彌（馬場）……六六七
克之（鍋井）……六一四
可亭（岡本）……一六二
霞亭（渡邊）……九〇七
柯亭（武井）……四八七
和亭（瀧）……四八四
果亭（兒玉）……三四〇
霞洞（武居）……四九七
鷺堂（小野）……
鼎（山本）……八七〇
兼次郎（金田）……二三三
かの子（岡本）……一六二
荷風（永井）……五七四
霞峰（片桐）……二〇九
霞峰（川北）……二三七

猫邦（橋本）……六五〇
龜男（北尾）……二六三
龜雄（千葉）……五二八
襄臣（林）……六七二
龜之助（水守）……七八八
花笠（山口）……八五六
花菱（川村）……二五四
嘉六（宮地）……八〇〇
寬（菊池）……二五六
寬（日下）……二八一
寬（新井）……一八
贋阿彌（杉）……四三八
貫義（山名）……八六八
貫魚（守住）……八二九
寬齋（寬齋）……八二六
觀山（下村）……四二五
寒山（山田）……八六三
柑子（荻山）……八二九

完二（邦枝）……二八九
關雪（橋本）……六五一
含雪（山縣）……八五三
鑑三（内村）……一〇五
貫堂（河田）……二四二
寬畝（荒木）……二一〇
寬方（新井）……一八
幹明（石川）……四五
觀陽（金森）……二一〇

〔キ〕

毅（三島）……七八
葵（生田）……三三
輝（高倉）……四六一
紀一（新井）……一九
毅一（西）……六三
喜一（田中）……五〇八
機一（老鼠堂）……九〇〇

義海（山名）……八六八
菊外（風光堂）……七〇〇
菊子（小寺）……三四一
掬香（千葉）……五二七
菊洲（玉手）……五三一
掬汀（田口）……四八六
紀元（中川）……五八〇
鬼齋（山田）……八六三
起作（岡田）……一五六
岐山（木蘇）……二六二
雄子郎（石島）……四四一
喜舟（野村）……五三
義象（池邊）……四八六
鬼城（村上）……八〇七
喜二郎（太田）……一一三
其水（竹柴）……四九二
義生（高桑）……四六一
其石（鷹田）……四六六

吉雨（帆足）……七二四
吉二（中戸川）……五九四
吉藏（中村）……六〇二
吉太郎（池邊）……四一
吉堂（内海）……一〇五
綺常（岡本）……一六三
喜八（尾崎）……一八一
義平（平塚）……六九一
貴鷹（伊藤）……六一
君尾（中西）……二七五
久一（竹内）……四八八
泣菫（蒲田）……四四六
久太（柚木）……八七七
臼川（野上）……六三三
九浦（野田）……六三九
九峰（坂田）……三六七
九峰（高島）……四六三
鏡花（泉）……五六

清綱（黒田）……三一一
清輝（黒田）……三一三
喜代之助（宇野）……一〇八
御風（相馬）……四五六
清丸（川合）……二五三
清滿（鳥居）……五六八
虛明（塚本）……五三一
桐園（彈）……五四四
均一（天岡）……一七
欽一郎（石川）……四六
金右衛門（山元）……八七一
錦吉郎（本多）……七三一
銀月（伊藤）……六一
近江（小牧）……三四九
菫哉（宮林）……八〇一
錦山（矢土）……八四五
金二（土田）……五三八
金重（吉田）……八八九

玉城（益田）……七五一
玉泉（望月）……八一五
玉田（村瀨）……八一〇
玉堂（川合）……二五一
玉輔（坂田）……三六八
玉葉（栗原）……三〇六
喜代子（大村）……一四九
潔子（中原）……五九九
巨口（武定）……五六七
清貞（鳥居）……五六七
清（中島）……五六五
清（佐藤）……三八二
清（渡邊）……九〇八
渙（江口）……一一三
虛子（高濱）……四七五
御舟（速水）……六七三
清忠（鳥居）……五六七
清親（小林）……三四八

玉江漁人（松林）……七六五
玉枝（跡見）……一四
玉秀（戸田）……五五八
玉章（川端）……二四八

曉齋（河鍋）……二四六
竟山（山本）……八七一
恭次郎（萩原）……六四八
恭三（松本）……七六九
京村（津村）……五四六
杏村（土田）……五三七
橋村（矢野）……八五〇
京太（水木）……七八四
仰天子（武田）……四九七
清方（鏑木）……三三
清雄（川村）……二五四
旭宇（新岡）……六一九
玉淵（高橋）……四七三
曲江（町田）……七五三

琴石（森）……八二六
琴遷（青柳）……三
金遷（久保田）……二九六
金太郎（運塚）……五二五
欽堂（黒木）……三〇八
金之助（夏目）……六一三
金風（渡邊）……九〇八
金風（長井）……五七六
金鳳（望月）……八一六
金羅（夜雪庵）……八四二
金陵（石井）……四二

〔ク〕

愚儒（山内）……八五二
邦于（山田）……八六三
駒村（大曲）……一四七
國四郎（満谷）……七九〇
邦助（橋本）……六五三
國太郎（寺松）……五四八
國周（豊原）……五六六
國峯（歌川）……一〇一
句佛（大谷）……一三四
苦味（松本）……七六九
久艮岐（坂井）……三六三
鞍馬（大瀧）……一三一
久流美（安川）……八三九
紅蓮洞（坂本）……三六九
黒石（大泉）……一二九
黒法師（渡邊）……九〇七
黒人（梅本）……一一〇
久和代（埴原）……六六七
薫園（金子）……三一〇
薫造（南）……七九一

〔ケ〕

啓（中山）……六〇八
啓（荒江）……二一〇
經一（近藤）……三五四
慶一郎（免取）……八一五
桂一郎（久米）……三〇〇
敬宇（中村）……六〇二
瓊音（沼波）……六三〇
桂花（桂花園）……三一五
敬岳（西井）……六三〇
桂巖（澤口）……七八八
敬義（中田）……五八九
桂月（松林）……七六五
桂月（大町）……一四七
契月（菊池）……二五七
警軒（坂田）……三六八
敬香（大江）……二一〇
桂谷（下條）……三一五
桂舟（武内）……四八八
敬所（中井）……五七七

敬助（柳）……八四八
桂仙（池田）……三九
溪仙（富田）……五六一
鷄村（牛田）……九九
敬中（山田）……八〇三
慶中（豊道）……五六七
景年（今尾）……七九
敬方（竹田）……四九七
袈裟美（佐野）……三九一
月郊（高安）……四八一
月耕（尾形）……一五六
月山（高橋）……四七三
月舟（原）……六七四
月杖（内海）……一〇六
月三（尾形）……二五六
巌村（久津見）……二八七
月斗（青木）……一
月畝（荒木）……二一
月瀬（森田）……八二九
憲吉（井東）……六三
健吉（犬養）……六九
健吉（柳澤）……八四八
健吉（畠山）……六五八
源一郎（安達）……一一
剣花坊（井上）……七一
憲吉（富本）……三四九
健吉（小松原）……三四一
健吉（小寺）……七二八
源吉（細田）……四七三
源吉（高橋）……三三〇
獻吉郎（兒島）……八三六
健月（矢澤）……三八三
硯湖（佐藤）……八〇五
健作（青木）……二
謙次（原田）……六三五
支耳（濵川）……四〇七
剣書閣主人（中林）……五九七
紘二郎（吉田）……八九〇
謙次郎（德富）……五七七
健二郎（塚原）……五三一
剣西（岡田）……一六八
紘聲（井田）……五九
鍵藏（森川）……八二四
謙三（和田垣）……九〇五
謙澄（末松）……四三五
硯田農夫（田崎）……五〇三
剣堂（細田）……七二八
健堂（横山）……八八一
乾堂（小曾根）……三三九
殿翼（桑木）……三一三

〔コ〕

胡夷（澤村）……三九二

梧陰（井上）……七一
恒（大給）……一七二
洗（新井）……二九
甲（長尾）……五七九
鴻（比田井）……六八二
剛（川田）……一四二
耕一（畑）……六五八
浩一路（近藤）……三五五
晃一郎（宮原）……八〇一
黄雨（川村）……三五四
甲羽（福島）……七〇三
香羽（辻）……五三四
香雨（木村）……二七五
香塢（進藤）……四三三
光雲（高村）……四七八
更園（星野）……七二五
耕花（山村）……八六八
光華（土居）……五四九
香外居士（松林）……七六五
公観（渡邊）……一七二
香蟯（谷口）……五二六
廣業（寺崎）……五四七
廣湖（高橋）……四七三
好古（藤岡）……一四二
浩々歌客（角田）……六五八
香國（土居）……三五五
豪谷（衣笠）……八〇一
鴻齋（石川）……三五四
孝作（瀧井）……七〇三
康算（深田）……五三四
浩司（近松）……二七五
甲之（三井）……四三三
浩二（宇野）……四七八
幸次郎（福士）……七二五
孝次郎（杉森）……八六八
耕石（服部）……六六二
耕石（中西）……五九五
黄石（岡本）……一六三
香雪（前田）……七二五
光宣（山岸）……八五六
廣川（高見）……四七七
弘三（横井）……八七九
黄村（向山）……八〇三
香村（齋藤）……三五八
江村（淺田）……九
篁村（饗庭）……一
貢太郎（田中）……五〇九
孝太郎（長原）……五九九
耕冲（上田）……九一
香亭（中根）……五九六
江東（千葉）……五二八
耿之介（日夏）……六八五
甲之助（三井）……七八九
桁平（赤木）……

晃（廣島）……六九五
光明（石川）……四六
浩祐（藤井）……七一〇
紅葉（尾崎）……一八三
廣陽（大村）……一三七
光瑞（石崎）……五一
廣陵（森）……八二六
紅綠（佐藤）……三八三
五雲（西村）……九二五
五岳（平野）……六九三
孤雁（戸張）……五九九
孤雁（吉江）……八八八
古玩（在原）……二五
穀觀（木森）……二六三
國觀（尾竹）……一八七
克三（堀木）……七三〇
古徑（小林）……三四六
孤月（中村）……六〇四
孤月（西郷）……
梧月（奈倉）……
孤軒（三宅）……
古香（蔦）……
五工（島田）……
湖山（小野）……
湖山（黒田）……
古城（栗原）……
湖處子（宮崎）……
楠（澤木）……
枯川（堺）……
孤村（片山）……
古竹（平野）……
梧竹（中林）……
孤蝶（馬場）……
孤島（中島）……
悟堂（中西）……
古洞（山中）……

〔サ〕

齊（萬造寺）……七七四

零緒（彈）……五二四
小虎（川崎）……三三八
湖南（内藤）……五六九
湖畔（渡邊）……九〇九
梧平（石丸）……五五
五峯（阪口）……三六六
駒造（澤口）……七八九
小彌太（江原）……二四
五葉（橋口）……六四八
惟秋（磯野）……五八
五郎（大關）……一三五
梧樓（那珂）……九二五
五呂八（田中）……五一〇
毅（井上）……七一
饑（稻葉）……六九

砕花（富田）……五六二
柴舟（尾上）……一九四
犀水（坂井）……三六四
犀星（室生）……八一二
在泉（原）……六七四
採茶庵（行山）……八七七
犀東（國府）……三二六
左衛門（吉野）……八九三
沙鷗（渡邊）……九〇九
榮（大杉）……一三〇
榮（岡野）……一五九
左京（河上）……二三六
朔（堀江）……七二九
作衛（高橋）……四七二
作次郎（加納）……二三四
作次郎（大久保）……一二四
作太郎（藤岡）……七一三
朔太郎（萩原）……六四七
小波（巖谷）……
貞雄（安成）……
貞雄（戸川）……
貞雄（椿）……
幸雄（矢野）……
幸彦（大野）……
曉（普門）……
寅篤（武者小路）……
三郎（岡田）……
三郎（吉田）……
三郎助（岡田）……
沙夢樓（太田）……
殘花（戸川）……
三溪（菊池）……
三五郎（松原）……
三山（池邊）……
三子（山田）……
三叉（竹越）……
三洲（長）……三五九
三造（和田）……九〇五
三太郎（川上）……二三六
彭之助（阪本）……三七〇
三昧（宮崎）……七九七
山蘭（和田）……九〇六

〔シ〕

思案（石橋）……五二
子雲（羽田）……六五九
紫影（藤井）……七一一
紫烟（佐藤）……三八四
四海（北村）……二六六
子規（正岡）……七四三
式部（高畑）……四七五
時雨（長谷川）……六五三
時敬（横井）……八七八
繁雄（山下）……八六一
重雄（舟木）……七二一
稠夫（太田）……一二三
重綾（門脇）……二一九
繁吉（宮崎）……七九九
繁二郎（坂本）……三六九
繁俊（河竹）……二四三
重信（舟木）……七三三
茂吉（齋藤）……三六〇
蕃（葛原）……二八五
繁（青木）……二
思軒（森田）……八三〇
四紘（小林）……三四六
紫紅（山崎）……八五九
史光（霜田）……四三三
士行（坪内）……五四四
柿紅（岡村）……一六〇
紫紅（今村）……八一
史山（猪狩）……三三
紫山（高安）……
紫山（川崎）……
止水（長原）……
靜雄（永代）……
靜雄（中澤）……
曉子（若松）……
子青（織田）……
紫竹（水島）……
しづ（素木）……
しづ（上野山）……
十黄（小田島）……
十洲（細川）……
寅三（白石）……
十畝（荒木）……
芝田（小坂）……
子柏堂（加藤）……
柴二（草野）……
紫葉（柳原）……
紫明（中村）……六〇三
四明（中川）……五八〇
雀庵……四二五
雀志（雪中庵）……四五三
勺水（日下）……二八一
酒竹（大野）……一四四
袖海（館森）……五〇七
秀湖（白柳）……四三一
修吾（三浦）……七七四
秋江（近松）……五二四
重昂（志賀）……三九五
秋骨（戸川）……五五三
周山（飛田）……六八四
修二（大槻）……一三八
澁柿園（塚原）……五三一
秋渚（磯野）……九八
秋水（岡倉）……一五三
秋水（松田）……七六三

秋聲（小早川）……三四
秋聲（德田）……五五四
秋生（山内）……八五三
秋草（小池）……三一七
集藏（高田）……四六七
周太郎（三宅）……七九四
修太郎（南部）……六一七
重太郎（和田）……九〇七
重太郎（黒田）……三一三
秋蘋（金井）……二一九
秀畝（池上）……三八
周峯（福原）……七〇八
秀邦（橋本）……六五三
周六（黒岩）……三〇九
淑（中根）……五九六
種香（岡村）……一六一
手渚（鎌原）……三一九
朱泉（匹田）……六八〇
種竹（本田）……七三一
純（田中）……五
純（石原）……五四
純（菊池）……二九八
潤（岡本）……一六六
潤（川田）……二四四
俊一（松本）……七六九
潤一郎（星野）……九〇七
潤一郎（谷崎）……三一三
春雨（篠原）……四〇一
春雨（中村）……三八
春畦（諸井）……八二四
春月（生田）……三〇
淳子（山田）……八六五
順子（米澤）……八九六
春涙（押川）……八〇五
照阿（深川）……七〇一
鐘一（須藤）……四五〇
順次郎（細川）……七二六
順助（吹田）……四三四
淳介（薄田）……四四八
春聲（前田）……七三六
春石（岡崎）……一三三
春仙（名取）……六一四
春草（長谷川）……六五四
春草（菱田）……六八二
淳三（松本）……七六九
春洞（西川）……六二〇
春濤（森）……八二七
峻南（益頭）……七五〇
春風（長瀨）……五八八
俊平（本間）……七三二
春葉（柳川）……八四七
春濤樓（鹿間）……三九八
湘南（大久保）……二三五
松年（鈴木）……四四四
小坡（伊藤）……六四
萌々（茅野）……六四
猩々（河鍋）……五一四
庄亮（吉植）……六三六
小蘋（野口）……六三六
小石（巨勢）……八一三
小石（河野）……六四四
繞石（大谷）……一一一
裳川（岩溪）……七五三
正太郎（小山）……五四四
省亭（渡邊）……八五六
如電（大槻）……四〇一
松塘（鈴木）……六三五
樵谷（根本）……六三一
常齋（高田）……四六七
牀山（澁谷）……四〇八
樵山（小室）……三五一
小洒（安井）……八三七
小舟（木村）……二七六
松壽（原）……六七四
蕭々（茅野）……五三五
猩々（河鍋）……一四七
小蘋（野口）……八八八
庄亮（吉植）……三三七
小石（巨勢）……三四四
小石（河野）……一三四
繞石（大谷）……八三
裳川（岩溪）……三五三
正太郎（小山）……九一〇
省亭（渡邊）……一三八
如電（大槻）……四四三
松堂（平田）……六九〇
松堂（湯川）……四六七
章道（三島）……四〇八
象堂（小坂）……三五一
松濤樓（鹿間）……八三七
湘南（大久保）……二七六
松年（鈴木）……六七四
小坡（伊藤）……五三五
松坡（田邊）……一四七
小蘋（野口）……八八八
楠風（村松）……三三七
庄平（灰野）……三三四
勝琅（海野）……一三四
松葉（松居）……八三
遒遠（坪内）……三五三
松陵（山口）……九一〇
恕軒（信夫）……一三八
渚山（西村）……四四三
松宇（伊藤）……六三
小雲（大草）……一三
昇雲（山本）……八七一
蕉園（池田）……三九
湘煙（中島）……五八六
蕉華（椎塚）……三九五
小華（渡邊）……九一〇
象外（高柴）……四六三
勝觀（大智）……一三七
鐘吉（小林）……三四六
昌業（小牧）……三四八
蕉琴（勝田）……二一三
尚吟（矢田部）……八四三
小憲（野口）……六三六
小劍（上司）……三三一
省吾（白鳥）……四三〇
尚江（木下）……二七二
嘯谷（猪飼）……三一

曙山（前田）……七三七
曙夢（昇）……六四一
紫瀾（若月）……九〇〇
四郎（筑波）……五三三
四郎（柴）……四〇四
四郎（九里）……三〇五
四郎（片山）……二一〇
史郎（國枝）……二八九
士郎（尾崎）……一八三
二郎（安成）……八四三
次郎（白河）……四二九
次郎（阿部）……一六
治郎（大藤）……四五七
晉（巖谷）……八三
親愛（多田）……五〇四
信一（牧野）……七四一
信一（林）……六七一
進一郎（竹添）……四九四
信一郎（登張）……八七四
眞海（長尾）……四七八
新九郎（國澤）……二一三
眞行（上）……五四一
緒侯（衣笠）……五四一
信齋（上杉）……九一〇
振策（内藤）……五四六
新三郎（宮島）……三五一
信山（竹内）……七九一
進二（堀）……一一七
眞次（西村）……六六一
眞水（阿出川）……六九四
深水（伊藤）……六九四
眞生（湯淺）……五四六
新泉（堀内）……一二六
新川（山田）……三五一
新藏（河合）……一四五
新太郎（山下）……二六
信德（山脇）……八七四
眞夫（高村）……四七八
晉風（勝峯）……二一三
眞平（角田）……五四一
審也（渡邊）……九一〇
昼樓（横山）……八八一

〔ス〕

信德（山脇）……八七四
眞夫（高村）……四七八
晉風（勝峯）……二一三
眞平（角田）……五四一
審也（渡邊）……九一〇
昼樓（横山）……八八一
穢庵（平福）……六九四
水蔭（江見）……一一七
翠雲（小室）……三五一
隨軒（服部）……六六一
水香（市村）……六六一
水哉（坪谷）……五四六
翠山（大河内）……一二六
翠章（西山）……六二八
翠石（大橋）……一四五
水棹（粟津）……二六

水巴（渡邊）……九一二
醉梅（佐瀬）……三七九
醉夢（西村）……六二五
醉茗（河井）……二三四
季雄（巖谷）……八九
末雄（後藤）……三四五
季吉（青野）……二
季知（三條西）……三九五
季治（東儀）……五五一
清臣（大澤）……一二七
杉園（小杉）……三三三
杉邨（小杉）……三三三
資夫（宮島）……八〇〇
資之（松波）……七六四
進（喜多村）……二六七
進（進藤）……四三四
正一（成島）……六一六
正一（外山）……五六四
政一（佐久間）……三七三
政一（佐々）……三七八
精一（岡）……一五五
青果（眞山）……七七三
青崖（國分）……四一三
青園（島）……三一七
清治（井汲）……四一三
精二（谷崎）……三一七
青兒（東郷）……七七三
清修（關澤）……七四九
清次郎（島田）……一〇
清吉（五味）……三五〇
晴吉（土子）……五三七
成吉（藤森）……七一八
霽月（村上）……八〇七
西湖（鈴木）……四四五
星湖（中村）……六〇五
晴湖（奥原）……一七六
星江（兒島）……三二〇
成齋（重野）……三九八
正齋（柳田）……八四九
青山（鹽谷）……四〇六
靜山（南）……七九一
靜兒（加藤）……二一七
清治（井汲）……三七
精二（谷崎）……五一九
青兒（東郷）……五五三
清修（關澤）……四五三
清次郎（島田）……四一五
靜水（橋本）……六五三
晴翠（奥原）……一七六
臍齊（小林）……三四六
井々（竹添）……四九四
青々園（伊原）……七七
醒雪（佐々木）……三九八
井泉水（荻原）……三七五
青邨（前田）……七一七

成美（一條）……六〇
青楓（津田）……五三五
青峰（島田）……四二六
青峰（内田）……一〇二
青鳳（望月）……八二六
栖鳳（竹内）……四八九
西望（北村）……二六七
正明（結城）……八七四
青葉（柿内）……二〇五
青嵐（永田）……五八九
碩園（西村）……六二六
晰江（入澤）……八二
碩水（楠本）……二八六
石創（坂本）……三六九
關造（三浦）……七七五
石埭（永坂）……五八三
石鼎（原）……六七五
石眠（首藤）……四二六
是眞（柴田）……一三一
せゞらぎ（澁谷）……四〇八
世大（花田）……六六五
雪柯（松田）……七六三
雪舸（島）……四三三
雪香（都鳥）……四八九
雪齋（島）……二六七
雪節山（鹽谷）……五四六
雪竹（近藤）……五三〇
雪鳥（坂本）……一六九
雪腸（加藤）……二〇六
雪田（鳥居）……四四五
雪蓬（根本）……二一三
雪嶺（三宅）……七九四
施門（太宰）……五〇一
僊（中林）……五九八
千甕（小川）……一七〇
千溪（藤波）……七一六
省軒（龜谷）……二三一
精十郎（中丸）……六〇〇
仙子（水野）……七八六
泉三郎（鈴木）……四四五
千秋（岡村）……一六一
千秋（下村）……四二五
善四郎（坪谷）……五四六
善臣（谷森）……五三〇
千仞（岡）……一六九
善藏（葛西）……二〇六
善太郎（澤村）……三九二
善太郎（鈴木）……四四五
仙之助（勝島）……二一三
仙坡（勝島）……二一三
川柳（碧流舍）……七三三
洗鱗（桐谷）……二八〇
仙齡（畑）……六五九

〔ソ〕

總一郎（田中）……五二一
挿雲（矢田）……八四三
草雲（田崎）……五〇三
宗悅（柳）……八四九
宗悅（太田原）……二三七
壯吉（永井）……五七五
宗芹（永尾）……五七九
桑月（渡邊）……九二一
惚齋（奥宮）……二七七
宗治（百田）……八二〇
象二（田島）……五〇三
惣七（高間）……四七七
草城（日野）……六八六
惣次郎（小倉）……一七九
漱石（夏目）……六二三
籟川（三島）……七八一
莊太（木村）……二七六
曾太郎（安井）……八三七
惣之助（佐藤）……三五五
莊八（木村）……二七六
草風（長野）……五〇三
藻風（竹友）……八四九
草平（森田）……二三七
爽邦（今井）……五七五
藏六（濱邨）……五七九
素岳（有島）……九二一
素軒（野村）……二七七
素行（内藤）……八二〇
風骨（寒川）……五〇三
蘇子（木下）……四七七
素人（藤代）……六八六
楚人冠（杉村）……一七九
蘇洲（福原）……六二三
蘇水（岡田）……七八一
蘇水（井澤）……四三
素介（野村）……六四三
素石（島道）……四一七
素泉（前川）……七三四
素道（保田）……八三九
疏梅（水野）……七九七
詛風（稻毛）……六八
蘇峰（德富）……五五五
素明（結城）……八五五
巽軒（井上）……七三

〔タ〕

泰（松本）……七七〇
泰（跡見）……一四
大域（成瀨）……六一六
大雲（小村）……三五一
大學（堀口）……七三〇
大觀（横山）……八八一

對月居（飛田）……六八四
大伍（池田）……四〇
大更（岡本）……一六六
對山（日根）……六六六
鯛二（大口）……一三
泰二郎（森）……八三
泰生（水上）……七八二
大蘇（月岡）……五三三
泰三（相馬）……四五七
太一（田邊）……五一五
鯛坊（村田）……八二
大夢（建畠）……五〇七
泰麓（柳田）……八四九
清雄（高野）……四六九
高蔭（岡山）……一六七
節（長塚）……五九三
高胤（國分）……三七
龍太郎（木村）……二七七

隆輝（伊福部）……七七
隆正（野々口）……一三
隆正（大國）……一三
喬松（吉江）……八八
孝丸（佐々木）……三四
瀧太郎（水上）……七八三
瀧太郎（島村）……四一八
琢（股野）……七三三
啄木（石川）……四五七
鐸嶺（平子）……五一五
武男（寺崎）……六八九
武夫（沼波）……五四八
武雄（加藤）……八四九
建樹（大和田）……五九〇
武郷（飯田）……一〇六
武二（水谷）……二四九
武二（藤島）……九九
竹太郎（新海）……四三六

竹の門（筏井）……三一
竹の屋主人（饗庭）……一
武郎（有島）……三三
他山（工藤）……二八八
他石（實川）……六一九
忠秋（渡）……九三
忠孝（池崎）……四
忠周（高田）……四六七
忠朝（藤原）……七一〇
達（矢口）……八三五
辰雄（内藤）……五七〇
辰夫（厨川）……三〇六
龍雄（永田）……五九〇
龍子（海上）……一〇六
辰三（河原）……二四九
龍之（濱井）……九九
楯彦（實）……四三六
嵐平（海上）……一〇七

民樹（細田）……七二九
民藏（島村）……四二七
爲忠（西尾）……六二〇
爲系（冷泉）……八八八
爲紀（冷泉）……八八八
爲守（入江）……八一
多門（山内）……八五三
多里（森口）……八三六
足穗（遠藤）……一二八
坦齋（寺崎）……五四八
澹堂（川上）……三三六
擔風（服部）……六六三
丹麗（石川）……四八
探令（狩野）……三五五
丹陵（村田）……八一三

〔チ〕

千秋（田所）……五〇八

愛雄（小林）……三四七
親子（野口）……六三六
千樫（古泉）……三三八
周延（楊洲）……八七七
力（五十嵐）……三一
竹陰（武藤）……八一
竹隱（高野）……四六九
竹外（姫島）……六八七
竹橋（小野）……一九八
竹溪（森川）……五四八
竹後（松尾）……八二四
千種（木谷）……七六〇
竹山（高田）……二六三
竹紫（水谷）……四六七
筑水（金子）……三一
竹邨（田近）……五〇五
竹堂（岸）……二五六
蓄堂（結城）……八七五

竹坡（尾竹）……一八八
竹風（登張）……五五九
竹圃（水田）……七八四
竹冷（角田）……五四一
十（岡野）……一五九
知全（宮崎）……七九八
秩父（日高）……六八三
千虎（川崎）……一三九
知白（齋藤）……三五八
千亦（石樽）……四九
蚯笏（飯田）……二九
忠（淺井）……八
忠一（飯野）……三〇
忠溫（櫻井）……三七三
宙外（後藤）……三四三
忠孝（鈴木）……四四七
中洲（三島）……七八一

忠助（古手川）……七三
忠太（伊藤）……六五五
忠太郎（安藤）……二七
沖堂（片山）……二一一
山（外山）……五六四
千代（藤村）……七一七
千代（竹尾）……四九〇
千代（瀧田）……四八五
櫻陰（白濱）……四三一
徹（高田）……四六八
蝶衣（杉）……四三九
聽雨（山崎）……八九九
朝雲（齋藤）……三五九
吊花（小笠原）……一五四
長幹（鈴木）……四四八
長吉（釋）……二〇一
迢空（生田）……三五
長江（佐藤）……三八六
朝山

蝶二（中内）……五七九
潮雀（紀）……二七一
長秋（磯田）……五八
聽秋（伊藤）……六五五
聽秋（花廼本）……六六六
蝶介（生田）……三六
長生（小笠原）……一五四
雕蟲窟主人（濱村）……六七〇
嘲風（姉崎）……一五
張輔（高島）……四六三
朝陽（江知川）……一一三
直入（田能村）……五二〇
千代治（矢崎）……八三六
枕河（川口）……一三八
枕山（大沼）……一四一
通勢（河野）……三三五

〔ツ〕

通明（根本）……六三二
通豫（土居）……五五〇
つぎ（鷹取）……四七一
躑躅（岩木）……八三
茂（土田）……五三七
勉（西川）……六二一
彝（中村）……六〇五
恒（木村）……二七七
恒富（北野）……二六四
恒友（森田）……八三一
恒之（四谷）……八九五
粲（小出）……三一〇
艷子（倉田）……三〇一
殺（犬養）……七
殺（木村）……二七七
鶴三（石井）……四三

〔テ〕

適所（山縣）……一一六
鐵園（佐久間）……五三
鐵幹（與謝野）……八三
鐵五郎（萬）……二九七
鐵齋（富岡）……一七三
鐵士（廣瀬）……一七
鐵城（桑名）……三七四
哲次郎（井上）……二〇三
鐵心（小原）……一七
鐵石（大澤）……四四
鐵太郎（山岡）……五
鐵笛（東儀）……七六〇
鐵梅（胡）……六八二
鐵也（水谷）……七八五
哲郎（和辻）……四七九
輝方（池田）……六六三
輝子（足立）……六六三
天溪（長谷川）……八五五
天江（江馬）……一一六
天田士英（田中）……五三
天囚（西村）……六二六
天心（岡倉）……一五二
天隨（久保）……二九七
天泉（荻生）……一七三
天壇（櫻井）……三七四
天年（海外）……二〇三
天風（阿部）……一七
天風（石井）……四四
天放（秋月）……五
天民（松崎）……七六〇
天來（比田井）……六八二
天籟山人（寺崎）……五四七

〔ト〕

東雲（高村）……四七九
桐園（服部）……六六三

冬崖（川上）……三三七
東海散士（柴）……四〇四
東郭（落合）……一八九
等觀（筆谷）……七三
洞巖（新井）……一九
桃岡（八田）……六六〇
東皐（大出）……一二〇
透谷（北村）……二六八
桐谷（河野）……三三五
東山（鈴木）……四四八
冬史庵（辻）……四三四
東州（川口）……二三八
藤次郎（大下）……二三八
桃水（久保田）……二九六
透谷（北村）……二六八
桐谷（河野）……三三五
東山（鈴木）……四四八
冬史庵（辻）……四三四
東州（川口）……二三八
藤次郎（大下）……二三八
桃水（久保田）……二九六
透谷（岩村）……六一〇
東野（元田）……六四八
桐陽（大村）……六九〇
東陽（大槻）……三三一
東洋城（松根）……三〇九
桃郎（大倉）……七八七
椋郎（大關）……六八六
杜園（森川）……二八七
時敏（鹽谷）……四〇九
時彦（西村）……四〇六
冬崖（横井）……八八八
藤村（島崎）……四〇九
桐南（三島）……七八一
東寧（猪瀨）……一九七
桃畝（上原）……七三
東圃（藤岡）……七一三
東畝（廣瀨）……六九七
東明（人見）……六八五
東野（元田）……八一七
桐陽（大村）……一四九
東陽（大槻）……一三九
東洋城（松根）……七六四
桃郎（大倉）……一二六
椋郎（大關）……一二三
杜園（森川）……八二五
時敏（鹽谷）……八七
時彦（西村）……六二六
冬崖（横井）……八八八
得三郎（正宗）……七四八
得二（久保）……二九七
得所（佐瀨）……三七九
獨掌庵（吉嗣）……八九一
篤二郎（尾山）……二〇〇
德太郎（中谷）……五九一
得知（幸堂）……三三四
禿木（平田）……六九〇
德彌（小島）……三三一
德郎（片多）……二〇九
年方（水野）……七八七
兎子（中島）……五八六
俊子（田村）……三八七
俊子（佐藤）……三八七
俊子（中島）……五八六
俊彦（久保田）……四〇九
俊彦（秋庭）……六
利彦（堺）……三六五

年英（右田）……七七八
敏郎（生方）……一〇九
敏郎（楠田）……二八五
橡面坊（安藤）……二七
獨步（國木田）……二九〇
斗麥（五月庵）……三八一
冨兄（高橋）……四七四
友一郎（飯塚）……三〇
軾音（小堀）……三四八
友信（狩野）……三六
知紀（八田）……六六〇
豐一郎（野上）……六三三
豐顯（本居）……八二六
豐吉（秦）……六六〇
豐作（齋藤）……三九九
豐隆（小宮）……三五〇
豐隆（上月）……三三三
豐彦（賀川）……二〇三
虎雄（鈴木）……四四九
虎雄（牧野）……一〇九
虎雄（國木田）……二八五
虎五郎（兒島）……二七
虎次郎（内藤）……五六九
寅治（石川）……四八
寅彦（右田）……四七四
虎彦（郡）……三〇
虎彦（榎本）……三四八
寧（里見）……三六
遯軒（村山）……六六〇
直治（武藤）……八〇五
直次郎（原田）……六七五
直亮（落合）……一九〇
直澄（落合）……一九〇
尚輝（川口）……三三八
直彦（熊谷）……二九九
直彦（正木）……七四六
直文（落合）……一九一
直哉（志賀）……三九七
長男（渡邊）……九一二
夏樹（猪熊）……七六
涙六（村上）……八〇八
楢重（小出）……三三
成之（江川）……一一三
成行（幸田）……三三
南岳（藤澤）……七一三
南山（杉森）……四四一
楠山（蘆野）……一〇

〔十〕

直昭（永島）……五八七
直入（河津）……三三
直吉（松井）……七五四
直子（小川）……一七〇
楠緒子（大塚）……一三七

南翠（須藤）……四五〇
南臺（西）……六三三
南風（堅山）……三一一
南溟（青木）……六七七

〔ニ〕

爾保布（水島）……七八四
西男（田村）……五三一
日南（福本）……七一〇
如是閑（長谷川）……六五五
忍月（石橋）……五二

〔ネ〕

寧齋（野口）……六三七
稔（安田）……八四〇

〔ノ〕

信夫（折口）……二〇一
信子（吉屋）……八九四
信綱（佐々木）……三七五
信行（須川）……四三六
伸（片上）……二〇八
伸（内藤）……五七一
昇（長谷川）……六五五
憲章（四宮）……四〇二

〔ハ〕

梅園（佐藤）……八七二
梅外（石丸）……二八五
梅溪（高須）……四三七
梅谷（田原）……三三六
拜山（吉嗣）……八九一
俳小星（齋藤）……三五九
背水（高木）……四八〇
拜石（黒木）……五三八
棋仙（平井）……六八七
梅莊（山本）……八七二
梅莊（久志本）……二八五
梅潭（杉浦）……四三七
梅之助（別所）……七二四
楳嶺（幸野）……三三六
博（吉田）……八九一
雨（濱谷）……六七〇
雲（西山）……六二八
華（松本）……七七〇
柏軒（松井）……七五五
光（原）……六七六
秋（北原）……二六五
水（春日）……二〇七
水郎（大場）……一四六
星（平木）……六八八
石生（田崎）……五〇三
傑（土田）……五三八
村（厨川）……三〇六
白鳥（正宗）……七四八
白亭（石井）……四四四
白羊（溝口）……七八九
白羊（倉田）……三〇三
白葉（中村）……六〇五
白龍（菅原）……四三六
白嶺（吉田）……八九〇
白露（木下）……二七三
白衣（武島）……四九三
一衣（松浦）……七五六
一祀（大西）……一四三
二十一（萱野）……三三三
八郎（中川）……五八一
八郎（尾上）……一九四
初雄（北村）……二六九
初子（河杉）……七七
初子（松本）……七七
初之輔（平林）……六九四
破天荒齋（松平）……七二一
花世（生田）……三六
花蓑（鈴木）……四四二
破魔雄（彌富）……八四六
逸枝（高群）……四八〇
春夫（佐藤）……三八八
明子（平塚）……六九一
春二（川崎）……二三九
晩霞（丸山）……七七三
晩稼（吉田）……八九一
晩花（野長瀬）……六四〇
晩歌（福永）……七〇七
晩古（梶田）……二一一
磐根（安部井）……一五
晩山（竹田）……四九八
晩翠（土井）……五三六
晩遷（安達）……一三
晩村（平井）……六八七
半峯（山口）……八五七
半文錢（木村）……二七八
半嶺（中根）……五九七

〔ヒ〕

美雲（林）……六七二
未翁（桂井）……二一三
ひかる（津田）……五三五
潜（永井）……五七八
斐已（今井）……七九
彦三郎（今井）……七九
久雄（本間）……七三三
秀雄（樋口）……六八二
秀夫（藤森）……七一九
久吉（眞田）……三九一
永（辻）……五三四
壽（松岡）……七五八
恒（星野）……七三五

ヒ
薇山（西）……六三三
非水（杉浦）……四三七
美盛（海野）……一二
美静（福羽）……七〇八
眉仙（福田）……七〇四
秀雄（長田）……五九一
秀夫（高嶺）……四七八
英夫（山内）……三九一
秀次郎（永田）……五八九
秀太（永地）……五九四
秀成（堀）……七三一
秀麿（横山）……八三三
美妙齋（山田）……八六五
百穗（平福）……六九四
百川（依田）……八九四
百三（倉田）……三〇三
百年（鈴木）……四四八
百錬（富岡）……五六〇

ヒク
白蓮（柳原）……六三
葬水（礒）……四四九
豹軒（鈴木）……七九二
廣一郎（前田河）……三五五
廣吉（倉澤）……三〇一
寬（興謝野）……八八四
弘（土屋）……五三九
浩（近藤）……三五二
浩（小野）……一八〇
博史（奥村）……一九八
比露思（花田）……一七九
廣重（安藤）……六六五
廣介（濱田）……二八
廣太郎（杉村）……六七〇
弘光（中澤）……四四〇
寬（上田）……五八四
蘋園（阪本）……九三

フ
楓江（横田）……七九二
風生（富安）……七二七
風堂（富取）……五六二
風葉（小栗）……五六二
不喚（宇佐美）……一八〇
不空（安江）……九八
復軒（大槻）……八六八
房子（大橋）……一三九
武山（木村）……一四六
不二（多田）……二七八
藤朝（西宮）……五〇五
不盡之舍（中村）……六三二
不折（中村）……六〇〇
不仙（茨木）……六六

〔ヘ〕

米華（山岡）……八五五
米遷（久保田）……八〇九
平三（金山）……二九八
米舫（田口）……二三〇
平民（渡）……八〇八
碧梧桐（河東）……二三五
米作（田口）……四八七
碧城（秋山）……一五〇
碧堂（田邊）……一三九
碧堂（小澤）……七三八
碧峯（稻垣）……六四三
碧瑠璃園（渡邊）……四二六
別天樓（野田）……六三九
變哲（海賀）……四〇五
蛸魚（村上）……八〇九
平河士（富取）……二九八
蓬吟（木谷）……二一〇
抱月（島村）……四八七
放江（富士崎）……九一三
芳山（松本）……二三〇
法師（佐久間）……四八七
鳳洲（土屋）……六
芳洲（齋藤）……五一三
鵬心（黑田）……一八五
北海（高島）……六七
芳翠（山本）……九〇七
鳳聲（森）……六三九
忘筌堂（廳田）……二〇二
芳文（菊池）……六三八
泡鳴（岩野）……二三〇
芳崖（狩野）……二二六
芳河士（富取）……二九八
蓬吟（木谷）……二一〇
抱月（島村）……四八七
放江（富士崎）……九一三
芳山（松本）……二三〇
法師（佐久間）……四八七
鳳洲（土屋）……六
芳洲（齋藤）……五一三
鵬心（黑田）……一八五
北海（高島）……六七
芳翠（山本）……九〇七
鳳聲（森）……六三九
忘筌堂（廳田）……二〇二
芳文（菊池）……六三八
寶丹（守田）……八三二
茅田（阪）……六八七
泡鳴（岩野）……二三〇
芳崖（狩野）……二二六
不知鋏齋（馬場）……六六九
佛山（村上）……八〇八
不倒（水谷）……七八五
不如丘（正木）……七四七
文夫（朝倉）……九
文雄（大鐘）……一五〇
文子（三島）……七八二
文彥（大槻）……一三九
普羅（前田）……七三八
文擧（野村）……六四三
文次郎（島）……四二六
文藏（森田）……八三〇
文象（關口）……四五一
文麟（鹽川）……四〇五
二葉亭（長谷川）……六五五

芳柳（五世田）……三三六
牧山（佐藤）……三八九
牧水（若山）……九〇二
暮鳥（山村）……八六九
木堂（犬養）……七〇

〔マ〕

鐵（小泉）……三八
槇の園（金子）……二三三
孫七郎（杉）……四二九
誠（福本）……七一〇
允（山宮）……三九四
正男（鹽井）……四〇四
正夫（福田）……七〇四
正夫（米川）……八九六
正夫（鎌田）……三三八
正兄（福住）……七〇三
正雄（太田）……二七二
正雄（楠山）……二八七
正雄（飛田）……六八四
正雄（久米）……三〇〇
正雄（松岡）……七五九
正臣（阪）……六七八
正辭（木村）……二七九
政方（小野）……一九九
まさを（加藤）……二一八
雅風（吉野）……八九三
正風（高崎）……四六一
眞唉（芳賀）……六四五
正吉（畑）……六八〇
政二郎（小島）……三三三
雅三（藤）……七一七
正胤（師岡）……八二四
正俊（村松）……八九六
政知（美甘）……七〇三
正長（丹羽）……六二八
正直（中村）……六〇四
正直（關根）……四五二
正信（北村）……二七〇
正憲（鎌田）……三三九
正治（姉崎）……一五
正之（岡田）……一五八
正義（大坪）……一四一
まさる（水谷）……七八六
勝（水谷）……七八六
眞澄（藤井）……七一二
麻須美（川出）……二三五
又次郎（武島）……四九二
亦太郎（松本）……七七三
又太郎（毛束）……三一六
又彦（市川）……六〇
松雄（伊藤）……六六
靡天樓（南木）……七九一
眞賴（黒川）……三一〇

〔マ〕

萬吾（小林）……三四七
萬秋（上田）……九二
曼舟（川村）……二五五
曼陀（都）……二七
萬太郎（久保田）……二九七
萬年（上田）……九二
〇丸（西島）……六三

〔ミ〕

三重吉（鈴木）……四四九
澤筑子（正木）……七四七
未灰（渡邊）……九一三
幹雄（春秋庵）……四三三
幹彦（長田）……五九三
操（岸上）……二六一
操子（國分）……三七
水穗（太田）……一三六
未醒（小杉）……三三五
陸郎（清見）……二八〇
みち子（小野）……一九九
道助（江間）……一一七
通藏（東久世）……六七九
至大（松原）……七六六
通治（窪田）……二九五
道彦（津端）……五四三
道守（橘）……五〇六
通恭（井上）……七三
密（靜間）……四〇〇
味津三（佐々木）……三七七
光造（津田）……五三五
光太郎（高村）……四七九
光晴（金子）……二三三
光文（土佐）……五六八
みどり（潮）……九
みれ子（松村）……七七
巳之吉（長谷川）……六五七
實（田中）……三七
實（陸）……二八〇
實（原田）……六七六
未明（小川）……一七
三好（小森）……三五三
眼歩（大森）……一四九

〔ム〕

無極（成瀨）……六一七
無黃（森）……八三三
夢香（上）……九七
夢笑子（原）……六七七
無心庵（高村）……四七八
無想庵（武林）……五〇〇
六福（額田）……六二九
宗立（田村）……五二一
武羅夫（中村）……六〇七
夢郎（奥川）……一七六